

カムラの里を出たい少年と、少年に里に残って欲しい竜人族の双子
姉妹の700日戦争

メリバ上等

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

カムラの里は深刻なハンター不足！そんな中現れた期待のハンター訓練生、主人公！

フゲン「里に骨を埋めて欲しいものだ」

主人公「里長！僕、里を出たいです！」

フゲン「これはいかん！」

なんとか主人公に里に残ってもらおうと、カムラの里のみんなが考えた結果は……!?

ミノト「私たちが」

ヒノエ「結婚ですか？」

これは、里を出たい少年が里から出たり出られなかったりするお話！

目次

1話	始まり！あるいは赤い糸のほつれる音	1
2話	純粹な女の子	19
3話	ちよつとした行き違い	26
4話	この世界の当たり前	34
5話	隠し事	51
6話	贈り物	60
7話	天才（つみ）	73
8話	晩夏の出来事	87
9話	側にいるよ（分岐：ヒノエを心配する）	100
10話	ぬるぬるでつるつるなアイツ	119
11話	えっちな本は大切な事を教えてくれる	140
12話	ぬるぬるでつるつるなあの子	153
13話	それぞれの答え（分岐：ユクモ村に行く）	176

1話 始まり！あるいは赤い糸のほつれる音

カムラの里。

たたら製鉄が盛んな、山紫水明の里である。

武器や防具の加工屋をはじめ、ハンターにとってなくてはならない施設が充実しているが……。

ハンター不足。

現在カムラの里が頭を抱える、悩みの種である。

その原因の一つが、カムラの里の立地だ。

山の中腹を切り開くように作られた里はモンスターの侵入を阻む要塞であると同時に、人の往来も制限する。

太古の昔から、人や物が集まるのは山岳ではなく平地なのだ。

そして、もう一つ。

カムラの里は、一定の周期である災害に見舞われる。

その名も、百竜夜行。

いにしえより続く、狂騒する数多のモンスターが人里へと大襲来する災禍。

原因不明。脅威甚大。

幾度となくこの災禍に見舞われたカムラの里は、その度にこれを退け里を守ってきた。

しかし。

今より五十年前の百竜夜行。

それは、カムラの里に壊滅寸前の被害を齎した。

住む家も。

腹を満たす田畑も。

酒を酌み交わした仲間も。

生涯を共にする家族も。

そして、里を守るハンターも。

五十年前、カムラの里はあまりにも多くを失った。

今ではカムラの里も復興しているが、その爪痕はあまりにも深く。

百竜夜行に対する恐怖は、当時を経験する全ての者に色濃く刻まれ

た。

里を去る者もいた。

里に残る者もいた。

モンスターに食われ故郷の土に骨を埋められないぐらいならと、命を絶つ者もいた。

過程は違えど、辿る結論は深刻な人手不足。

腕利きのハンターが要る。

里の主産業たる製鉄のための貴重な鉱石の採取から、里の脅威たるモンスターの狩猟までをハンターが担う以上、この結論は自明だ。

しかし、里には人がいない。

ただでさえ少ない、命が幾つあっても足りないハンターという職業。

カムラの里のハンター不足は深刻だった。

ハンターがいない。

それ即ち、百竜夜行を退ける希望を欠くこと。

故に、人々は求めた。欲していた。

百竜夜行を跳ね除ける、そんな英雄を。

そして、一人の少年がカムラの里の集会所の門を叩く。

結論から言おう。

少年には、ハンターとして天賦の才があった。

端的に言つてめちゃくちゃ優秀だった。

少年の師はあまりの驚きに、卵を落としたクルルヤツクのモノマネに磨きが掛かったという。

将来有望な少年の登場に、誰もが”明るい未来”を見た。

というのも、少年はカムラの里で生まれ、カムラの里で育った、里の者たちからすれば家族同然の存在だったから。

カムラの里長も、カムラの里は安泰だと肩の荷が降りたという。

が、しかし。

「あの、里長。僕、ドンドルマに行きたいです」

その日、カムラの里に激震走る。

カムラの里に骨を埋めるだろうと誰もが思っていた少年は、あろう

ここか里の外の世界へ興味を示した。
故に。

このような会議が開かれるのも、当然のことなのである。

「……皆、よく集まってくれた。時間も惜しい、始めよう。——【第一回 ツミキに里に骨を埋めさせよう会議】を」

集会所の会議室で、厳かに宣言したのはカムラの里の里長フゲン。
アホみたいな会議名だが声色は真剣そのものである。

「まさか、ツミキが里から出たがっっておるとはのう……何としても【第一回 ツミキに里に骨を埋めさせよう会議】でツミキを里に引き止める策を練らねばならぬ」

フゲンの隣、真っ白な髭を撫でながら溢すのはギルドマネー
ジャー、竜人族のゴコク。

アホみたいな会議名だが、ガチトーンである。
ゲコを付けるのも忘れていたほどだ。

集まった人の中で、アホみたいな会議名を笑う者も指摘する者もない。

皆一様に、緊張した面持ちである。

生唾を飲み込んだ者すらいるほどだ。

その様子から、如何にこれが重大な会議か推し量れるというもの。
アホみたいな会議名だが。

「フゲン。いいか」

「ハモン。構わない、言ってくれ」

真っ白な髪の厳ついお爺ちゃんは、カムラの里の加工屋であるハモン。

軽く咳払いをし、全員を見渡すその目にはかつてハンターとしてモンスターと対峙していたときのような光がある。

「そもそも……どうしてツミキは里を出たがっているんだ？」

その言葉に、確かに……と周りから疑問の声上がる。

里に引き留めようというのだから、里を出たがる目的が分かっていないと建設的な意見など出ようはずがない。

ハモンの疑問はもつともだった。

「むう。それなのだが……」

しかし、眉間を寄せるフゲン。

「おい……フゲン、まさか分からないのか?」

「ああ。俺もツミキになぜ里を出たいのか当然聞いた。だが、それは言えないの一点張りだな……」

会議に参加している者が一斉に顔を顰めた。

ツミキは里を出たがっている。

でも、その理由はわからない。

これでは建設的な意見など出ようはずがない。

「これは難問でござるニヤ。拙者もツミキには里に残って欲しいでござるニヤ。しかし、理由がわからないのであれば……ヒノエやミノトは何か知らないでござるかニヤ?」

静まり返った会議に一石を投じたのは、かつて、フゲンのお供であったアイルーのコガラシ。

彼が話題にしたヒノエとミノトとは、ツミキの幼馴染みである竜人族の双子姉妹である。

竜人族では相当に珍しい幼年である姉妹は、ツミキと共に過ごし、成長してきた、家族と呼んで差し支えないほどの絆がある。

確かに、二人にならツミキが何か話している可能性は高い。

皆の間で期待が高まる。

しかし、フゲンは力無く首を振った。

「それとなく二人にも聞いてみたのだが、心当たりすらないようだった。ツミキは誰にも胸の内を明かしていないとみて間違いない」

「……それだけ硬い意志ということか」

「参るのう……こうなれば、最早手当たり次第になりかねん。それはあまりに非効率じゃろうて。最悪、我々の思惑に勘づいたツミキが自ら里を発ちかねんゲコ」

「それでも、ヒノエとミノトの方が拙者たちよりツミキの事を知っているでござるニヤ。あの二人の意見も聞くべきだと愚申するニヤ」

「違いない。……フゲン、あの二人は何処に?」

集会所に件の竜人族姉妹の姿はない。

ハモンの問いに、フゲンは空を仰ぎ眩いた。

「今の時間なら……恐らく、ウツシの元でツミキと共にハンターの訓練をしている頃だろう」

そして、同時刻。

四方を崖に囲まれた天然の囲い、その中心に位置する平地で交差する二つの影があった。

片や身の丈に迫るほどの大盾と身の丈を超える槍を構えた美しい黒髪の少女。

片や小振りな盾と斬るよりも潰すことに重点を置いた肉厚なククリナイフを構える少年。

互いの呼吸、間合いを凶るようにジリジリと詰め寄っていた二人。

「やあああああつ!!」

”ランス”と呼ばれる武器を構えた少女が、ドンっ！ と力強い踏み込みの刹那、閃いた右手が少年目掛けて槍を突き込む。

人はおろか、モンスターすら串刺しにしてしまう一突きだが、相対する少年の口元には恐怖はなく、むしろ笑みが浮かぶ。

この程度全く脅威ではないという余裕があった。

そして、それは傲りではない。

何故なら、少年にはハンターとして天賦の才があった。

百年に一人……いや、もしかしたら千年に一人と、そう数えられるほどの才能があった。

人とモンスター。

両者の間に隔絶としてある、”生物としてのポテンシャル”の差。しかし、だ。

ハンターは天を見上げ、クソ喰らえだと中指を立てた。

高みを目指して知恵を、技術を、想いを、次世代に繋いでいった。そして、その果てに少年へと辿り着いたのだ。

少年の名はツミキ。

誰もが彼をこう称えた。

生命の極み「ツミキ」

地球の答え「ツミキ」

その少年が、少女のランスの一突きなど避けられないはずが――。

「ぐあああああああつー！」

――ないの、だが。

ツミキは普通に少女の一突きを胸にくらい、杉山に足を運んだ花粉症の人ぐらい咳き込んでいる。

これが模擬戦用の刃先を潰した木製のものでなければ死んでいただろう。

「……あー、ミノトの勝ち、だな」

「――やった！ やりました、ヒノエ姉さま!! ツミキに勝ちました!!」

ナルガ装備とジンオウ装備に身を包む青年、ウツシのジャツジに、ミノトは訓練用のランスを放り投げ、ぴよんぴよん跳ねて喜びの様子。

その足元では、よほど痛かったのかツミキが「うぐうおおうおおおお」とアオアシラみたいな声をあげてゴロゴロ転がっていたりする。

「見てましたかヒノエ姉さま！ 私、ツミキに勝ちました!! 勝ったんですー！」

「もう、そんなに慌てなくてもちゃんと見てましたよ。良くやりましたね、ミノト」

「ヒノエ姉さま……!!」

「わっ。もう、うふふ。しょうがないですね。ほら、よしよし。よく頑張りました」

ミノトと瓜二つな容姿を持つ少女、ヒノエ。

ヒノエの胸に飛び込んだミノトの頭を優しく撫でるその表情は柔らかく、見るものに母性を感じさせる。

まだ幼いながらも、その包容力にママみを見出す男も少くないと

か。

美少女姉妹がきやつきやうふふしてる横で、ウツシは「あー……」と地面を見下ろしていた。

「ツミキ、立てそうか？」

「ふー！ ふー！ ふー！」

「無理そうだな……」

蹲り、胸を押さえて血走った目で荒い息を繰り返すその姿は変質者にしか見えない。

これが最強のハンターの卵だというもんだから驚きである。

少なくとも、今の光景だけを見たのなら誰も信じないだろうとウツシは思う。

「でも、なんで避けなかったんだ？ ツミキ、お前なら簡単に避けられただろう。俺はお前が負けるとは思ってたよ」

「ハア……ハア……敗北者……？」

「どういう耳をしてるんだ？」

「ふっ……腕を上げたね、ミノト」

あ、誤魔化そうとしてるなとウツシは気付いた。

「……あら。ミノト、ミノト」

「はい、なんででしょうかヒノエ姉さま」

「巫女服の前がはだけていますよ。……うふふ、ミノトは大胆ですね」

「……え？ あ、あ、きやあああ！」

あー、これだなあ、とウツシは気付いた。

「ツ、ツミキ！ 見てはいけませんよね!？」

「ふっ……ミノト、敗者は潔くおやつのお菓子団子を譲るよ。ヒノエと食べるといい。いやあ、残念だな。今日のうさ団子はツナで僕の好物だったんだけど。あ、ミノトの好物でもあったよね」

「誤魔化しましたね!？ 今誤魔化そうとしましたね!？ ……見た、のでしょう！ このっ、へ、変態っ！ ツミキは変態ですっ！」

「失敬な。仮に見たとしても……見てはいけないけども。見てはいないけどもし仮に僕の頭にミノトの普段は隠されてる柔らかさそうなところとか白い肌が刻まれているとするなら、それはたまたま目に入っ

たという表現こそが正しいのであって、ミノトのそれは言いがかりに等しいと僕は思う」

「ツミキ、ミノトのインナーは何色でしたか？」

「黒！ あっ」

「しつかり見てるじゃないですかー!!!」

「いだっ!? ちよ、動けない僕を踏むのはやりすぎじゃない!? あだあ!? 痛いってー!」

今日も平和だなあと、ウツシはヒノエの隣でお茶を飲んでいた。

ヒノエはうさ団子を食べていた。

「このっ！ このっ！ このっ！ ツミキのすけべ！ 変態！」

「いだっ！ あだっ！ ぐえっ!? ちよ、ちよ待って、ヒノエ！

ちよつとミノト止めて!? うさ団子は後にしてお願いだから!!」

「ツミキ」

「なに!？」

「うさ団子は冷めても美味しいですけど、冷める前はもつと美味しいんですよ」

「だから何なの!？」

ヒノエは特にツミキを助ける気はないらしい。

積年の相手について白星を上げたと思ったら、その相手は自分のインナーに見惚れていてそれが勝因になりました。

純粋に技量で食らいつこうと足掻いていたミノトに、この結果はちよつと憤慨ものであった。

もちろん、それを姉であるヒノエも分かっている。

真剣勝負の最中にすけべ心を出したツミキが全部悪い。

Q E D。

世の中は美少女に甘くできている。

「理不尽でしょ……!!」

「そういうものだ、ツミキ。諦めろ」

こうして日々、少年は大人へと成長しているのだった。

またまた同時刻。

「良いアイデアがないでござるニヤ……」

会議は死んでいた。

皆が皆、椅子の上でぐでーっとしていた。

ツミキが里を出たがる理由がわからないのだから、こうなるのも当然だった。

出たアイデアも決め手にかけるものばかり。

もうこれは無理か。

誰もがそう思い始めた頃。

「誰か嫁に行つて家庭を持ってばこの里から離れられなくなるんじゃないかな
いか……？」

ぼそり、と。

誰かが呟いたその言葉に、ギルドマネージャーゴコクが目がきらー
んと光る。

「そーれ！ じゃあ!! ゲコ!!」

ガタツと椅子を蹴倒したゴコクの言葉に、その手があったか……！
と声上がる。

会議がにわかに熱を取り戻し始めた。

「いや、しかしだ。この里にツミキと同年代の女子はいないぞ」

「茶屋のヨモギちゃんが居るじゃねえか」

「……ヨモギはまだ十一歳だ。殺すぞ貴様」

「お、おおう、悪かったよそんな怒らないでくれハモンさん」

「うちの娘はどうだ？」

「コミツちゃんだっけ？ 七歳だろ、頭沸いてんのか？」

「あのナルガ装備の上位ハンターさんは？」

「いやあ……歳離れすぎだろ、流石に……」

「しかし、改めてみてもツミキの同年代ほんと少ないな……」

ボソリと呟かれた一言に、しゅんと空気がなえるように皆の顔が暗
くなる。

子どもが少ない。

いかに復興を果たしたといえど、五十年前の百竜夜行の爪痕を、こういうところに感じてしまう。

やはり、ツミキにはこの里に残ってもらわなければならない。

「確かに同年代の人の子はおらん。じゃが、ヒノエとミノトがおるゲコ」

「……ゴコク殿。御言葉ですが、ヒノエとミノトは……」

「フゲン、分かっている。ヒノエとミノトは竜人族。人間ではない」

確かに、ヒノエとミノトはツミキと歳も近く、なおかつ将来必ず美人になるだろうと誰もが確信する容姿を持つ。

本人たちの気持ちはともかく、この二人に迫られて落ちない男はいないだろう。

しかし、フゲンが引つかかったように、ヒノエとミノトは竜人族であり、人ではない。

人は人と。

竜人族は竜人族と。

番は、同種族同士でなるものだ。

そこに、どうしても超えられない種族の壁がある。

「じゃが、それがどうしたゲコ」

「ゴコクは力強く首を振る。」

「太古の昔、人は言った！ 恋はハリケーン！ 愛の前に種族など関係ない！ 前例がない？ なら前例になればいいのじゃ！ ゲコ！」

前例？ ないなら作れ。

遙かな時が世界に前例をいくつも作った。けれど、いつだって一番最初は前例がないものなのだから。

ゴコクの熱い叫びに感化して、「そうかも……」と会議に熱が戻り始める。

風が吹いていた。

何か大きな……そして背中を押してくれるような、熱い風が。

「確かに……ヒノエとミノトなら……！」

「ミノトちゃんは知らんが、ヒノエちゃんは明らかに……だしな！」

「それなら……良心も痛まねえ！」

「いける……」

「いけるぞ、このアイデア……!!」

「これはいいのかハモンさん」

「……当人にその気があるのなら問題はないだろう」

皆の様子を見たフゲンが、うむ、と頷く。

そして、纏めた。

「よし！ ではツミキが里に骨を埋めるために、カムラの里で家庭を
持たせる方向でいこう！」

ぶつちやけ、みんな長引く会議で疲れていた。

それから翌日。

溪流と山々に囲われた大自然、そして朽ち果てた社。

大社跡とギルドに名付けられたフィールドをガシャガシャと金属
音を響かせ歩く人影が一つ。

「なんか体だるいな……ミノトのやつ思いっきり踏んだなこれ……」

ハンター訓練生ツミキ。

ウツシ教官から課された、アオキノコ五本の納品クエストの最中
だ。

コキコキと体を動かして調子を確認している様子。

昨日、ミノトに踏まれた影響だろうか。

ミノトの照れ隠し（物理）が終わった後、ヒノエが簡単に手当をし
てくれたのだが、どうやら完治とはいかなかったみたいである。

流石は竜人族といったところか。素晴らしい膂力だ。

「でも、休むわけにもいかない。今日も一日頑張ろう。えい、えい、む
ん」

気合十分。

パン、と両頬を両手で叩いたツミキは、体の気怠さを感じさせない

軽快な動きで山を登り始めた。

人は、目的なしでは頑張れない。

ゴールなく走り続けることはできない。

終わりがあるから、苦しい今を頑張れる。

それが命を投げ売りするような、ハンターという危険な生き方では特に顕著だ。

だから、当然ツミキにも目的があった。

ハンターを続けるゴールがあった。

それは、

「早く立派なハンターになって、大っきい街に行く。そこでいっぱい稼いでからハンターを辞めて……そして、可愛いお嫁さんを見つけて、結婚するんだ！」

私利私欲まみれではあるが。

一応、こんなゴールがあった。

時は遡ること数年前。

ツミキ少年は、双子の竜人族の一人に恋をした。

恋をして、諦めた。

人と竜人族。

二つの種族には、決して超えられない種族の壁がある。

——寿命。

これが、決定的に違っていた。

片や、長く生きても百年が精々の人間。

片や、三百年生きても元気な竜人族。

もし、仮に。

ツミキが双子姉妹のうちの一人と結ばれていた場合。

時が経てばツミキは先立ち、伴侶を一人にしてしまうだろう。

これは絶対だ。

寿命に差があるのだから、必ず訪れる未来なのだ。

一人残される寂しさをよく知っているツミキは、だからこそ、恋心にそつと蓋をした。

「まあ、告白しても無理だったろうけどさ」

それはそれ。これはこれ。

ともかく、そんな事情もあつて。

ツミキは、早く里を出たいと思っていた。

「僕が今年十五歳だから……十七ぐらいには里を出ないとなあ。結婚するなら若いうちが一番つて父ちゃん言つてたし」

その父ちゃんの言葉が、若ければいっぱい交わっていっぱい子どもを作る体力があるからな！ ガハハ！

といった意味合いなことをツミキは知らなかった。

とはいえ、生物として人間より圧倒的に“強者”として君臨するモンスターが生態系の覇者として存在する世界だ。

人の命が軽ければ軽いほど、より多くの子孫を残していくために婚姻年齢は下がり続ける。

都市と地方で若干の差異はあれど、おおよそこの世界の平均婚姻年齢は男で十七、女で十五。

ツミキの目標は、そうズレたものではなかった。たまたまだけだ。

「それに、母ちゃんも結婚は若いうちにしておきなさいって言つてたもんな」

その母ちゃんの言葉が、若い方が夜の下半身事情が捗ると言つた意味合いなことを、ツミキは知らなかった。

特に説明の必要はないのだが、ツミキの両親はドスケベだった。その遺伝子を受け継いだツミキが潜在的ドスケベであることは疑

いようがない。少なくとも。

「――お」

ヒュンと空気を割く刃風。

潰すことと断ち切ることを両立させた、“潰して断つ”という脅力の暴力を成立させる巨体と、その巨体にあるまじきスピード。

モンスター。人間には不可能な生物としての基礎能力の高さが理不尽を完成させる存在。

林の暗がりに潜み、ツミキを狙っていた巨体が紅い眼の輝線を残し

ながらツミキに飛びかかった、刹那。

「——ほっ、とっ、とりゃあ!!」

その刹那の出来事を一言で説明することは難しい。

木々を薙ぎ倒しながら弾丸のように跳躍したモンスターは、その前腕部に発達したブレードのような翼を、リアアットのようにして振り抜いた。

それをツミキは地面スレスレの低空バク宙で躲した直後、両脚が大地を踏みしめるや否や、バク宙の最中に抜刀していた片手剣の盾を構え大跳躍。

アッパー気味にモンスターの横腹を痛打しながら宙に躍り出たツミキは、白い糸のようなものを使って黒い巨体の元へ錐揉み回転をしながら突っ込み、その頭部へ片手剣を叩きつけた。

この間、僅か一秒。

最早、常人では捉えることすらできない攻防だった。

完璧な奇襲を成功させた筈なのに痛烈な一撃を頭部に貰ったモンスターが、たまらずバクステップで飛び退る。

ようやくその全貌を表したモンスター。

黒い巨体に紅い眼、そして剣のような翼。

迅竜ナルガクルガ。

モンスターの中でも特に強力な種である飛竜種。

熟練したハンターが万全の準備をようやく討伐できるような、そんな相手だ。

間違ってもハンター訓練生が会敵していい相手ではない。

「ん……ウツシ教官の絵巻で見たことあるな。確か……ナルガクルガか。見るのは初めてだけど、いきなり奇襲とは随分じゃん。僕、お前に何かしたっけ」

首を捻るツミキだが、ナルガクルガは全力の警戒を持ってツミキを睨め付けている。

動けば殺す。

動かなくても殺す。

お前を、排除する。

そういう絶殺の意思がナルガクルガにはあった。
まるで、”身近に迫った脅威を一刻も早く排除したい”と、そう叫ぶように。

「アオキノコ取ってくるのがお題だし、お前に迷惑してるって人もいない。僕にお前を狩る理由はないんだけど……」

それでも、ツミキは剣を握りしめる。

「そっちがその気ならしょうがない。僕だってハンター訓練生だ。人に害をなすモンスターは狩猟する。そういう関係だろう、僕たちつて」

迅竜が吠える。

鬨の声を上げるツミキと迅竜の鬨はこうして始まり、十分後、迅竜は討伐された。

……少なくとも。

少女のランスの一突きよりも何十倍も速く強い、迅竜の横薙ぎは簡単に避けてカウンターを叩き込めても。

迅竜の横薙ぎよりも何十分の一程度の遅く弱い、インナーをチラつかせた少女のランスの一突きは避けられずモロに食らってしまふ。

その程度には、ツミキはドスケベだった。

一方その頃竜人族の双子姉妹は！

「……今、なんと?」

「あらあら……」

脳が理解を拒否っているのか、口をパクパクさせながらようやくと声を絞り出したミノトと、困ったように、でも楽しそうに頬に手を添えるヒノエ。

二人の少女を前に、フゲンはもう一度同じ文言を紡いだ。

「ツミキと結婚して家庭を持ってあいつにこの里に骨を埋めさせてほしい。」

「聞き間違いないやなかったです……!!」

頭を抱えるミノトの横で、やはり楽しそうにヒノエはあらあらしていた。

「どうして！ 私たちが！ ツミキと！ その！ ……そのっ!!
けっ……けけケッ、けこっ!!」

「落ち着いてくれミノト。私たちがじゃない。重婚は……流石にダメだろう」

「子どもを籠絡しろっていうのも流石にダメな分類だと思いますよ!?」

「だが、カムラの里にツミキと歳の近い女子は二人しかおらぬのだ」

「だからってそんな……！ あまりにも勝手が過ぎます里長！ 私はともかく、ヒノエ姉さまの気持ちはどうなるんですか！」

「私は、ツミキと結婚するのも良いなあって思いますよ、ミノト」

「ヒノエ姉さま?!」

「よし。頼めるが、ヒノエ」

「ええ。謹んでお受け致します、里長」

「だめっ!!! 絶対ダメですから!! ヒノエ姉さま！ だめです!! あんなすけべな奴とヒノエ姉さまが……けっ、けけけ、けっこん……なんてだめです！ 私は認めません！」

「あまりにも勝手が過ぎるぞミノト。ヒノエの気持ちはどうなるんだ」

「いくら里長といえどしばきますよ!!」

フゲンに食ってかかるミノトだが、ヒノエがツミキの事を想っている以上、もうどうしようもない。

賽は投げられた。

投げられたのだから、後はどこに着地するかだけ。

ツミキ少年のどきっ！ カムラの里で美少女竜人族姉妹と共同生活! 誘惑が強すぎて理性が限界を迎えそうなんだが、ポロリもあるよが始まった!

「私は認めません！ 絶対に絶対にぜええつたいに……! ツミキとヒノエ姉さまがなんて……! 認めませんからね!! もし良い雰囲気

気にでもなろうものなら……！ 私は何をするか分からない……！！」
「ミノトは、私とツミキが結婚するのは嫌ですか？」

「嫌に決まっています！ だって……ツミキはすけべな男ですヒノエ姉さま！ きつとヒノエ姉さまと結婚すれば、毎日あんなことやこんなことをヒノエ姉さまに……！」

「あんなことやこんなこと？」

「ヒノエ姉さまは知らなくていいんです！ とにかく！ 私は断固反対です！」

多分。

おまけ。

Q. ツミキとはどんな人ですか？

ヒノエ「素敵な方ですよ。優しく、楽しくて……哀しい人」

ミノト「すけべな人です。ヒノエ姉さまには相応しくありません」

フゲン「ハンターをして長いが、彼奴以上のハンターとしての才を俺は知らん。……ああ、ツミキは古い知り合いから託された子でな。感慨深いよ」

ゴコク「凄まじき才を持った子どもゲコ。ツミキなら……もしかすると、百竜夜行に終止符を打つことが出来るかもしれない。そう思わずにはられないゲコ」

コガラシ「確かにツミキ殿は天才でござるニヤ。しかし……赤ん坊の頃からツミキ殿を見ていた拙者には、楽しくて笑って悲しくて泣く、普通の男の子にしか思えないでござるニヤ」

ウツシ「たまに、ツミキの才能が怖いときがある。あれはもう、子どもには行き過ぎた”力”だ。だからこそ、ちゃんと大人が見守っていなきゃいけないと思ってる」

ハモン「……天才だろうが何だろうが。年端のいかねえガキだ、あいつは。……だからこそ、あいつに頼らないといけない時代が、俺の敵だ」

ヨモギ「うーん……お兄ちゃんがいたらこんな感じなのかなあつて。あ、イオリはツミキさんのこと兄さんって呼んだことあるんだよ！ これ内緒ね！」

イオリ「そうだね……僕に兄がいれば、こんな感じなのかなって思うよ。あ、ヨモギは確かツミキさんのことをお兄ちゃんと呼んだことがあつてね。あ、これは内緒でお願いします」

2話 純粹な女の子

人と違う。

多様性といえば聞こえはいい。

けれど、”どうして自分はみんなと同じじゃないのだろう”と悩むことまでは止められない。

何かが違えばそこには優劣が生まれる。

違いに優劣を付けないことが社会が目指す多様性なのであれば、違いに優劣を付けてしまうことは、十分な社会性を獲得していない子どもには有りがちなことなのだろう。

いつか大人になれば笑ってしまえるほどの事だとしても。

誰か教え諭してくれる大人がいれば明日には消えてしまうようなことだったとしても。

だからといって、当人が抱えた”人と違う”ことへの劣等感が、小さなものになるわけではない。

当時のヒノエは、そういう感情を抱えていた。

四本しかない手の指。

三本指に踵が突き出た鳥のような足。

竜人族にはありふれた手足の造形で、人間には異形に映る手足の造形だった。

人里で育ち、人の中で情緒を育てて行ったヒノエには、人と違うことがとても恐ろしかった。

そして、タイミングが悪いことに。

この頃のカメラの里はとある嵐の夜に運び込まれた赤ん坊の一件もあり、とても身寄りのない子どもに構っていられるほどの余裕が誰にもなかった。

ポツンと一人きりになったヒノエは、”お前は仲間ではない”と、そう言われているような気がしたのだ。

どうして私の手足はこんなにも醜いのだろう。

ヒノエにとって仲間外れの象徴だった手足を見るたびにそう思うようになり、いつしか分厚い手袋とブーツで、それを隠すようになって

た。

手足を隠している間だけは、みんなの仲間に入れてもらえるような、そんな気がしたのだ。

けれど、だからなんだというのだ。

隠す。

それは見せないこと。

ヒノエは恐怖に蓋をして、隠すことで笑顔を作った。

ヒノエの中の、人と違うことへの恐怖は残ったままで、いつか本当に爪弾きものになる恐れは無くならないばかりか、日に日に大きく強くなっていく。

もうヒノエは、人前で手袋とブーツを脱ぐことが出来なくなっていた。

だから。

「ヒノエちゃんの手はきれーだね。白くて、細くて、暖かくて……優しい感じがする。初めて見たけど、僕、すっごく好きだ」

その言葉にどれだけ救われたのか。

それは、きつとヒノエにしか分からない。

最近なんかミノトの様子がおかしい。

おやつのお菓子団子をパクつきながら、ツミキは首を捻っていた。

例えば、朝。

里でヒノエを見かけ、挨拶しようとして近づいた瞬間、

『それ以上ヒノエ姉さまに近寄らないでください！』

ミノトが両手を広げてツミキをブロックしにすっ飛んでくる。

白い巫女服も相まってウルクススを思わせる迫力だった。

例えば、昼。

一緒にご飯を食べようとヒノエの隣に座ろうとすると、

『……失礼しますね!!!』

どかつ！ とミノトが割り込むように座る。

飛び込んでくるフルフルを彷彿とさせるパワーだった。

例えば、夜。

湯上がりで涼んでいるヒノエに手を振ろうものなら、

『ヒノエ姉さまをすけべな目で見ることは許しません!!』

両手を振り回したミノトが目を潰してやるとでも言わんばかりに立ち塞がる。

ゴシヤハギを想起させる暴れ具合だった。

ミノトがヒノエのことになると見境がなくなるのはまあ、いつものことと言えbaumいつものことだが、最近は何というかこう、ちよつと過剰すぎじやなからうか。

大まかそんな感じの違和感をツミキは抱いて、抱いていたから、ヒノエに聞いてみた。

「最近なんかミノト変じゃない?」

「そうですねえ。はむっ……美味しいですね〜」

ツミキの隣でうさ団子(八皿目)をパクつくヒノエが幸せそうに目を細める。

え、ミノト?

フゲンに集会所に呼ばれて別行動中なのであった。

鬼の形相でツミキを睨みつけていたあの顔を、多分ツミキはしばらく忘れられそうにない。

「ミノトにも色々あるんです。女の子ですから」

「その色々が僕は気になるんだけど」

「うふふ。女の子の秘密を探るのは感心しませんよ」

「女の子の秘密はむしろ積極的に見たいよ」

「今のはちよつと引きました」

「真顔やめて」

男の子は美少女の真顔に弱い。

ペロリ、とうさ団子(九皿目)を食べたヒノエが、ちろりと舌先で唇を舐める。

薄い桜色の唇を、朱色の舌先が掠めていく。

ツミキはガン見していたが、ヒノエは気付いていないのか小さく欠伸をこぼして眠そうだ。

ぽかぽかと陽気なお日様に見守られて、ツミキも眠気を覚え始めた。

ちよつと寝ちやおうかなと思考がぼやけた、その瞬間。

「本当に里を出たいのですか？」

「そりやあ勿論——どうええ!?!」

「あらあら。……本当に、里を出たいのですね。……ふうん」

気が緩んだ間隙を突く。

ツミキが無防備になった瞬間をコンマ数秒の狂いもなく狙い澄ました一言。

——ナンデシツテルノ。

声にならない声を上げるツミキの様子で、「ああ、本当に里を出るつもりなんだ」と確信を得たヒノエの目がすつと細まった。

生来の切長の目元に熟考の色が宿る。ミステリアスな美しさを醸し出すヒノエにツミキは見惚れていた。バカなの？

「どうして里を？」

「え……それは……っていうか！ 里長にしか言っていないのにどうしてヒノエが知ってるの！」

「そんな事はどうでもいいんです。私は、どうしてツミキが里を出たのかが知りたいのですから」

「僕はなんで知ってるのかが知りたいよ!?! まさか里長から……」

「あら、巫女服の袴にほつれが」

「!?!?!」

!!ツミキ、怒り状態のディアブロスも呆れるほどの反射でヒノエの袴を隅から隅まで一瞬でチェック！

あまりの速さに風が吹いたのかと錯覚するほどの早技だった。

「ふ、ふーん。ほつれかあ。そうかあ、ほつれかあ。ほつれはいけないね……。だってほつれだもんね……。引っ張ったら袴がするするって解けちゃうもんね……。解けるの？ 袴って解けるのかな？ どう思うヒノエ？ 解けるの？ これは試してみるのも良いと思うんだ。だっていつかいきなり解けるよりは心構えが出来る今の方が良いよね？ それでどうやら袴の外側にはほつれはないみたいだけど

……もしかして……ごくり、内側……？ ほつれ、見たいな。実は僕、大のほつれ好きでね、とくに服のほつれには目がないんだ。だから「大丈夫ですよ。私の気のせいでした。どこもほつれていません」「そっか……それは……よかったね……」

「あらあら。声に元気がありませんよ、ツミキ。眠くなってきましたか？」

うふふ、と笑うヒノエ。

この女、天然なのか計算してやってるのか。

上品に口元に手を当てるその仕草からはいまいち掴みきれない。

「気のせいか……気のせいは誰にでもあるもんね」

こいつは天然のバカ（断言）

「うふふ。どうやら私の勘違いで気を揉ませてしまったみたいですね。なら、お詫びに……」

「……ん、わ、わわっ」

くいっ、とヒノエに引き寄せられたと思ったのも束の間。

次の瞬間には、ツミキの頭はヒノエの太腿の上に乗っていた。

膝枕というやつである。

「今日はもう訓練もありませんし。眠たいのなら……どうぞ。私の膝で良ければ、お貸ししますよ」

頭部に柔らかく、しかし程よい弾力の感触。

至福とも言える体温の暖かさがじんわりと染み渡る。

ほすん、と頭に優しく手を置かれた思えば、労るようにゆっくりと撫でられ、すけば心より心地よさが勝ったツミキは声にならない声を上げた。

「ふ、ふわあああ〜」

正直見るに耐えない緩みきった顔をツミキはしていたが、ヒノエは幸せそうに小さな笑みを溢していた。

竜人族特有の四本の指がツミキの頭を撫でる。

髪の間を通してみたり。

耳を軽く摘んでさわさわしてみたり。

頬を掠めていく指先が心地よかった。

手袋はしていない。

白い四本の指が、愛おしいものに触れるように優しく。

「うふふ」

ふと、昔を懐かしんで。

ヒノエが楽しそうに笑った。

胸の内を暖かな波が広がっていく感覚。

ゆったりとした時間。そして、幸せな時間が流れていく。

その瞬間だけを切り取れば、まるで恋人がそうしているかのような

……。

「ふああああ……」

ほんまこいつ……。

「……本当に眠ってしまいそうですね」

寝ぼけ眼のツミキを見たヒノエはそう小さく溢すと、ぐつとその顔をツミキに近づけた。

鼻先が触れるか触れないか、そんな至近距離。

サラサラな黒髪がツミキの顔をくすぐり、しかし、そんなくすぐりたさも今はもう眠気を誘う入眠剤にしかならない。

「(あれ……なんかヒノエの顔近いな……あ、だめだ、もう寝る……)」
意識が落ちゆく。ゆっくりと水底に沈んでいくような気怠げな心地よさ。

その、最中。

「ツミキがどうして里を出たいのかは分かりませんが、……うふふ、私はツミキのことをよく知っていますよ。でも、ツミキは私のことをよく知りません。だから……一つだけ、教えてあげます」

小さく、囁くような甘い声で。

「……私は、ミノトが言うほど……」 純粋な女の子「じゃ、ないですよ」

そんな言葉を、聞いた気がした。

一分後。

ぐーすかぴーと寝息を立てるツミキ。

そつと上体を起こし、顔を上げたヒノエ。

その顔は、真つ赤に染まっていた。

片手を口元に当てる。

ついさつきまで、ツミキの唇と触れそうになっていた唇に当てる。

自分でも驚くほどに、熱がこもっていた。

いけない、とヒノエは軽く首を振る。

これはいけない。

少しばかり、気がはやってしまった。

いくらなんでも段階を飛ばしすぎた。

だって、だって。

”それ”をしてしまえば……。

「赤ちゃん出来ちゃうところだった……」

消え入りそうな声で、ヒノエはそう呟いた。

3話 ちよつとした行き違い

生来、器用な方ではなかった。

自分が不器用であることは自覚していて、だからこそ人一倍努力しなくてはならないのだと心に刻んだ。

不器用であることは、何もできないこととイコールではない。

一つのことを修得するのに、器用な者の何倍も時間はかかる。けれど、諦めずに挑戦し続ける事で不器用な者も出来るようになる。

雨垂れが石を穿つように。

心の脚を太く、強く。何度失敗しても、絶対に諦める事なく挑み続ける。

それが、ミノトという少女だった。

頑張ることは苦にならなかった。

自分は何でも出来ると傲るわけではなかったが、何も出来ないと思っていたわけでもない。

頑張ればいつか必ず達成出来るのだと、そう信じていた。けれど。

ツミキがハンターを志した日から、ミノトの”諦めない”は、険しい山へ挑む挑戦から、地べたに這いつくばってでもしがみつく意地に変わった。

誰かに出来る事が出来るから天才なのではなく。

誰かに出来ない事が出来るから、天才なのだ。

ツミキの近くにいるだけで、ツミキが見える場所にいるだけで、ミノトの心は軋みをあげる。

あまりにも高い壁の前に、人が膝を屈するように。

あまりにも険しい道のりの前に、人の心が折れるように。

圧倒的な才は、ときに非才を食い潰す。

どれだけ頑張っても。

自分は、ツミキに追いつけないだろう。

そう思ってしまった時が、ミノトの心が折れる瞬間だった。でも。

折れた心を再び紡ぎ、また歩き出す強さがミノトにはあった。
理由があった。

これは戦いだ。

絶対に絶対に負けられない、”意地”と”執念”の戦いだ。

あの日の出来事は全部自分のせいだと。

今も昔もずっとずっと自分責め続けているクソバカの横っ面に一発かましてやるための、ミノトの戦いだ。

だから、ミノトは諦めない。

決して歩みを止めることなく、ツミキよりも凄いハンターになろうと頑張り続ける。

そう、決めたのだから。

……なのに。

ツミキが、カムラの里から出ようとするから。

「ヒ、ヒノエ？ そんなに手をずっと握られると動きにくいんだけど……」

「良いではないですか。今朝は肌寒いですし。だから、ツミキの手で私の手をぎゅっと包み込んで、温めてくださいな。……それに、昔……私の手、好きだと言ってくれたでしょう？」

「うん。好き」

「くっつ。あらあら……」

まあ、それはそれとして。

大好きな姉を自分から盗っていきそうなツミキのことが、ミノトは普通に好きではなかったりするのだけけれど。

「ヒノエ姉さまから離れてくださいっ！ そんなねちっこく……ふ、布団の上で繋ぐような手の繋ぎ方して!! ツミキのすけべ!!!」

君も大概だと思うよ。

「フィールドに出てくる度に鳥集めるの面倒くさいな……」

ツミキ、今日も今日とて大社跡でフィールドワーク。

ハンター訓練生は忙しい。それが、早く一人前のハンターになろう

としているなら尚のこと。

面倒くさいと言いつつ、毎回きちんとヒトダマドリを集めるところに生来の真面目さが伺える。

ちなみに、本日の課題は特産キノコの納品だ。

納品したキノコは今日のお夕飯になる予定であり、カムラの里でヒノエがうき団子をパクつきつつ待っているだろう。

「一日にあんだけ食べて、あれで太らないのは不思議だ」

一人なので普段は言わない独り言をボヤきつつ、特産キノコを採取するために山へ踏み入っていく。

「全部おっぱいにいってるのかな……栄養……だめだからん、巫女服の上からだと分からん」

ミノトが聞いたら血管切れそうなことも零しつつ、順調に特産キノコを採取していた。

一方その頃！ ミノトは！

「——っ!!」

「ミノト？ どうしましたか?」

「あ、いえ、なんでもありませんヒノエ姉さま。少し、邪気を感じたような気がしましたが気のせいだったようです」

ガタツ!! と椅子を蹴飛ばす勢いで立ち上がったミノトが、しずしずと座り直す。

立ち上がった瞬間、ミノトはちょうどツミキが特産キノコを採取しているあたりの方角を睨みつけていた。

現在、二人が座っている机の上には大量の書類がある。

というのも、

「受付嬢をしてほしい、ですか。それにしても……随分と急な話でしたね、ヒノエ姉さま」

「そうですね……ただ、前任者の方も引き継ぎが見つかれば、ご結婚し

退職されるそうですから。私たちが手伝えるのであれば、手伝ってあげたいと思いますよ」

こんな話が舞い込んだからである。

事情が事情だけに、ミノトだって自身が受付嬢をやることに異論はない。

ハンターとしての訓練時間が減ることはミノト的には大問題ではあるが、それで他人の幸せを手伝うことをほっぽり出すほど情のない気質でもなかった。

全て自分で抱え込むタチが見え隠れしているのが心配にはなるが。手伝うことに異論はない。

ない、のだが。

「それにしても、結婚ですか。結婚……かあ……」

大好きな姉がさつきからずっとこの調子なのは面白くなかった。訂正。なんなら腹立つ。

「いつてらっしやいませ、旦那様、なんて……うふふ」

「ヒノエ姉さま」

「毎日、手を繋いで眠りたいですね……いいえ、結婚……しているのですから、向かい合って……抱きしめられながら……」

「ヒノエ姉さまー」

「あ、ごめんなさい、ミノト。どうしましたか？」

「……むう」

ミノトの頬はガスを溜めたブンブジナのお腹のように膨らんでいた。

「……ヒノエ姉さまにツミキは相応しくありません。ツミキはアホですすけべで……あとすけべです」

「もう、そんなにツミキの事を悪く言わないであげてください」

「悪く言ってるわけではないです。事実です！」

「うふふ。なら私も事実を言います。ツミキは一緒にいると楽しくて、それに……とても優しい男の子ですよ」

「優しくてすすけべだからだめなんです！」

「もう……本当に、ツミキの事になると意地っ張りさんになるんですから」

「それは……だから……っ！ むうくく！ ヒノエ姉さまはツミキがどれだけすけべか知らないからです……！」

「む。私だって、ツミキのことならよく知っていますよ」

ヒノエの中の譲れない部分が、ぽろりと口から転がり出た。

かといって、ここではないそうですかと引くのならミノトだって度々苦言を呈しはしない。

滅多にない姉妹喧嘩が始まろうとしていた。

イメージは子猫二匹がどっちが先に猫じゃらしを捕まえられるかどったんばったんしてる感じである。

「いいえ！ ヒノエ姉さまは知りません！ 私の方がよく知っています！ だって私は、ツミキの事をずっと見てきました！」

「そんな事はありません。私だって、ツミキの事をずっと目で追っていました」

「ヒノエ姉さまはツミキの良いところしか見ていません！ ちゃんとツミキの全部を見ているのは私です！」

「ちゃんと良いところも悪いところも知っていますよ。ツミキの全部を見て、知って、だからツミキを想っているのです」

「だから……！ ヒノエ姉さまが見てるそれは表面的なツミキなのです！ だって！ ヒノエ姉さまはツミキに裸を見られたことがないでしょう!？」

「え」

「あ」

一瞬、二人の間の時間が止まった。ような気がした。しまった、という顔をしているミノト。

固まっているヒノエ。

ぽく、ぽく、ぽく、ちーん。

「ともかくだからあれがこうなってそれでえっとかくかくしかじかでツミキはヒノエ姉さまに相応しくありません！ これでお話は終わりです！」

ミノトは勢いで押し切る事にした。

「待つてくださいいミノト。裸を……見られた……？」

が、そうは問屋が下さなかつた。

「詳しく説明してください。場合によっては……私は、ツミキに話さなければならぬことがあります」

「えっ。あ、あの、ヒノエ姉さま……？」

静かなヒノエの声に気圧されるミノト。

びくつと肩が震えていた。

虎の尾を踏んだ鼠は多分こんな感じだろう。

「……覗かれたのですか？」

「そ、そういうわけでは……ありません……事故、のようなものです……」

「……そうですか。なら……良いでしょう」

とは言いつつも、全然良い顔はしてない。

ヒノエ姉さまを怒らせてしまった！

そう勘違いしたミノトは焦ってしまい、焦ってしまうから普段は努力の下に隠れている生来の不器用な部分が顔を出してしまう。

とにかくミノトは、旗色が悪そうなこの話題を終わらせようとした。

「わ、私が言いたいののは、私はヒノエ姉さまの知らないツミキを知っていて、だからヒノエ姉さまにツミキは……」

終わらせようとしたのだけれど。

不器用だから最初に決めた会話の着地点以外に咄嗟に持つていけない。

ミノトはまたまた言葉選びを間違えた。

「わ、私だってミノトが知らないツミキを知っています！」

だから、またヒノエの中の譲れない部分に触れて堂々巡りに……。
「だってミノトは、つ、ツミキと……赤ちゃん……出来るような……を
しそうになったことないでしょう！」

「赤ちゃんできるようなことをしそうになったことないでしょう」

あー……。

!!!?!!?!!?!!

「え……? ……え? ……え?? ……え??」

「だ、だから私の方がツミキの事を知っているんです。お姉さんですから」

「待ってください……?? え……? あれ……? 赤ちゃん……? 赤ちゃん……赤ちゃん!!」

顎にイイのをもらったボクサーのようにふらふら放心していたミノトの目がカツと見開く。

ようやく言葉の意味を飲み込めた様子。

「赤ちゃん!!」

まだ飲み込めてなかった。

「そうです。赤ちゃん……です」

「待ってください!! え!? いつですか!? いつなんですか!!? 夜はずっと私といはるはず……え!? 昼!!? でも私たちの家にそんな痕跡は微塵も……!?! 洗濯は全て私がやってるのに……!?!」

「家……? したのは昼外ですけど……」

「昼の外でしたんですか!!」

「そ、そんなに驚くような事ですか? 仲の良い方々がされてるのを見るのは、そう珍しいことではないではないですか。その、私も流石にちよつと、誰かに見えるところするのはどうかと思いますけど……」

「昼の外でするのがそんなに珍しくないんですか!?!」

「でも……そのときはなんだか……どうしても、そうしたいと思ってしまうって……」

「思い立ってすぐにそうしたんですか!? 昼の外で!? ひ、ヒノエ姉さまが……そんな……あ、ああああ……あ」

「あ、ミノト!?!」

ふらふら。ばたん。かんかんかん。ミノト、KO。

容量オーバーの情報の洪水をわつと浴びせかけられて、白目を剥いてひっくり返るミノト。

慌ててヒノエが駆け寄って抱き起こす。

「ヒノエ姉さまが……私の……ヒノエ姉さまが……」

「ミノト!? ミノト!? 大丈夫ですか!? 頭から行きましたよ!」
「ヒノエ姉さまが……何処の馬の骨かはわかってるやつに……!」
ぶっちゃけ会話は噛み合っているようで全く噛み合っていないな
かったのだが、ここではミノトが認識した”ミノトの中の事実”が真
実だ。

ここで問題。

大好きな姉が本当に盗られてしまいました。
妹が取る行動は何でしょうか。

回答者のミノトさん、どうぞ。

「許さない!!! 私に断りもなくヒノエ姉さまを!!! ツミキい!!!」
「ミノト!?!」

ガバリと跳ね起きたミノトは脱兎の如く里を駆け抜け、マイハウス
で自身のランスを引っ掴んで大社跡へ爆進していった。

同時刻。

大社跡で特産キノコを採取し終わり、ついでにいきなり襲われたの
でオサイズチが率いるイズチの群れを盾で殴り飛ばしていたツミキ
はふと空を見上げた。

「うげ、曇ってきた。これは一雨来そうだな……。今日はやけにモン
スターに狙われるし……。厄日だ」

今そつちに怒り狂ったモンスターが一人いつてるよ。頑張つて。
「早く帰ろうかなあ。ヒノエもお腹空かせてるだろうし。ミノトのキ
ノコ料理も早く食べたいし」

ぱつと踵を返したツミキが下山を始める。
その背後。

険しい山の頂で。

紫炎が、揺らめいていた。

ゆらゆら、ゆらゆら……。と。

4話 この世界の当たり前

ハンターには自身の分身とも言える武器がある。

十数種類からなる武器種から生涯を共にする武器を一つを選び、それを強化し続けていくのが一般的だ。

稀に複数の武器を使いこなす天才もいるが、一を極めることでさえ一握りのハンターしか出来ないのだ。大抵のハンターは、一度これと決めた武器を変えることはない。

だから、ハンターを志した日に、ツミキも己の相棒となる武器を決めた。

「ウツシさん。僕はこれにします」

ツミキが選んだ武器は、片手剣。

鉱石をそのまま削り出したような無骨な剣と盾が、ツミキの手にあった。

「……数ある武器の中で、片手剣を選ぶハンターは少ない。モンスターへの攻撃をまともになせない小さな盾。薄皮を斬るのが精一杯な軽い剣。扱い易さと機動力は、一撃の重さを犠牲にする。モンスターの一撃一撃が致命傷になりかねないハンターにとって、接敵回数はそのまま死のリスクを引き上げることに繋がる。だからこそ、聞きたい。……どうして、片手剣を選んだんだい？」

ウツシの問いかけは、優しさから溢れたものだった。

大丈夫か。

辛くはないのか。

モンスターに肉薄できるのか。

ハンターだって、君がやる必要はどこにもないんだ。

目を泣き腫らしたツミキは、くしゃくしゃの顔で笑った。

「それでも、片手剣には盾があります。盾は、守るためにある。誰よりも速く。どんなピンチにも間に合うように翔く。片手剣なら、守ることができる」

だから、僕はこれがいい。

ツミキは、そつと無骨な鉱石の盾を撫でる。

「僕はハンターになる。でも、ハンターになるのなら、守るための武器を振るいたい。それが、守ってもらった僕のやりたい事です」

そして現在！

「——うッるあああああッ!!!」

天高く飛び上がった刹那の、急転直下のフォールバツシユ。

盾と地面の間でリスのような細い顎を砕かれたトビカガチが嘎れた断末魔を挙げたときにはもう、ツミキは次の行動に移っていた。

全身の筋肉を躍動させた流麗な回転斬り。

踏み込みは強く、広く。

鉄板すら貫く鋭い嘴で串刺しにしようと、大きく頭を振りかぶって大跳躍したアケノシルムを、すれ違い様に一閃。

そして、それだけに留まらない。

「ズツだああ!!」

追撃。盾で殴りつける三殴打。

蓄積されていたダメージが臨界点に達し、二撃目で嘴にヒビが入り、三撃目で遂に嘴が砕かれる。

たまらず後方に飛び退ったアケノシルムが劣勢と見てその場を離脱しようと翼を広げた。

直後、頭部に衝撃。

投げられた盾がアケノシルムの蟬谷を打ち据えていた。

「逃げるなッ!! 先に仕掛けたのは、お前だろうッ!!!」

宙に手を翳したツミキから白い糸が伸びる。

その先端には翔虫と呼ばれる猟具生物。

翔虫を起点にして、ツミキの体がパチンコ玉のように空中に射出された。

着地点はアケノシルム。瞬きの間に彼我の距離を跳躍したツミキがアケノシルムの頭部を切り裂き、そのまま踏み台にして上方へ駆け

上がる。

その手には、投げられたはずの盾が握られていた。

「フツ!!」

フオールバツシュ。

地を這う人を見下す高い頭が土を舐める。

アケノシルムの瞳から光が消えた。

討伐完了。

ツミキはふいー、とようやく肩の力を抜いた。

その盾にはモンスターの返り血がこびり付いている。

過去のツミキが守るためにと選んだ盾はバリバリ攻撃に使われていた。

なんなら投げられてもいた。

むしろ剣より盾がメインウエポンになっていた。これではもはや

片手盾である。

守るための盾とは（素朴な疑問）。

「多い！　なんか今日モンスター多い！　休む暇もないな！」

この日、ツミキは既に十数体ほどのモンスターを狩猟していた。

基本的に、ツミキはウツシの許可を得た日でなければフィールドに出ることはできない。

ツミキはハンターではなく、ハンター訓練生だからだ。

ウツシとてフィールドに大型や中型のモンスターが闊歩しているときに訓練生をフィールドに出したりはしないので、本来ならそれらのモンスターと会敵すること自体が異常なのだが……。

「まあ襲われるのはいつもの事なんだけど」

ツミキはその異常に慣れ過ぎていた。

異常が日常になり、異常ではなくなる。

だから、ツミキは気が付かなかった。

今日は襲われる回数が多いな、そんな日もあるか、ぐらいにしか考えなかった。

それは、ツミキが例え複数の飛竜にリンチされようとその全てを討伐できてしまうことも理由の一つではあったが。

「でも、流石にこれで打ち止めでしょ。んう〜つつつかれたなあ」
ぐ〜つと伸びをするツミキ。モンスター十数体との連戦を“疲れ
た”で済ませられるところに、彼の異常性がある。

あと、今のツミキの言動は俗に言うフラグというやつであった。

「ツ〜〜ミ〜〜キ〜〜イ!!!」

フラグ回収。

「え?」

自分の名を呼ぶ声に、反射的にツミキが振り返る。

瞬間、ツミキは目を剥いた。

「あれ、ミノ……トお?」

「ヒノエ姉さまの純潔を奪ったその罪!! たとえ神様仏様が許したと
しても、私が絶対に許しません!!!」

ミノトは走っていた。

全力疾駆。土煙を巻き上げ、己の限界すら超えて、風となって走っ
ていた。

腰を落とした前傾姿勢。より早く。もつと早く。

ミノトは走っていた。

ランスを構えて。

「くたばりなさいツ!!!」

「なんで?」

突進の勢いを全て乗せた最高最大の一突き。

けれど、ツミキはあっさりと突きを躲す。

見えてはいけないものがチラチラしていない限りツミキに攻撃を
当てることは非常に困難である。

「逃がっ……しません!!」

さけれど、ミノトとてそれは織り込み済みである。

ツミキが突きを交わした瞬間、ミノトは全身を捻った。

草履が擦り切れそうなほど踏ん張り、地面を削りながらの急制動。

その勢いのままに膝のバネを使い、受け身なんて何も考えてない跳
躍。

遠心力が大きくなるため制動に邪魔なランスは放つぽり出し、フ

べ!! 最低です!!」

「しまった藪蛇だった! あと使うって何にだよ!!」

「そ、それは……ツミキの……」

「僕の?」

「ツミキを……って、女の子に何を言わせようとしてるんですか!?

やっぱりツミキはすけべで最低です!! こんな奴にヒノエ姉さまは

……!!」

「ヒノエ? ヒノエがどうしたの?」

「こ、この後に及んでまだそんな事を……!」

ミノトの瞳が憤怒に燃える。

大好きな姉を軽々に弄び、なおかつそれに全く反省の色を見せないばかりかすつとぼけるツミキに、腹の奥底からぐつぐつとマグマが煮えたぎる。

許せない。

頭に血が上ったミノトは、勢いそのままに頭突きを敢行した。

「ふん!!」

が、そんな分かりやすい動作がツミキに当たるはずがない。

ツミキはミノトの首筋に顔を埋めるように上体を起こした。

そして、首と顎で肩を挟むように口ツク。

これで、もうミノトはツミキに攻撃することが出来ない。

ツミキの合理的な判断による押さえ込みだった。

側から見たら抱きしめあつてるようにしか見えなかった。

「くくッ!? なっ、あっ、なあ!?!」

抱きしめ合うような体勢に見えるということは、当然それなりに密着具合も深まる。

ミノトは自身の胸部が圧迫される感触を知覚した。

そして、今までにない距離感にカツと顔に朱色が刺す。

「ふっふっ、なんで暴れてるのは知らないけど、これでもう僕に攻撃は——」

吐息が近い、とか。

匂いをダイレクトで感じる、とか。

ヒノエ姉さまとは違う男の人の感触、とか。

嫌いなはずなのに、何故かこうやって抱きすくめられるのは嫌じゃない、とか。

色々と乙女的なモノローグがミノトの頭の中を駆け巡った。
が。

それよりも怒りの方が強かった。

「――色魔滅ぶべし！ 成敗ッ!!」

「ぐふえ!？」

やったことは単純である。

ミノトはマウントポジションを取っていた。

マウントポジションとは、上に跨ることである。

なので、当然ミノトは腰を持ち上げることができる。

ミノトはツミキの男の子としてとつても大切な部分が自身のお尻の下にあることに気付कि、腰を持ち上げて、竜人族の膂力をもって勢いよく打ち下ろした。

そうして、まあ、端的に言えば、自分のお尻で潰した。

説明終わり。

「ぐ、お……あがつ……ま、マジか……!」

「悪は滅びました。以降、ヒノエ姉さまが誑かされることもないでしょう」

「や、やっていいことと悪いことが……ある……でしょ……!」

立ち上がり、ぱんぱんとお尻を手で払うミノトの足元で、両足の間で手を挟んだツミキが蹲っていた。

あれ？ 追撃のパンチをミノトは叩き込まないのか？

「……っ」

ミノトは自分のした事を思い返して、あらぬ方向を見ていた。

その顔は真っ赤である。よくよく聞くとさつきも声が震えていた。多分思い返しているのはした事だけじゃないですよこの顔は。

ツミキからすればいきなり訳のわからない難癖を付けられて暴力に訴えられたに等しいのだが、最後、ミノトと密着しにいったことに下心が全くなかったかというところちよつと解答に困るので、そういう意

味では因果応報であった。

なぜなら、その気になればツミキはいつでもミノトから抜け出せたのだから。

ちゅんちゅん。

一部始終を見ていたヒトダマドリは、ケツとでも言いたげに鳴いた。

十分後。

「ヒノエと赤ちゃんができるような事!? したい! じゃなくて、する訳ないだろ!」

「で、でもヒノエ姉さまはそう言っていました! ヒノエ姉さまが嘘をつく理由がありません!」

「いやでもなら僕が知らないのはおかしいだろう!」

「まだしらばつくれるつもりですか!? ゆ、許せない……せめて、せめて責任を取るのならまだしも……!」

「しらばつくれるんじゃないやなくて本当に知らないんだってば! 少なくとも僕の主観認識だと僕はまだどつ……未けつ……とにかく僕はしてない! 何かの勘違いだって!」

「じゃあヒノエ姉さまが嘘をついていると言うんですか!」

「そうは言っていないよ! 何かの勘違いがあるって言ってるの! だいたい、僕が知らない以上は寝込みを襲われた線が一番考えられるけど……夜は二人はいつも一緒だろ? そりゃ昼寝してるときもあるけど……寝込みを襲おうと考えてる人が、わざわざ昼寝を狙う?」

「そ、それは……」

「それに、だ。仮に寝込みを襲われたのであれば、僕は必ず気付く。僕の眠りの浅さは知ってるだろう?」

「……」

取り敢えず状況を整理しようと始めた現状の認識の擦り合わせで

ある。

「ここでもうやく、ミノトはあれ？　なんかおかしいな？　と思考が回り始めた。」

「だから一回里に戻ってヒノエに確認した方がいい。ね？」

「……そう、ですね。少し、早とちりをしてしまったかもしれません。」

「……申し訳ございません、ツミキ」

「いいって。勘違いは誰にでもあるもんね」

「勘違いじゃなければ先程の謝罪は撤回し、もぎます」

「何を!?　えっ、何を!？」

きゅつと股の間を押さええるツミキを無視して、ランスを拾ったミノトがスタスタと歩き始める。

慌ててツミキは後を追う。

少年と少女が、肩を並べて歩く。

「……今更ですが、随分とモンスターを狩猟したようですね」

「まあねー。今日は多かった多かった。あとでアイルーさん達に運んでもらうようお願いしないと」

「また、襲われたモンスターを全て狩猟したのですか？」

「え、うん。先に僕を殺そうとしたのはモンスターの方だし」

「そうですか……」

「人に敵意を向けるモンスターは狩猟する。人に敵意を向けるということは、人を外敵だと認識している証だ。だから、いつかどこかで必ず人を襲う。絶対に逃さない。モンスターを狩猟すればするほど、未来の誰かを守ることに繋がる。ハンターってそういうもんだろ？」

「……そうですね」

それは一面的には正しいハンターの認識ではあった。

けれど、ツミキの言う“それ”は決定的に間違っている。

ミノトは、ツミキがそうなってしまったことが、悲しかった。

「昔の貴方なら、きつと”皆を守るためにモンスターを狩猟する”って、そう言ったと思います」

「え？　ごめん、聞き取れなかった」

「……ツミキは知らなくてもいい話です」

「その言い方だとめっちゃくちや気になるんだけど。教えてくれてもいいじゃん」

「はあ……昔は、ヒノエ姉さまや私を守ると、そう言っていたことを思い出しただけです。転んだだけでびーびー泣いてた泣き虫でしたのに」

「いきなり恥ずめの過去を穿り返さなくてもよくない!？」

「おや。もうあの宣言は無かったことになったのですか?」

「そんな訳ない。あれは僕の誓いだ。二人には僕の助けなんか必要ないかもしれないけど……僕は、ヒノエとミノトを守る僕になりたいと、今もそう思ってる」

「……そういうところが、変わらないから……」

「なんて?」

「何でもありません。里に急ぎましよう。ツミキの生き死にがそこで決まります」

「あれ? 僕が死ぬか生きるかの話だった!？」

ずしりと、背中の中のランスが重くなつたような気がした。

一瞬だけ己の盾を見つめて、すぐに視線を切る。

ミノトは諦めない少女だ。

だから、一度決めたことが変わることは滅多にない。

ハンターには自身の分身とも言える武器がある。

ツミキは片手剣を選んだ。

ミノトはランスを選んだ。

ツミキが片手剣を選んだ理由があるように、ミノトにもランスを選んだ理由がある。

大きな盾を。

片手剣よりも大きくて、頑丈で、あらゆるものから守るための”大楯”を選んだ理由が。

「え? 何?」

「……べつに! 何でもありません!」

片手剣よりも大きな盾で、片手剣では守れないものも守ることができ。

ミノトがランスを選んだ理由は……そういう事だ。

「……あれ？」

「どした？ ミノト？」

昔を思い返していたミノトの思考が止まる。

「モンスターが多い……？ それは……おかしい……」

異常が当たり前になれば、それは日常になる。

モンスターに襲われることはツミキにとって日常になっていたし、毎度当たり前のように中型以上のモンスターを狩猟して戻ってくるツミキが、いつの間にかカムラの里の全ての人の感覚を麻痺させていた。

まあ、ツミキだから。

そんな一言で納得してしまえるぐらいに、皆んなが麻痺していた。

異常には理由がある。

理由があるのなら、原因がある。

何の起因もない異常など、存在しない。

「私がフィールドに入れたということは、少なくとも前日の観測では中型以上のモンスターはいなかったはず……仮にいたとしても、一体か二体がせいぜい……それが十数体……？」

ミノトは不器用な少女だ。

だが、不器用であるからこそ、人の何倍もミノトは頑張ってきた。

その中には、当然、座学も含まれる。

今までのミノトの努力が、現状の類似事例を弾き出す。

「不自然なモンスターの大幅動……これではまるで……百竜夜行のような……」

ミノトがたどり着いた答えを口にした、その直後だった。

「——ミノトちゃんツ!!!」

——え、と。

ツミキに突き飛ばされた、と脳が理解する前に、ミノトの眼前を紫の巨体が突っ切った。

それは、超高高度からの滑空。

言葉にすれば簡単だが、それが大質量かつ、凄まじい勢いで突っ込んできたとなれば話は違う。

「——え？」

尻餅をつくミノトの眼前で、紫の巨体が崖に激突した。

おそろしく硬い岩であるはずのそれは、円形に凹み、悲鳴をあげるように亀裂が走る。

どれだけの破壊力があつたかは、火を見るより明らかだった。

「——え？」

きよろきよろ、と。

祈るようにミノトは周囲を見渡した。

きよろきよろ。

きよろきよろ。

何度も。

何度も。

けれど、何もなかった。

目の前にいたはずのツミキは、どこにもいなかった。

「——あ」

現状を、脳が理解する。

干上がった喉から濁流のように溢れ出そうとするのは悲鳴か、嗚咽か。

「——あ、ああ、あつ」

カタカタと震える視界の先で、紫の巨体がゆつくりとミノトに向き直る。

土煙が薄れていき、その全貌が現れた。

全身を覆う甲冑のような甲殻だ。

隆起した人の身ではありえない埒外の筋肉が洗練された曲線を描き、それが紺藍色の鎧を連想させる重厚な甲殻に覆われ、その間に突起のように立ち並ぶ黄色い甲殻が縞模様を形成している。

兜飾りを思わせる独特の形の角の下には憎悪を滾らせる瞳が浮かび、鋭い槍のようなブレード状の尾が、ヒュン、と空気を薙いでいた。

そして、何よりも目を引くのがその体から発せられる紫炎のガス。禍々しく立ち登る紫色のガスが、その巨体から妖しい威圧を発していた。

けれど、そのどれもミノトの目には映っていない。

ミノトは、ただ一点を見つめていた。

今しがたこびり付いたような真っ赤な鮮血に彩られた、その口を。ぼたぼたと赤い雫を垂らす、その牙を。

「——い、いやあああああッ!? ツミ、ツミキ!! ツミキ!!!」

その瞬間のミノトの行動はともじやないが、愚かとしか呼べないものだった。

あろうことか、ミノトはモンスターに近寄ったのだ。

腰が抜けてまともに立てない体で、バタバタとみつともなく手足を動かして、凹んだ崖の真下へ行こうとした。

思考の末の行動ではない。

ただ、真っ白になった頭が一番最初に出した答えが。

「いやっ! ツミキい!! いやだっ!! いやです!! ツミキ! 死な
ないで……!! ツミキ! いや、だあ……!!」

ツミキが死ぬのは嫌だ。

それだけだったということ。

けれど、モンスターがミノトの想いを汲むなど、そんなことがあるわけがない。

「——ぎ、いッ!」

ヒュン、と無造作に振るわれた槍のような尾がミノトを串刺しにせんと動いた。

反応が出来たわけではない。

けれど、今まで馬鹿のように繰り返し続けた抜刀という反復動作が、命の危機を前にミノトの意思を飛び越してそれを行った。

槍尾と大楯が激突する。

凄まじい衝撃がミノトの体を襲った。

けれど、地面に尻をつけた状態では踏ん張りようがない。

ランスを弾き飛ばされたミノトはそのまま無様にごろごろと転が

る。

白い巫女服は泥だらけになり、髪飾りが割れて飛び散った。骨が折れたかと思うほどの激痛。痺れるなどと生易しいものではなく、感覚がなくなるほどの痛みに襲われる両腕。

生理反応で流れる涙と鼻水が綺麗な顔をぐちゃぐちゃにし、普段の美しい巫女としての姿など見る影もない。

たった一撃。

最初の不意打ちを含めても、それでも二撃。

それだけで、人とモンスターの生存競争は決した。

これが”モンスター”。

人とは、持って生まれた生物としての強さが違う存在。

「――ふへっ」

ミノトの口から、笑みが溢れる。

あまりにもこの場に似つかわしくもないものだった。

だからこそ、もうミノトの心がどうしようもない状態にあるのだと、なによりも雄弁に物語るものだった。

ミノトの心は折れていた。ぼつきりと折れてしまっていた。

折れた心を紡ぎなおす？

無理だ。

出来るわけがない。

ミノトは諦めない少女だが、諦めることがない少女ではない。

ツミキがミノトの目の前から消えたあの瞬間に、もう、ミノトは――

「ふへっ、は、ははは」

笑う、嗤う。

涙を流しながら、震えながら、笑う。

もう、それ以外に何をすればいいのか分からないとばかりに。

「ごめん、なさい……」

極限状態のミノトが見つけたやらなければならぬ事が、謝罪を口にする事だった。

「ごめんなさい……里の、皆んな……」

それは一体、どういう心の動きなのだろうか。

今、死に瀕している状況を自分が作ったと思っっているのだろうか。

ツミキを自分が殺したものだと思っっているのだろうか。

そんなこと、あるはずがないのに。

「ごめ、んなさ、い……ヒノエ姉さま……」

ミノトは悪くないですよ。

そう言っってくれる姉はここには居ない。

「ごめんっ……なさい……」

大丈夫。だから、泣き止んで。

そうやって抱きしめてくれる姉はここには居ない。

「ごめん……なさい……っ！」

ミノトの涙を拭っってくれる人は、誰一人としていない。

モンスターが動く。

その名は怨虎竜マガイマガド。

けれど、そんなことはどうだっていいだろう。

ミノトがその名を知ったところで、数秒後には墓の中。

ミノトは自分を助けられないし、ミノトを助けてくれる人もいない

のだから。

「ごめん……っ！……ごめんなさいっ……っ！」

けれど。

「ツミキ……っ！」

ミノトを守ると誓いを立てた少年は、ここに居た。

マガイマガドの後方の林で何か爆発した。

ゆうに数十メートルは離れた丘の上から、爆風に乗っって何か飛んでくる。

鋼虫糸を駆使して常識はずれの加速をし、普通なら目も開けられないような風圧の中で、一瞬の瞬きすらなくただマガイマガドを睨みつ

け。

飛来物を知覚したマガイマガドが身を屈めた。

それは跳躍の予備動作。

モンスターの怪物じみた膂力を用いた跳躍を持って、マガイマガドが”飛翔”する。

飛び上がると同時に槍尾を振り回すその動きは、正しく包囲網。

この間合いに入ればその瞬間に細切れになるぞと、紫色の殺意が空気を薙ぐ。

しかし、そんなこと知るかとばかりに”それ”は突っ込んだ。身を捻る。

最小限の動きで体を横軸に回転させたそれは、すり抜けたと見紛うほど鮮やかに槍尾を躲し、盾を抜いた。

少年にとつて、守るための盾を。

「お前——」

少年の名はツミキ。

カムラの里が生んだ稀代の大天才。

そして。

「——ミノトちゃんを、泣かせたなッ!!!」

幼馴染みの竜人族の双子姉妹を守る、ハンター訓練生だ。

落下の勢いをそのままに殴りつけた盾がマガイマガドの頭を捉える。

激突。轟音。

苦悶の声を上げるマガイマガドを無視して、転がったツミキはミノトの前で静止した。

「ごめん、心配かけた？」

「——っ、え？ あ」

「あーあー、もう。ほら」

ツミキがミノトの涙をそっと拭う。

それだけで、溢れて止まらなかつたミノトの涙が、不思議なぐらいにぴたりと止まった。

「僕のこと泣き虫って言ったけど、ミノトだって泣き虫なところある

よね」

「椰揄うような物言い。」

それがあまりにもいつも通りで、こんな状況だというのにミノトの中からツミキへの対抗心が顔を出す。

「うん。泣いてるよりも、そっちの方がミノトらしいよ」

「……怒ってる方が私らしいというのは、心外です……」

「あはは。そういうわけじゃないんだけどな。僕は、芯の強いミノトが好きだなんてだけ」

それだけ言って、ツミキは立ち上がった。

盾を構える。

その背中が何を言っているかは、見なくたってわかる。

「だから、ミノトがミノトらしくいられるために」

ツミキの眼前で、マガイマガドが怒りの咆哮を上げた。

紫炎のガスを体から噴き上げ、怨念のような纏わりつく殺意を叩きつけ。

お前を殺すと、兜の下の目が怪しく灯る。

さけれど、ツミキはその全てを受け止めて、笑ってみせた。

「お前を狩るぞ。えーっと？ ウツシ教官の絵巻にも載ってないモブモンスター」

5話 隠し事

怨虎竜マガイマガドの狩猟は苛烈を極めた。

が、普通に勝った。

「モブモンスターのくせにやけに強かったなあいつ……」

現在、ツミキはミノトを背負いカムラの里に帰還している最中だった。

背負われているミノトの右足には添え木がしてある。

あの時、マガイマガドの攻撃をランスでガードした際に足の骨にヒビが入っていたのだ。

「なのに、無茶するからポツキリ折れたね」

「……自覚があるので呆れたような声はやめてください」

狩猟の終盤だ。

紫炎のガスを起爆剤に推進力を生み出し、縦横無尽に空中を高速移動するマガイマガド相手に、ツミキは空中戦を挑んだ。

しかし、度重なる激戦とミノトを庇いながらのマガイマガドの狩猟で体力が限界に来ていたツミキは、マガイマガドの突進を受け流した際に盾を取り落としてしまった。

盾という守りを失ったツミキに、ガスを爆発させて空中で百八十度切り返すというふざけた事を実現させたマガイマガドが噛み殺さんと迫る。

その刹那、ツミキの目の前にランスの大楯が飛び込んできたのだ。

それは、地上のミノトがツミキに向かって投げたもの。

人間以上の膂力を持つ竜人族だからこそ実行できた、大楯のロングパスだった。

ミノトの盾を握ったツミキがカウンターで叩き込んだフオールバッシュでマガイマガドは墜落し、それが決定打となった。

「折れたほうの足で踏み込むから……」

「も、もういいでしょう、その話はっ」

「でも、ありがとうミノト。おかげで助かった」

「ミノトの盾が僕を守ってくれたね」

ツミキが片手剣を選んだ理由があるように、ミノトにもランスを選んだ理由がある。

ミノトは守りたかったのだ。

守るための武器。守るための盾。

その盾の内側に自分を入れていない馬鹿な男の子を守りたかった。だから、ミノトは誰かを守る事しかできない小さな盾ではなく、自分も守って、そして誰かも守れる大きな盾を選んだ。

実力的な問題で、ミノトがツミキを守る瞬間は来ない。

いつだってミノトはツミキに守られる側で、だからこそミノトはハンターの努力を欠かさなかった。

ミノトの頑張る理由の一つに、ツミキを守ることがあった。

ツミキの知らない理由で、ツミキの言葉がミノトの胸を打つ。

「……本当に、ずるい人」

守られたのはミノトで、守ったのはツミキだ。

そんなの誰が見たって明らかで。

最後だって、ミノトのロングパスがなくなつて、ツミキならきつとなんとかかしてしまっていたのだろう。

けれど、ツミキは心の底からミノトに感謝をされていて。

あの日ランスを選んだ意味は確かにあったのだと、ミノトにそう思わせる。

それが嬉しくて、情けなくて、悔しくて、まだツミキに勝ってないと心のどこかで叫んでいて。

「ツミキのくせに……生意気です」

「あれ？ おかしいな想定と違う反応だ」

「……………ちなみに、想定では？」

「感極まったミノトが、ぎゅっっておっぱい押し付けながら抱きついてくる感じの……………」

「…………へえ」

「あれ？ ミノトさん？ 僕の首に両腕が回ってますよ？ あはは、

そこは手を置く位置としては不適切かな。ミノトはおつちよこちよ
いだなあ」

「そんなにぎゅってされるのがお望みなら、たっぷりしてあげます!!」
「ぐええええっ!! 待つで、竜人族の力でそのぎゅっをやっだらまじ
でやばい!! じぬ!!」

「私にどんなキャラを期待してるんですか!! ツミキの……ほんつと
に、すけベツ!!」

ミノトはむず痒さから誤魔化した。

それに気付いたのか、いないのか、ツミキが乗った事で、空気がガラリと変わった。

まあ、ツミキはアホなので多分気付いていないだろう。

「げほっ……手が出るのが早すぎる。ヒノエぐらいお淑やかになれとは言わないけどもうちよつと落ち着いてもいい年齢では」
「は?」

「何でもないです」

がくと、ツミキの片膝が一瞬落ち、振動がミノトに伝わる。

「おっと。ごめんミノト、大丈夫だった?」

「……ええ。大丈夫です」

「この辺はあんま舗装されてないからなー、うっかり根っこに足取られたよ。もうないようにする。足痛いのには、本当ごめんね」

それが嘘だということを、ミノトは分かっている。

ツミキは隠しているつもりでも、普段乱れることすらない呼吸が荒いのを、背負われているミノトは知っている。

目立った外傷こそないが、「狩猟中に武器を落とす」というありえないミスをやってしまうぐらいに、限界が近いことも知っている。

それをミノトに悟らせないように振る舞い、本当なら喋るのだからしんどいだろうに、ミノトが気付かないようにいつもの自分を取り繕い続けていた。

それは、カツコいいところしか見せたくないという男の見栄っ張りだった。

そして、それを指摘しない女の優しさがあった。

「ツミキは本当に馬鹿ですね」

「え？　なんで急に罵倒されたの？」

「すけべでもありません」

「男の子として普通の範囲だと思うな」

「あと……」

「あと？」

「……やっぱり、ありません」

「じゃあ、良いところは？」

「ありません」

「悩む素振りぐらいはして欲しかった！」

すつと、ミノトの両腕がツミキの首に回る。

びくつと、ツミキの肩が震えた。

けれど、その腕に力が込められる事なく、代わりに、背中の温かさと重みが増した。

ミノトの心臓の音が、ツミキの背中に伝わる。

ぎゅつと、そんな音が聞こえそうな抱擁だった。

「でも……今日は、ちよつとだけ……ちよつとだけ、カツコ良かったです」

「み、ミノト……？」

「だから……こんな事でいいのなら……とちゆ……特別に、してあげます」

ミノトの胸に、ツミキの心臓の鼓動が伝わる。

それがばつくくんばつくんと動いていたのが、何故か嬉しかった。

「ありがとうございます、ツミキ」

その言葉を口にした瞬間、胸の中でつかえついた何かが抜ける感触があった。

そして、代わりに熱い何かが胸を満たしていく。

馬鹿みたいに早い心臓の音を聞きながら、悪くない気持ちだなと、ミノトは思った。

涙を流す少年がいたから、これは夢なのだと思ノトは気付いた。掠れた声で父や母、兄弟姉妹たちに謝り続ける少年の背中も、今にも潰れてしまいそうなほどに脆く、弱々しい。

もう何日も”そこ”から動いていないのか、少年の肌や衣服には乾いた泥や埃がこびり付き、見窄らしい格好をしていた。

もう座ることすら難しいのか、少年は地面に横たわっていて、それでも謝罪の言葉だけは途切れることなく。

自罰のようであって、他者や自分からの赦しを拒絶する意思のようでもあり。

消極的な自殺行為とも取れる行動。

それが、酷く痛々しかった。

無性に腹が立ったことを、ミノトは覚えている。

だから、横たわっている少年の胸ぐらを掴み上げて。

ミノトは、右手を大きく振りかぶった。

「——ミノト、ミノト」

優しく揺すられる感覚を知覚して、ミノトは目を覚ました。

「ツミ……キ……？」

「うふふ。ツミキじゃなくて心苦しいですが、私ですよ、ヒノエです、ミノト」

ミノトは跳ね起きた。

「私は寝ていませんヒノエ姉さま!!」

「頬に涎の痕がありますよ」

「嘘っ!?!」

「はい、嘘です」

でも間抜けは見つかったようだ。

ここはカムラの里の集会所。

受付嬢が座るその場所で、ミノトはうたた寝をしてしまった。

ツミキとミノトがマガイマガドに襲われたあの日から、一ヶ月の月日が流れていた。

「頑張るのも良いですが、少しは自分の体を大切にしなさい。最近、あまり眠れてないのではないですか」

「それは……。ですが、大丈夫ですヒノエ姉さま。私、体力には自信がありますから」

「ついさつきその体力が尽きていたではないですか」

「ついさつき仮眠を取れたからまだ大丈夫です」

譲らない姿勢を見せるミノトに、ヒノエが少し困ったように眉を寄せた。

マガイマガドの一件以来、ミノトは鬼気迫る様子で訓練に打ち込んでいる。

かといって受付嬢としての職務にも手を抜くことはなく……。

何事にも全力投球なのは美点でもあるのだが、ともあれ要領が悪かった。

このままではそう遠くないうちにミノトが倒れてしまうな、と思ったヒノエ。

休めと言って休むのならそれで良かったが、休まないで次の一手を打つ。

「そうですか……では、ミノトの言葉を信じて、今から私たちに任せられたことを進めましょう。ちようど、ツミキもいませんし」

「ヒノエ姉さま、それはまさか……！」

チキチキ！ 第二回！ ツミキに里に骨を埋めさせよう会議！

「……会議ではなく。少し、二人だけで話しましょうか」

集会所のアイルーに断ってから、ヒノエはミノトを連れ出した。

満開の桜が咲き誇り、ひらひらと薄紅色の花弁が舞う里の道を二人は並んで歩く。

おもむろに、ヒノエは本題を切り出した。

「ツミキは里を出るそうですよ」

「……そのようですね」

「ツミキの選択、ツミキの人生です。ツミキが里を出たいと言うのなら、笑顔で送り出すのが……きつと、一番良いのでしょうか」

「……ですが、必ず一番良い選択を出来るとは限りません。現実がそ

れを許さない場合があります。……悔しいですが。今、ツミキはカムラの里に必要です」

「二ヶ月前、ミノトとツミキを襲ったモンスター……命名、怨虎竜マガイマガド。……ツミキが討伐したはずの個体は、まだ見つかりませんか」

「はい。ウツシさんを含めた里の大人たちがフィールドを探し回っています……。あのとき、確かにツミキが倒したはずなのに……」

「……ツミキには、絶対に知られないようにしないとけませんね」

「……はい、ヒノエ姉さま。ツミキがこの事を知れば、絶対に……何処にいるかも生きてるのか生きてないのかすら分からないモンスターを“討伐”しに行つてしまいます」

「おい、と手を振る茶屋のヨモギに手を振りかえすヒノエを、ミノトはじつと見つっていた。

「ツミキは天才です。誰もがそこに疑いを持たない。カムラの里のハンターとして、ツミキは里の主要な立ち位置に立っています。だから、ツミキに里に残つて欲しいという里長たちの考えも分かります」
けれど。

「でも、私はツミキがハンターとして優れているから里に残つて欲しい訳ではありません。ツミキだから、里に残つて欲しいんです」

ハンターとしてのツミキを見る人間がいるように。

ハンターではないツミキを見る竜人族だっている。

「どうしてツミキが里を出たいのかは分かりません。でも、ツミキが里に残りたいと思う理由に私がなれたのなら。……こんなにも嬉しいことはない、そう思います」

目を閉じたヒノエの瞼に映る光景はどんなものだろう。

ミノトには分からないけれど、それが限りなく幸福であることは、ヒノエの声音で分かった。

通り掛かったイオリが連れていたガルクを撫でて、桜の道を歩いていく。

「私はツミキに里に残つて欲しい。ミノトはどうですか?」

「私は……。私も、ツミキには里に残つて欲しいです」

「それは、カムラの里にツミキが必要だからですか？」

「はい。それ以外に”残って欲しい”理由はありません」

ヒノエは、それ以上訊かなかった。

ミノトは、それ以上語らなかつた。

踏み込まないといけなかつたような予感だけを残して、姉妹のそれぞれの理由は己の胸の内に秘匿される。

ヒノエも、ミノトも。

隠していることがあつた。

それでも、二人ともツミキを里から出したくないというのは共通しているわけで。

「なら、どうやってツミキに里にいたいと思わせるのかを考えないと
いけませんね」

「簡単に思いつけば苦労はしないのですが……」

「なら、どうやったらツミキと結婚できるか考えないといけませんね」
「論理の飛躍!!」

「里長が言っていました。押し倒して赤ちゃんを授かれば一発だと」

「いつから里長は宴の酔っ払いのようになったのですか？」

「押し倒すことはできる自信があります。……その、とても……恥ずかしいですが、頑張ります」

「そんな事を頑張らないでくださいヒノエ姉さま……! ツミキにそんな事をすれば何をされるか分かつたものじゃありません! それに、殿方を押し倒すなど、淑女がやるのは言語道断!」

ミノトは自分を柵に上げた。

そのとき、桜木の向こう側で、恋人同士の男女が口づけを交わしているのが二人の目に入る。

ヒノエは咄嗟に指の隙間だらけの両手で顔を覆って、ミノトは顔を背けつつ横目でちらちら見ていた。

男女が手を繋いで歩いていくまで、二人はそうしていた。

「……その、こういうとき、うふふ、困ってしまいますね」

「……ヒノエ姉さま、お顔が真っ赤ですよ」

「な、慣れなくて……。あ、もしかして、まだ私が勘違いしていると

思っていますね、ミノト。キスをしても赤ちゃんはできない。ちゃんと覚えていきます」

そうして、ヒノエは少しだけ胸を張って、

「将来を誓い合った男女が共に生活していると、女性のお腹の中に赤ちゃんを授かることができる。ミノトが教えてくれたことです」

「……はい。その通りです、ヒノエ姉さま」

嘘はついていない。

嘘はついていないけれど。

なぜ本当のことを教えなかったのか。

それは、ミノトにも分からない。

ただ、あの時。

ヒノエに本当のことを教える事に、抵抗感があつたことをミノトは自覚している。

「だって……ヒノエ姉さまにあんな事やこんな事を教えるのなんて……そんなの拷問じゃないですか……！」

「ミノト？」

「何でもありません！」

「あれ？ でも、不思議ですね。共に生活しないといけないのなら、どうして押し倒したら赤ちゃんを授かるのですか？ ミノト、どうしてですか？」

「地獄ですか？」

この後、ヒノエの素朴な疑問に精神的にへとへとに疲れたミノトは、三日ほど休んだ。

あと里長を恨んだ。

6話 贈り物

どうして母ちゃんは父ちゃんと結婚したの？

幼少のツミキの疑問に、ツミキの母は柔らかな微笑みを浮かべた。

「下半身の相性が良かったんだよ、ツミキ」

ツミキの母はドスケベだった。

「いい、ツミキ。覚えておくんだよ。プレゼントはね、”大好き”の贈り物なんだよ。女の子が男の子に何かを渡したいつてときは、100パーセントえっちなことなんだから」

「100パーセント？」

「100パーセント」

「分かった、覚える！」

ツミキの母は、息子にろくなことを教えなかった。

だから時が経って成長した息子は、こんな事になっている。

「ねえ、ミノト。女ハンターの防具ってちよつとエッチすぎない……？」

「ついにハンターの装備品に欲情するところまで来たんですか……!?」

おたくの息子さんの成長、本当にこれで良かったんですか？

それはさておき。

何でもない日の、何処にでもあるような、微睡むような日差しがふわりと降りてくるような昼下がり。

倒木をそのまま加工して作ったような長椅子に腰掛けて、少年と少女が語らっていた。

「違うってば。ミノトは誤解している」

「誤解……？」

戦慄するミノトの誤解を解こうと、ツミキはわちやわちやと手を振ってジェスチャー。

「僕は女ハンターの防具がえっちだと言ったけど、それは防具自体がえっちというわけではなくて、えっちな防具を着ている女の人があっ

ちだつてことを言いたくて……あれ？ やっぱり防具はえつちなのか？」

「誤解の余地がないじゃないですか！」

「違うんだつて！ これは……そう！ うさ団子は1つでも美味しいけど、ダブルにするともっと美味しいって意味合いでのえつちななんだ！」

「つまり……？」

「えつちな防具をえつちなものとして自覚して身につけてる女の子はともえつちだということを僕は言いたい」

「狩猟のための防具を命を守るために身につけてるんですよ！」

「そんなわけがあるか！ アヤメさんのナルガ装備を見てよ！ ナルガメールの鎖帷子は百歩譲つても、ナルガグリーブの内腿の切れ込み何のためにあるの!? あんなのえつちにしかないじゃない!!」

「洗練されたハンターの防具には全てに意味があるんです！ だからあの切れ込みも、そこに切れ込みがなければならぬ重大な理由があるはずですよ！」

「でも男用のナルガグリーブには切れ込みないよ。切れ込みに防具として重大な意味があるなら、男用防具にも切れ込みがあるはずでは？」

「それは……。……………」

ミノトは黙り込んだ。

「……………脚周りの動きやすさ、とか」

たつぷり悩み込んだが、流石に苦しかった。

本人も自覚しているようで、語尾は消え入るような声になっていた。

「ふ……分かったかな、ミノト。女ハンターの防具には、防具として無意味な露出が散りばめられている。つまり、初めからえつちなものとして作られているんだ」

「い、嫌です……！ こんな事絶対に認めたくない……!! だけど否定できない……!!」

頭を抱えるミノトの隣では、真理を垣間見たツミキが、悟りを開い

たような顔をしていた。

「ハモンさんはえつちな防具を次々と作り出す、神の腕と発想力を持ったエロスメーカーだったんだね……これからは師範と呼ばせてもらおう」

ハモンがこの場にいたらツミキを殴っていただろう。

後日、ツミキに師範！ 師範！ と付き纏われて困惑するハモンがカムラの里で目撃される。

「それで、一つ相談があるんだ、ミノト」

「……!? 私にどんなえ、えつちな防具を身に付けさせるつもりですか!? 絶対に装備しませんからね！」

「いや、そうじゃなくて。僕、ナルガ装備を作ろうと思っててさ」

「私にナルガシリーズを着せてどうするつもりなんですか!? このっ、変態！ すけべ！」

「僕のだよ！ 僕のナルガ装備を作るんだって！」

「あ、ああ、ツミキのですか……。早とちりしてしまいました……。でも、どうして急に？」

ミノトの記憶では、ツミキがより良い武具を求めたことはない。

モンスターを狩る事が出来れば何でもいい。

そういつた適当さがツミキにはあった。

「いやね。僕はある程度必要性を感じてなかったんだけど……里のみんながさ、そろそろ装備を強化したほうがいいんじゃないかって」

「ああ、なるほど」

その理由は、ミノトからしても納得のいくものだった。

ツミキはハンター訓練生を卒業したばかりの、新米ハンターだ。

けれど、ツミキが狩猟してくるのはいつも飛竜などの大型モンスターばかり。

使用する武具と、狩猟するモンスターが全く釣り合っていないのだ。

いくらツミキと言えど、あまり強いモンスターの装備でないもので大型モンスターを狩り続けていけば、万が一がないわけではない。

村のみんなが装備の強化を勧めるのも、当然のことだった。

「それで、どうしてナルガ装備を？ 他にも選択肢はあったと思いませんが」

ミノトの疑問に、ツミキは神妙な面持ちで答えた。

「これは噂なんだけど、ナルガ装備を付けるとナルガクルガの隠密性が宿って誰にも気付かれることなくエッチな事が出来るらしい」

「動機が不純すぎるにも程があるんですが!？」

「父ちゃんが言っていた……覗きは浪漫だと」

「ヒノエ姉さままで覗いたら一生許さない」

「ミノトはいいのか!？」

「良いわけではないでしょう馬鹿なんですか!？」

困みに、地方によつてはナルガシリーズには気配スキルが付くが、カムラの里で精製するナルガ装備には気配スキルはない。

「あ、ツミキ」

後ろから声をかけられて、ツミキが振り向く。

そこには、ナルガ装備に身を包んだ元上位ハンター、アヤメがいた。

「……？ どうしたんだい、2人とも。アタシをじつと見たりなんかして」

「……ミノト」

「……ツミキ」

首を捻るアヤメをよそに、頷き合つた2人はうん、と一度頷いて、

「ナルガ装備に隠密性があるなんて大嘘だね」

「近くで見ると改めて感じますね。隠密する気ゼロですよ」

「今もしかしてかなり失礼なことを言われてないかい？」

ハンター防具の奥は深いのである。

どうやら、アヤメはツミキに頼み事があるらしい。

「知り合いの新人ハンターへ、お祝いの贈り物をしたくてね。本当は自分で素材を取りに行ければ良かったんだけど……脚がね。だから、素材を譲ってはくれないかい？」

アヤメは上位ハンターだった。

過去の話だ。

狩猟中に脚に怪我を負ったアヤメは、その怪我が原因で半ばハンターを辞めている。

カムラの里へも、ハンターという人生の大部分を埋めていた生き方を失ったアヤメが、放浪の果てに辿り着いたという経緯がある。

依頼内容は、ケルビの角と上竜骨の納品。

ツミキは、気さくに引き受けた。

「いいですよ。上竜骨は何本ですか？ 100本？」

「いい、いや、1本だよ。……100本も持つてるのかい？」

「数え切れないから分からないかなあ……。僕の家は倉庫、5割ぐらいモンスターの骨ですよ。大型モンスター狩ったらなんかついてくるんですよ、骨」

「オマケみたいな言い方」

「けど、ケルビの角はどうだったかなあ……。ミノト、倉庫にケルビの角あったっけ？」

「前に、倉庫の整理に行ったときにはなかったですね」

「じゃあ取りに行かなきゃだね。……アヤメさんアヤメさん、雷狼竜の角じゃだめなんですか？ ほら、色似てるし」

「ダメだけど……雷狼竜の角はあるのかい？」

「うん。いっぱい」

「ハンターに成り立てだよね……。？」

考えたら負けである。

納品素材が手持ちにないのであれば、フィールドへ獲りに行くのがハンター。

そういうわけで、ツミキはケルビの角を求めて水没林へと赴いた。赤焼けた岩肌がむき出しになった大地に、絡みつくように植物が生い茂る植生。

膝下まで泥水が浸しているフィールドは結果としてハンターの視界を悪くし、移動のしにくさによって徒らに体力を浪費させてくる。

移動しにくさ。視界の悪さ。要所で浪費してしまう体力。

フィールドそのものが「生物を狩る罠」のような、自然が生み出し

た狩場。

「で、なんでミノトはついてきたの？」

「アヤメさんはお礼に、カムラの里では製法が伝わっていない強弓の作り方を教えてくれるという話です。なら、ヒノエ姉さまへの贈り物にどうか、と。それに、水没林にも行ってみたかったですので」

「ああ、そういう……。でも、良かったの？ その装備で水没林にきて」

「どういう意味ですか？」

「どういう意味も何も……」

じっと、ツミキはミノトの頭の上から足のつま先まで視線を往復。

ミノトが纏っている装備は、いつもの巫女服である。

依巫シリーズと呼ばれる防具であり、大部分が布で構成されている。

そう、布である。

そしてここは水没林。

導かれるのは黄金の方程式!!

「……そのエツチな視線で何を考えているのかはわかりました。はあ、いいですか、ツミキ。この巫女服は仮にもハンターの防具です。身を守る鎧です。それが、濡れた程度で透けるような薄い布を使っているわけがないでしょう。変な期待はしないことですね」

その考えは甘い。

二時間後、ミノトはそれを痛感することになる。

「か、帰りたいです……!」

ミノトはずぶ濡れになっていた。

ぼたぼたと髪の前からは濁った水がしたり落ち、水を含んだ布の服は重く、体に張り付いてとても気持ちが悪い。

そのうえ、温暖多湿な環境でじめじめとしている水没林は、非常に蒸れる。それはもう蒸れる。

圧倒的な不快感。今すぐカムラの里に帰って風呂を浴びたい気持ちでいっぱいだった。

そしてなにより。

「布には、透けなくても張り付くというえっちなさがあるんだよな。それに、水が滴ってる女の子って普段見ることがないから、特別感があって素敵だよな。分かるかなあ」

「わからないですし、私の後ろを歩くのやめてください。視線がいやらしい」

「お尻をランスで隠しておいて何を言う!!」

「お、おお……なんて感嘆を漏らされたら誰だって隠しますっ！ほんとうにすけべで変態ですね!!」

「僕の記憶より大きくなってたから感動した」

「さいっつっつっていっ!!」

「父ちゃんは言ってたよ。女の子がえっちな格好してる時は、男として見るのが礼儀だって」

「あまりにも自分に都合のいい解釈!」

モンスターが生息し、人が活動するには過酷なフィールドである。けれど、賑やかな道中だった。

まあ、ツミキがいる以上「モンスターに襲われて全滅」なんてことは早々起こりえないので、その安心感が知らず知らずミノトの体から余計な力みを取り除いており、無為に体力を消費することもなくなっていた。

「狼には襲われそうですけどね!」

「狼? ジンオウガいたっけ。狩ってこようか?」

「そんなちよつと買物行ってくるみたいなのりで狩猟できるモンスターじゃないんですけどね……今更感ありますけど」

本当に今更である。

なにせ、これまでにツミキが狩猟したモンスターは3体。

その一部始終は、

「つ、ツミキ、あそこ、大樹の根元を見てください」

「リオレイアか。まあ、進路の邪魔になるわけじゃないし、襲ってこなければ無理に狩猟することもないんじゃないかな」

「わ、わわわわわっ!? ツミキ! なんか口から火の粉を吹かせながらこつちを睨んでませんか!」

「狩猟してくるからここで待ってて」
ワンカウント。

「きゃああああああああつ!!?」

「ミノトっ！ 落ち着いて離れて！ 背を見せたらだめだ!!」

「げほっ、ごほっおえ、あ、ぐ……ツミ、ツミキ！ 逃げないと、あれは金獅子！ 伝承の古龍に匹敵する災害クラスのモンスター!! 人が、人が戦ったらダメなモノです!!?」

「あいつ、僕たちを認識した瞬間に襲ってきた!! 人を完全に〃殺すもの〃として認識してる！ 今ここであいつを逃がせば、いつかどこかで必ず誰かがこいつに殺される!!」

「でもっ!!」

「絶対に逃がさない。お前が誰かを殺す前に、僕がお前を討伐する」

ツーカーウント。

「ずぶ濡れになったね……」

「ずぶ濡れになりましたね……。さすがに気持ち悪いです……。着替えたい……」

「水浴びてさっぱりする？ 水がきれいなところあるよ」

「本当ですか？ それはとても魅力的ですが……。その間、ツミキはどこっ?」

「フィールドって危険だからさ。それに、護衛って近くにいないと意味がないと思うんだよね」

「我慢します」

「どうして!？」

「自分の胸に聞いてください。行きますよ」

「ちえー……。あ、ミノト待って……。お、おお……。桃……」

「ツミキ？ 何を……。え、いやああああ!!?」

小休憩。

「……」

「ツミキ？ 何を見て……。あ」

「行ってくる」

「……大丈夫ですか？」

「心配してくれてるの？ 大丈夫だって。光るゴリラを討伐した後で疲れてるけど、アオアシラ相手に後れは取らないよ」

「……そうですね。でも、アオアシラなら私も一緒に戦えます。だから、一緒に行きましょう」

以上が、ツミキとミノトの、水没林に到着してからの出来事である。

「特に何事もなかったね」

「その感覚は絶対に早死にしますよ」

ケルビの角を獲りに来ただけなのに、ちよつとした大冒険である。

ミノトは頭が痛くなった。

あ、ケルビの角はこの後簡単に入手しました。

まあ、当たり前だよな。

「あれ、ミノト。依頼されたケルビの角は一本だよ？」

「まあ、予備ですよ、予備」

そして、帰り道。

「それにしてもさ。アヤメさんが贈り物をしたい新人ハンターってどんな人なんだろうね」

ミノトは少し考えて、言葉にした。とても綺麗な声だった。

「私たちはその方の人物像を知らないの、わかりません。けれど、とても素敵な方なのだと思います」

アヤメは、上位ハンターだった。

けれど、狩猟中の怪我が原因で、実質的にハンターを引退せざるをえなくなった。

それまでの人生の大部分を占めていたハンターという生き方が突然消えてしまつて、アヤメの心境はどういうものだったのだろうか。

事実はともかく、アヤメは今までの自分から離れるように、辺境であるカムラの里までやってきた。

「ハンターを引退された方が、引退後も防具を身に着けているのはよく聞く話です。ですが、アヤメさんの場合は、少し事情が違うように思います。怪我によって訪れた突然の引退。ハンターである自分から距離を置くように、それまでのアヤメさんのことを誰も知らないカムラの里にまで来た。……けれど、アヤメさんは、ずっとハンターの

防具を身に付けていた。これは、どうしてなのでしょうか」

ミノトは、それを未練だと思っている。

よくある話だ。

失くしてしまったものに拘泥することを、ある人は弱いと突き放すかもしれない。

でも、ミノトは、それを弱さとは考えない。

竜人族であるミノトは、これから生きていく長い時間のなかで、たくさんの大切なものをなくしていくだろう。

それは物であるかもしれないし、名誉であるかもしれないし、絆かもしれない。

少なくとも、今ミノトが大切に思っている人たちの中で、100年後もミノトと一緒にいられる人は、姉であるヒノエだけだろう。

それも、きつと、いつかは失くしてしまう。

どれだけ大切に思っているにしても、いつなくなるか分からないだけで、いつかなくなってしまうのだ。

「でも、だからといって、そう簡単に割り切れるものじゃない。アヤメさんがハンターとしての自分を簡単に受け入れられていたのなら、きつとカムラの里には来なかった。過去の自分から離れるということとは、それまでの繋がりを断ち切るということですよ」

けれど。

アヤメは、過去の自分との繋がりを残していた。

その理由は、未練だけだったのだろうか。

「私には、そうではないと思っています。いえ……そうでなかったら、いいと思います。かつての、ヒノエ姉さまが……私が、そうであったように。過去の自分を肯定できるような何か……出会いがあったのだよ」

ヒノエが、竜人族である自分を受け入れられたように。

ミノトにも、そういう出会いがあった。

「だって……そっちのほうが、ロマンがあると思いませんか？」

「本の中の物語みたいだね」

「物語よりも素敵な現在だって、きつとあるんです」

モンスターが生態系の頂点に立つ、人の命が軽い世界だ。
生きていくのは大変で、涙をこぼすような悲しいことだってありふれている。

それでも、ミノトはこの世界は美しいのだと、そう信じている。
悲しいだけじゃなくて、涙を笑顔に変えるような救いがあるのだと。

「だから。アヤメさんが贈り物をしたい新人ハンターの方が……アヤメさんにとっての大切な人だと思うから。きっと、素敵な人なのだと、私はそう思います」

アヤメが贈り物をするその行為に込められた意味を想像して、ミノトはふわりとほほ笑んだ。

心の内側が温かくなるような、そんな気持ち。

優しさが心地よく体の内側ににじむような空気感。

ツミキは、とても綺麗な目をして言った。

「じゃあ、やつぱりアヤメさんは新人ハンターの人とえっちなことするのかなあ」

最低だよ。

「……………はい？」

「え？ いや、プレゼントのあと、アヤメさんは新人ハンターの人とエッチなことするのかなって」

「……………え？ どうして？ なんで今言うの？」

ミノトの頭がバグった。

「よく知らないけど、母ちゃんがそう言った。大人の世界では、プレゼントのあとにエッチなことするんだって」

「ろくでなし親子……………」

「待てよ…………？ ということは、プレゼントをすれば僕もエッチなことができる…………？」

「できるわけなんですし、そんな動機でヒノエ姉さまにプレゼントを渡しているツミキを見たら私は黙っていないですからね!!？」

「あ、そうだミノト。実はミノトに贈り物があつてね」

「この流れでそれは冗談抜きで最悪ですから次やったら刺しますよ」

「えっ」

「えっじゃないですよしばきますよ」

いい空気は台無しになりながら、夜は更けていった。

後日。

無事にアヤメにケルビの角を納品して、ヒノエの強弓を製造した後
のこと。

「ツミキ」

「ミノト。おはよ、受付嬢は？」

「休憩中です。……その」

「……？」

ミノトは、少しだけでもじもじと何かを躊躇う仕草をみせたあと、ぐつと意を決するよう一息を入れて、ツミキの眼前に腕を突き出した。

手袋に包まれた四本指の手に乗せられていたのは、小さな赤い小瓶。

いにしえの秘薬と呼ばれる、回復アイテムだった。

「ツミキはいつもいつも危なっかしいですからね！ ツミキがとても強いのは知っていますけど、それでも、危険なモンスターばかり狩猟しているから、不安になってばかりです!! だから、もし万が一のことがあったときに、ヒノエ姉さまや私が安心できるように、これはずっと持ち歩いてください!! 分かりましたか!!? 分かりましたね!!!? それじゃあ私は受付嬢の仕事がありますので!!!」

「え、あ、ちよつミノト!?!」

ツミキが何かを言う前に、まくしたてるようにそう言い切って、ミノトは走っていった。

遠ざかっていくミノトの背中をほけつと眺めながら、渡された赤い小瓶を見つめる。

ふわりと、舞い上がるような熱があった。

『プレゼントはね、大好きな贈り物なんだよ』

遠い日の母の言葉が頭をよぎって、ぽりぽりと人差し指で頬をかいた。

むずがゆさが、胸の奥から顔に上っていく感覚。

なんだか叫びだしそうで、でも叫ぶとこの気持ち漏れてしまいうで、それがとてももつたないことのように思えて、でもこらえきれなくて、ほうと、控えめに息を吐いた。

「まさか、ね」

つぶやかれた声は、あくびをしているような白い雲に吸い込まれていった。

一方その頃！ お留守番をくらっていたヒノエは！

「うさ団子は今日もおいしいですね、うふふ」

「ヒノエさん、ヒノエさん、いいんですか？」

「なにがでふか、ヨモギちゃん」

「いえ、今、多分ものすんごい抜け駆けをされてると思いますよ。女のカンってやつです」

「ああ、そのことですか。いいのです。だって……」

「たった一人の大切な妹ですから。私が一方的に取ってしまうと可哀そうでしょ？」

次回、ヒノエのターン。

7話 天才（つみ）

カムラの里の朝は早い。

初夏。日が上り始める明朝には、人が動き出す気配が立ち込める。母親が魚を焼く匂いや、農夫や漁師がガラリと玄関を開けて働きに行く音。

1日の始まりを感じながら、カムラの里をぶらぶらと散歩するのがヒノエの朝の日課だった。

きよろきよろと、辺りを見渡しながら、まるで何かを探すようにヒノエは歩く。

すれ違う人々ににこやかに挨拶を交わしながら、やっぱり何かを探すように。

「あつ」

船着場へと続く階段の途中で、塀にもたれ掛かるようにして眠っているツミキを見つけたヒノエの顔がぱつと華やぐ。

起こさないようにそつと近づいて寝顔を堪能した後、ツミキの側に腰を落として、ツミキが起きるのを待つ。

ヒノエは、自分だけがツミキの側にいられるこの時間が好きだった。

もつとも、眠りの浅いツミキはすぐに起きてしまうので、その時間は長く続かないのだけでも。

「……………んあ、ヒノエ？」

「ふふ、おはようございませす」

「ふあ……………おはよう……………」

「今朝は、随分と遠くまで来ましたね。眠れていますか？」

「ん……………ぼちぼち」

「うふふ、それは何よりです。…………もし、まだ眠いようでしたら私の膝をお貸ししますよっ」

「……………までじゃないかな……………よつと」

一度深く息を吸って、吐き出したツミキが立ち上がる。

それだけで、ツミキの顔から眠気と気怠さが消えた。

飯に、今ツミキの背後からベリオロスが竜巻ダイブしてきても、ツミキは鼻唄を歌いながら避けるだろう。

起床後、直ぐに動けることは、ハンターにとって重要なことなのである。

ぐぐぐと体を伸ばしたツミキが、片手でお腹をさすった。

「お腹空いてる」

「うさ団子を食べますか？」

「団子はちよつと重いかな……」

「では、二皿にしておきますか？」

「量のことじゃないんだ」

「そうですか……と残念そうなヒノエ。」

「水浴びて着替えてくる。ご飯は……あー、今朝はいいや。ヒノエは？」

「私は集会所へ。少しばかり早いですが、里長に呼ばれていますので。今日は、クエストには行かないのですか？」

「あー、うん。今日はね。……うん」

「……ツミキ？」

「ん、なんでもない。それじゃ、ね。朝からヒノエに会えたし、今日はいい日だ」

「ふふ、毎朝会ってるじゃないですか」

「うん。だから毎日良い日だ」

「またねー、と手を振りながら歩いていくツミキを見送くる。」

ツミキの姿が見えなくなつてから、ヒノエは笑みをこぼした。

「ぽかぽかと胸の内に広がる温かな感情の名前を、ヒノエはずっと前から知っている。」

「ツミキはこの後……ああ、そういうことですか。里長の用事を早く終わらせてしまわないとですね」

「せっかく一緒に居られる時間があるのに、その時に手が空いてなくて共に居られないなんて、泣いちやいそうなぐらい悔しいから。」

「足取りは軽やかに。」

「けれど弾むように、気持ち急ぎ足で。」

朝、少しだけ会話しただけなのに。

それだけなのに、自分でも笑ってしまうぐらい、ヒノエは上機嫌だった。

集会所とは、ギルドから回されたクエストの管理を行ったり、クエストに赴くハンターに飯を振る舞ったり……要は、ハンターにとって重要な、ハンターのより場のようなものだ。

もつとも、カムラの里にいる正式な現役ハンターは現状ツミキのみのため、より場としては機能していない。

現状、カムラの里の集会所は「あそこにいけば里の誰かはいるだろう。ちよつと遊びに行くか」程度に利用される、公共施設のような扱いをされていた。

そのため、日中は里の者……主に年老いて一線を引いたご年配方が集まるため、賑やかな健康ランドのような様相になっているが、流石に早朝ともなれば人の影は少ない。

そんな集会所の、山紫水明な自然を一望できるテラスでフゲンと竜人族姉妹は話していた。

「それで、押し倒して一発やったのか？」

「女の子に最低な質問をするために人気のない時間帯を指定したんですか？ いい加減にしないとぶっ飛ばしますよ？」

「とても大事な確認なのだが。俺には里長としてツミキと一発やったかどうか知っておく責任がある」

「もうこの里滅んでしまった方がいいんじゃないでしょうか？」

「ミノト、ミノト、一発ってどういう意味ですか？」

「ほら!! ヒノエ姉さまが興味を持ったじゃないですか!!!」

「ヒノエ、一発というのはだな……」

「ヒノエ姉さまになにを教えようとしてるんですか!!!」

ヒノエの前に立ちはだかり、長い黒髪を振り乱しながらふー!

ふー! とフゲンを威嚇するミノトに、フゲンはあのかなあ……と嘆息する。

「少々過保護が過ぎるんじゃないか、ミノト。ヒノエは人間で言えば、もう結婚する歳だ。そろそろ姉離れしたらどうだ？」

「それと里長が最低な質問をしていることは関係ないんですけど!」

「前々から言っているが、ツミキは助平な男だ。ヒノエのような美しい女子が迫れば、簡単に落ちる」

「そんな、見目麗しくて器量もよく、いい奥さんになるだなんて……。褒めすぎですよ、里長」

「うん……。ま、まあとにかく。カムラの里の未来のため、ツミキが里から出ていくのは非常にまずい。それは分かっているだろう？」

「それは……。そうですが! だからといって大切な姉をスケベに嫁がせる妹が何処にいますか!」

「本人が望んでいるだろう……。過保護なものも結構だが、ヒノエの意思を尊重してやるのが家族の愛というやつだ」

毎度のやり取りに、フゲンが呆れたように嘆息する。

それでも、ふしやー! と猫のように食ってかかるミノトの氣勢が萎えることはない。

「ダメなものはダメです! 例え本人が望んでいても、不幸になると分かっているその意思を尊重するのが家族の愛だというのなら、私は人でなしでいい!」

「ツミキと結婚すれば、ヒノエは不幸になるのか? 俺は、ツミキがヒノエを不幸にする男には見えないが」

「……そ、それはっ」

「確かにあいつはスケベだ。だが、外道ではない。スケベではあるが」
「そうですよ、ミノト。ツミキは確かに……。その、エツチな目を時々……。わりと……。1日に数回……。するときはありますが、とても温かい人です」

……。そんなことは、言われなくなつてミノトは分かっている。

分かっているても、飲み込めるものと飲み込めないものがあるという話。

ずっと前からだ。

ずっと前から、ツミキがヒノエと一緒にいるところを見ると、決

まっつ胸に小さな針で刺すような痛みが走る。

その痛みの名前から、ミノトは必死に目を背けている。

……それとは、別に。

ツミキとヒノエが結ばれることに、言いようのない胸騒ぎがすることも、理由の一つではあるが。

押し黙ったミノトを見て、難儀なことになったものだどフゲンはため息をついた。

ほつれにほつれ、絡まりに絡まった赤い糸は何処に繋がっているのか。

「まあ、俺はハーレムでも一向に構わんのだが」

「あの、今シリアスな話をしてませんでしたか？ このツミキばりの空気の読めなさ……まさか里長に似たとかじゃないですよね」

「美人姉妹丼に飛びつかない男はいまい。ツミキでなくても一撃だ」

「どこまで最低値を更新するつもりですか?」

「夜はさぞ燃え上がるだろう。ふっ……気炎万丈!」

「最悪のタイミングで決め台詞に入りましたよ!」

ぎやーぎやー喚くミノトとフゲンをよそに、ヒノエはツミキに早く会いたいなあ、と集会所の出入り口を眺めていた。

「まあいい。取り敢えず、現状はツミキには可能な限り遠回りをしてハンターランクを上げていってもらう。どういう訳か、里を出たがっている割には、カムラの里でハンターランクを上げることには拘っているからな」

「その点は抜かりありません。ツミキには、同ランク帯の全てのクエストを網羅しなければハンターランクを上げることは出来ないと伝えていきます。もつとも、ツミキの実力であれば時間稼ぎにかなりませんけど……」

「それでも、時間は稼げる。その間にヒノエがツミキを籠絡すればいい」

「頭が真っピンクですわ本当に!」

再び始まる言い合いを聞き流しながら、ヒノエは思う。

2人とも、勘違いをしている。

確かにツミキにはカムラの里を出る意思がある。
あるが、それだけだ。

ツミキはカムラの里から出られないと、ヒノエはここ数ヶ月で確信していた。

だつてそうだろう？

本当にカムラの里を出たいのであれば。

本当にカムラの里を出たい気持ちがあるのなら。

どうして、ツミキほどの強さがあるながら、カムラの里で新米ハンターなんかやっているのか。

少し考えたら分かる。

ツミキには、カムラの里から出られない理由があるのだ。

「ふふ……。まあ、分かりきっていますけどね、そんなこと」

最初、ツミキが里から出たがっていると聞いたとき、ヒノエは我が耳を疑った。そして、焦った。

ツミキが里から出たがるなど、思いもしていなかったからだ。

まさか……。という、疑念。

確かめなければ……。という、焦燥。

けれど、この数ヶ月が、ヒノエに答えを教えてくれた。

「里長。経過報告は、もう十分ですか？」

腰を上げる。

もうここにいる理由はないだろうとヒノエは判断した。

「ん……。ああ、十分だ。引き続き頼んだぞ、ヒノエ」

「だーかーらー！ ヒノエ姉さまにそんなことはさせません！」

「ミノト、元気なのは良いことですけど、もうそろそろ受付嬢の業務時間ですよ」

「そ、そうでした！ 里長が変なことばかり言うから……！」

「俺のせいなのか？」

慌てて受付嬢としての仕事に取り掛かるミノトの声を背に、ヒノエは集会所を後にする。

行き先は決まっている。

カムラの里から大社跡フィールドに続く道の途中……。小高い丘の

上にある場所。

そこに、間違はなくツミキがいる。

何故なら。

「……今日は、ご家族の命日でしたね」

そこに、ツミキの罪の象徴があるから。

生きていれば、誰にだって辛い過去の一つや二つある。

モンスターが生態系の頂点に君臨する、人間にとって生き難いこの世界では、そんなの当たり前だ。

悲劇なんて、腐るほどある。

自分が特別不幸だなんて思ったことはない。

自分だけが辛いのだと嘆いたこともない。

けれど、こんな哀しみはありふれているという事実は、魂を引き裂くような痛苦を癒してくれることはなかった。

もつとも、ツミキのそれは、この世界にありふれているものとは、少しばかり毛色が違ったが。

見晴らしの良い丘の上は、拳ほどの大きさの石と、人名が書かれた木製の板が1本。

板には、6人の名前が書かれている。

その手前に花を添えたあと、ツミキはずっと座り込んで、ただぼうつとしていた。

その背に、かけられる声があった。

「やっぱり此処でしたか」

「……ヒノエ」

「はい。私です。……私も、花を供えさせて頂いてもいいですか？」

「……ありがとう。母ちゃんたちも、きつと喜ぶ」

そういつて、ツミキは腰を上げて場所を開ける。

その場所に膝をつき、花を供えようとしたヒノエが、あ、と小さく声を漏らした。

供えられた花束が2つあったからだ。

「1つはミノトですか？」

「多分ね。僕が来たときにはもうあつた。僕も結構早くに来ただけど……ははは、早起きではミノトに敵わないや」

「自慢の妹ですから。私も毎朝起こしてもらっています」

「そこで胸を張るのは何かがおかしいと思う」

戯けつつ、あの子らしいな、とヒノエは思考を飛ばす。

まだ、この場所でツミキと会うのは気不味いのだろう。

それなら、ツミキが帰った後に花を供えれば……と思わなくもないが、それはそれ、これはこれ。

決して口にするのではないが、きつと、私も忘れていないというミノトのメツセージなのだ。

花を供え、厳かに手を合わせた。

そんなヒノエを、ツミキはじつと見ていた。

膝を抱えて三角座りをしているツミキと、正座をしたヒノエが、隣り合つて、ただ無言で座っていた。

幾ばくかの時が過ぎて、ツミキが、口内に迫り上がった水が決壊するように眩いた。

「此処に来る途中で、セイハクくんに会つたんだ」

セイハクとは、おにぎり屋を営む夫婦の一人息子だ。

幼い少年にありがちな強さへの憧れがあり、それはそのまま、ハンターとして天才であるツミキへの憧れになっている。

ツミキ兄ちゃん、とツミキを慕う彼のことを、ツミキも可愛がつていた。

けれど、そんなセイハクのことを話すツミキの声は苦々しい。

「ヨモギちゃんから聞いたみたいだ。僕は最初からどんなモンスターでも狩猟できたつて。……羨ましい、凄いつて、そう言われたよ」

「それは……」

なんて残酷な言葉だろう。

その一言を、ヒノエは飲み込んだ。

「分かつてるよ。セイハクくん……もちろんヨモギちゃんにも、悪気があつたわけじゃない。実際、僕は最初からこうだった。それが他

人にどう映るのかは分かってるつもりだから」

それでも。

それでも、少年の無邪気な憧れから出た一言は、ツミキの心を深く抉った。

「此処に来ると嫌でも思い出す。金属がひしやげる音。父ちゃんの絶叫がだんだん小さくなっていった。飛び出した兄ちゃんたちの声が聞こえなくなつて」

「ツミキ」

「僕の頭を撫でた母ちゃんが歩いていくのが見えて。追いかけてやろうとする僕を姉ちゃんがずっと抱きしめて。すぐ近くで水っぽいや音が落ちる音がして。地面が赤くなつていった」

「ツミキ。ツミキ！」

「肉をかき混ぜるような音がして。骨が砕ける音がして。母ちゃんの手があつた。姉ちゃんがずっと泣いてた。心細かつたから母ちゃんの手を握つたら手首から先が」

「ツミキ！ もういいです！ やめて！ やめてください！」

「……あ、う」

壊れた機械のように独白を続けるツミキの肩を、折れるぐらいに強く掴んで、揺さぶる。

そこまですて、ようやくツミキの独白が止まった。

焦点の定まらない瞳が、ヒノエを捉える。

座り込むツミキと、ツミキに向きあつて、その肩を掴むヒノエ。

それは、あの日の、ツミキとツミキを抱きしめる姉の光景に酷似していた。

その直後。

「……う、お、ああ、おえええええ」

込み上げる嘔吐感を堪えることも出来ず、ツミキは吐き出した。

朝から何も食べていないためか、胃液のみが吐き出される。

喉を焼く痛みがあるにも関わらず、ツミキは吐き続けた。

正面にいるヒノエの巫女服に、ツミキの吐瀉物が跳ねる。

それを全く気にもとめずに、ヒノエはツミキの背を優しく撫で続け

た。

吐けるものを全て吐き出したあと、まだ残っていたものをツミキは吐き出した。

「……みんなが僕を赦すんだ」

自分で自分を刺し貫くような言葉だった。

「僕は悪くないって。僕のせいじゃないって。みんなそうやって僕に優しくする」

過去のツミキに降りかかった災いは、言ってしまったえばごくありふれた悲劇でしかない。

ツミキの両親は家族で旅団をやっていて、他の里で一仕事を終えた後の、カムラの里への帰還中にモンスターに襲われた。

そんな、この世界のどこにでも転がっているような、当たり前前の悲劇。

むしろ、ツミキが生き残っている分、まだマシな方だ。

けれど。

……どうして、ツミキは生き残ったのか。

他の家族はみんな殺されたのに、どうしてツミキだけが生き残ったのか。

あまりにも残酷な答えが、そこにある。

「そんな訳ない。そんなはずがない。父ちゃんが引き裂かれたのも。兄ちゃんたちが踏み潰されたのも。母ちゃんが八つ裂きにされたのも。姉ちゃんが食われたのも。全部僕のせいだ。僕のせいじゃないといけない」

だって。

「僕は……そのモンスターを狩れたんだから」

ツミキは天才だ。

そこに理由はなく、意味もない。

ただ、この世界で頂点に君臨するかもしれないほどの、天才だという事実だけがある。

武道において、その道の熟練者が何十年もかけて到達する境地に、初めてで達する者がいるように。

ツミキにとっては、それがモンスターを殺すことだったというだけの話。

目の前で姉が食われたあとの記憶がツミキにはない。

気付けば、モンスターの死骸と、ハンターでもあった父親の、血塗れの双剣が転がっていた。

ツミキに傷はひとつもなく、返り血で真っ赤に染まった自分の姿を見て、何が起こったのかを悟った。

出来るはずがない、とは思わなかった。

自分なら出来るという、残酷な確信があった。

モンスターに襲われて、殺される。

そんな悲劇は、この世界に溢れている。

けれど、殺される家族を助ける力があるのに、最後の最後まで怯えて震え、守られるだけだったクズは、この世界に1人だけだろう。

例え、その時モンスターを狩れる力があることに気付いていなくても。

その時、モンスターを狩れる力があつたという事実は消えてくれない。

あの時は弱かったからと、自分を赦すことも慰めることも出来ない。

敵わなくとも家族を守ろうと肉盾になった優しい人たちが死んで、家族を見殺しにした人でなしだけが生き残った。

それが、ツミキの抱える地獄。

「なのに、みんなが僕を赦すから……！ 僕に優しくするから……！

僕は悪くないのかもしれないって、ほんの少しでも思ってしまうことが赦せない……僕が！ 僕がみんなを殺したのに……!!」

だから、ヒノエは。

「はい。貴方が悪いです。ツミキ」

その地獄を、肯定した。

「ツミキが悪い。ツミキが殺した。モンスターを狩って助けることが出来たのに、そうしなかった。自分を赦せないのが当たり前です。貴方は、それだけのことをしました」

弱った心を痛めつけるような言葉。

けれど、追い詰められていたツミキの表情が、和らいでいく。

ツミキを労る手は優しく、温かい。

けれど、その言葉はどこまでも冷たく、痛かった。

「ヒノエは……ヒノエだけは、僕を赦さないでね……」

「ふふ、はい。私はツミキを赦しません。もし、ツミキがツミキを赦しそうになっても、私がツミキを赦しません」

「ありがとう……」

がくんと、ツミキの頭が落ちる。

それを、優しく受け止めたヒノエは、そっと自分の膝の上に乗せた。

「眠くなってしまいましたか？」

「うん……ごめんね……」

「いえ。……毎年のことですしね」

やがて、すうすうと寝息を立て始める。

その顔には苦悶が滲んでいて、悪夢を見ていることは明らか。

けれど、これでいいのだ。

悪夢を見ないと、ツミキは眠れない。

必然眠りは浅く、満足な睡眠を取れなくなるが、安らかな朝を迎えることは許されない。

悪夢を見なければ、自分を責めることをやめてしまったようで、その罪の意識でツミキは魘され起きてしまうから。

だから。

自分のことを赦さないヒノエの側でだけ、ツミキはしっかりと悪夢を見ることが出来る。

「……ツミキが、それを望むのなら。私は……」

ツミキの髪をそっと指で梳かす。

その眩きは、暮れてきた夕日に消えた。

だん!! と叩きつけるようにうさぎ団子が乗った皿が置かれた。
あまりにも乱暴な扱いに、ウツシは非難の色を込めて下手人に視線を向ける。

下手人であるところのミノトは、はんっ! と鼻を鳴らした。

「今日は随分と機嫌が悪いな……ヨモギちゃん、何があったか知ってるかい?」

「聞いたらお腹を抱えて笑うと思いますよー?」

「よ、ヨモギちゃん! 言わなくて良いですから!!」

「そう言われると気になるな。何があったんだい?」

「やー、それがですね、姉と違い男心を擦ることも出来ない小娘って里長に煽られたミノトさんがですね、自分にもできらい! って息巻いちやつて……ふ、ふくつ、あ、すみまふくつ」

「思い出し笑いしないでください!!」

「それで?」

「それで、何を思ったのかアイルーミミを付けて、ギルドに用事で来た私に『いらつしやいませニヤあ!』ってアイルーの手のマネまで、して、あはははは! だめ! にやあつて可愛く言ってるのに、ミノトさん真顔なんだもん!」

「やめてえええええ!!」

両手で顔を押しさえて座り込んでしまうミノト。

悪いとは思いつつも笑いが止まらないヨモギ。

ウツシは、ふむ、と頷いた後。

「こんな感じか? いらつしやいませニヤあ!」

「……」

「……」

「……あれ? 想定した反応と違うんだが」

「ニヤあの部分だけ本物のアイルーが鳴いたようでした」

「それなのにいらつしやいませはウツシさんの男の人の声だったから、アンバラスでちよつとキモかったねミノトさん」

最近の女の子の言葉は刃物みたいだな、とあまりにも痛くて冷たい

評価にウツシは心の中で泣いた。

「……そういえば、どうしてミノトはヨモギちゃんの茶屋にいるんだ？」

「……別に、大した理由ではありません」

ウツシの疑問に、ミノトはうさ団子を捏ねながら、

「そろそろ、お腹を空かせて帰ってくるころです。本当に、毎年毎年、この日になると手間ばかりかけさせるんですから」

愛だねえ、とウツシは思った。

8話 晩夏の出来事

例え誰かに抱え切れないほどの過去があっても。

例え誰かに違えてしまった過去の選択があっても。

例え誰かに踏み入ることのできない無力感があっても。

時間は平等に、時に激しく、時に緩やかに流れていく。

そんなこと、分かっていたのにね。

ツミキとヒノエ、そしてミノト。

ツミキはハンターになったことでクエストクリアに邁進し、ヒノエとミノトは受付嬢を始めたことで、訓練生時代より共にいる時間は減った。

それでも、3人の絆……という爽やかな感じがするので、腐れ縁とでも言っておく。

そんな3人の繋がりは変わらずにあり、タイミングさえ合えば、以前のように3人で時間を過ごすことも多々あった。

今朝もちょうど、そんな日だった。

「あれ、ヒノエとミノト？ 珍しいね、2人一緒に休みだなんて」

「ふふ、私たちもいつも受付嬢をやっているわけではないですから」

そんなわけで、ぼんやりとヨモギの茶屋で朝ごはんを食べていたツミキと、竜人族姉妹が合流した。

いらっしやいませー！ とにこやかに手を振るヨモギに挨拶を返し、うさ団子を注文する2人。

「ヨモギちゃん、私はサトウテキ大福をお願いします。ヒノエ姉さまは？」

「うーん、そうですね……」

うさ団子とは、カムラの里の郷土料理である。

何故うさ団子かと言えば、先端が二股に割れた串を団子に刺した時、串の先端がうさぎの耳のように見えるからだ。

美味しいのはもちろん。そして味のバリエーションも豊富であり、

毎日食べても飽きないとも。

あと、デカイ。

マジでデカイ。大の大人の握り拳ぐらいの大きさがある。

3段重ねアイスといえば、大人から子どもまで大好きな夢のトリプルだが、うさ団子3段重ねはそのポリュームがもはや殺人的であり、食欲旺盛なハンターぐらいしか頼まない。

なので、普通はミノトのようにうさ団子を1つ注文するものなのだ。

なのだが。

「ワザモモ大福とサクラクラ大福とサトウテキ大福の3段を1つ、ふっか月見だんごとのけぞらずんだ餅、おなかいっパインもちの3段を1つ、バラバラ白玉とミツタラシ団子、あとあんに丸だんごの3段を1つ。あとは……そうですね、キビキビだんご2つとヨジノぼたちちの3段を1つをくださいいな」

うおお……。

「毎度思うけど、なんでヒノエはあんなに食べれるの?」

「さすがヒノエ姉さまです」

「ダメだ、姉のことになると思考停止するんだった」

「私の作るご飯を三食きっちり食べた上で、ヒノエ姉さまはうさ団子3段重ねを日に50串は食べるんです。今更何を言えと?」

「何回聞いても数がおかしいんだよね……」

何度目かも分からない戦慄をするツミキをよそに、「注文入りしましたー!」と元気なヨモギの声を合図に、うさ団子の調理開始。

シラタマとキナコという二匹のアイルーが、ヨモギの陽気な歌に合わせてリズムカルに捏ねただんごをお手玉。

かと思えば、しゃきん! っと両手いっぱい複数本の串を広げたヨモギが、串をだんごにむかつて投擲。

一直線に飛翔する串が、見事に空中でうさ団子を三つ貫いてみせた。

異次元のエイム力である。明らかに只者ではない。

なんでこんな子が茶屋でだんご作ってるの?

ふと気になって、ミノトは尋ねてみた。

「ツミキ、あれ出来ますか？」

「出来るけど？」

「そうですね、訊いた私が馬鹿でした」

鳥に飛べるかと訊く間抜けはいない。

んうくと出来上がったうさ団子を堪能するヒノエ。

ぱくつと一口で食べているわけではなく、ガツガツと早食いしているわけでもないのに、瞬きの間にうさ団子が平らげられていく。

ツミキとミノトからしてみれば見慣れた光景ではあるが、例え見慣れていても圧倒される食欲だった。

「あの体のどこにあんなにいっぱいうさ団子が入ってるんだろ……ミノトと体型変わらないのに……」

「変態」

「判定が厳しすぎる」

「ヒノエ姉さまと私の体をじろじろと品定めしていました。すげべ」

「や、でも実際ヒノエとミノトはそんな変わらない……はっ!? まさか、ヒノエが摂取している栄養は全部胸にいついて、巫女服でよく分かんないけど脱いだらミノト以上の素晴らしいものが……!?!」

「ヨモギちゃん、このケダモノの目も団子みたいに串刺しにして構いませんよ」

「ミノトのうさ団子も相当……! だけどヒノエのうさ団子がそれ以上の……だとすれば……!! もちもち特大着痩せうさ団子が2枚だと!?!」

「えいつ」

「本当に串を投げる人いる!?!」

「ツミキさんがあまりにも最低だったので、つい……」

ヒュンつと風を切つて飛来する串を人差し指と中指で挟んで止めるツミキ。

挟んだ串を近寄ってきたヨモギに返す。

ヨモギはそれを受け取って、そのままゴミ箱に捨てた。

「衛生面には気を使ってますから!」

「え？ あ、うん、そうだね……」

それが正しいのだけれど、お前汚いから！ つて言われたみたいで、少しだけシヨックを受けたツミキであった。

さて。

「あ、そうだ。ツミキさん、それにヒノエさんとミノトさんも」

ぱん、と手を叩いたヨモギに、3人の視線が集中する。

ヨモギは、にこりと笑みを浮かべて、

「今日の夜、3人で集会所に来てくださいね！ 特にツミキさん！ クエスト行つて遅れたー！ とかなしですからね！」

それは、カムラの里のみんなからの、3人へのサプライズだった。

そして夜!!!

ヨモギに言われた通り集会所に向かった3人を待っていたのは、滅多に見ないようなご馳走と、いつも見てるカムラの里のみんなだった。

「なにこれ!?!」

「驚いたか？ お前たちの祝いの席だ、ツミキ」

「ああ……そういうことですか、里長」

ツミキがハンターになって、約二ヶ月余り。

ツミキから二ヶ月ほど遅れて、ヒノエとミノトもハンター訓練生を卒業した。

ツミキのようにハンター専門というわけではないので、フィールドに出ることは少ないだろう。

それでも、彼女たちはモンスターを狩れると認められた、ハンターになった。

ウツシの元から、3人の訓練生が卒業した。

そのタイミングでお祝いしようと、みんなが決めていたのだ。

ツミキたち3人の胸の内に喜びが広がったことは、言うまでもな

い。

そうして、3人を祝う宴会は始まった。

始まってしまった。

最初、ツミキはウツシとヒノエとミノトなど、馴染みのメンツで集まっていたのだが……いつの間にかフゲンとゴコクが加わり、ハモン、コジロー、ヨモギにイオリとどんどん人が増えていって……。

最終的に、飲めや歌えやの里のみんなを巻き込んだ大宴会に。

大人が宴に混じれば、当然そこに酒がある。

これは全てのものが上から下に落ちるように、この世の中の絶対の法則なのである。

そして、酒の席ではしばしばこういう光景を見ることが出来る。

「そういえばツミキ、お前酒飲んだことあったか？」

「や、ないよおっちゃん」

「なんだ、飲んでねえのかよ！ お前もあと二年もしたら嫁さんもらうような歳になんだ、酒の味ぐらい覚えとけてっ！」

「臭いが苦そうだからなあ……僕、回復薬も苦手だし」

「酒の味が分からねえガキンチョには女の味も分からねえ。お前の親父はこう言っただけだったか？ 酒を飲む男は女にモテる」

「何してるんだよおっちゃん！ 早くそのグラスを僕にちょうだい！」

そうしてツミキは初めてお酒を口にした。

結論から言えば、ツミキはお酒にめちやくちや強かった。

竜人族相手に飲み比べで勝つぐらいには強かった。

なので、みんな面白がってツミキにどんどんお酒を飲ませていき……。

さて、ここで一つ状況のおさらいである。

カムラの里は今、里ぐるみで”ツミキが里から出ていかないようにしましょう”という一つの大きな意思がある。

そこに想いの大小はあれど、全ての里の住人がそういう行動を取っていることに違いはない。

そして、里からツミキが出ていかないために現状効果的面だと考え

られているのが、ヒノエかミノトとツミキが結婚することである。
カムラの里のみんなは、そのための協力を惜しまない。

幼少の頃から知ってる少年たちが、自分たちの里で家庭を持つて幸せになっていくことに異を唱えるものなどいるはずがないのだから。
次に、宴会ゲームというものをご存知だろうか。

酒の席で行われるちよつとしたレクリエーションであるが……どうにも、これには少々えつちなものが多い。

お酒の魔力は、男女の性を多少解放的にしてしまう。

そして何より、ツミキという少年は潜在的にどすけべだった。
何が言いたいかというと。

ツミキが三本目の大樽を一人で空けたぐらいから、悪ノリが始まった。

「乳首当てゲエエエンムツ!! イエーイ!!」

「イエー——イ!!!」

男の一人がジョッキを天に突き上げ乳首当てゲームの開始を宣言!

周囲の男たちのスタンディングオペレーション!

半数の女たちのしょうがないなあ……みたいな満更でもない顔!

半数の女たちの男ってホンツトサイテーね、という冷え切った目!

気炎万丈!

多種多様な反応が会場に伝播する!

そんな中、ツミキは!

「乳首当てゲーム?」

「なんだ知らないのかツミキ。乳首当てゲームは人差し指でツン♡と相手の胸をソフトタッチして、乳首をお互いに探し合うゲームだ」

「ごくり。それは……女の子のおっぱいを触れるということですか……?」

「勿論だとも。ドンドルマでは常識だぞ」

「ドンドルマ凄い!!」

「なあ、ツミキよ。——見ているだけでいいのか？」

「乳首当てゲームイエ——イ!!!」

「それでこそ”男”だぜツミキ!」

酔ってても酔ってなくても変わんねーなこいつ。

木製の大ジョッキを振り回すツミキを、ミノトが極寒の眼差しで見
て……いや睨みつけていた。

計画が頓挫した瞬間である。

とはいえ、ツミキうんぬん抜きにしてもすげな事はしたいのが人
というもの。

里の人口は少なく、ツミキの同年代は殆どいないが、若い女や男が
全くないというわけではない。

若い男女を中心に、やん♡とかひゃん（野太い声）とか、若干ピン
ク色の空気が広がり始める。

誰が見ても不機嫌だと一発でわかるミノトの隣に、女が座った。

ミノトの前の集会所の受付嬢。つまり、ミノトの先輩にあたる人物
である。

「久しぶりね、ミノトちゃん。楽しんでる?」

「……楽しんでると思いますか?」

「あはは! ううん、まったく!」

「なら何故訊ねたんですか……」

はあ、とため息を溢すミノトを先輩受付嬢はけらけらと笑う。

ミノトは少しムツとした。

「こんな、女の体に触れるためだけのゲームを目の前でやらられれば、誰
だって不機嫌にもなります」

「えー、女が男の体に触るためのゲームでもあるんだけどなあ」

「気軽に触れるものではありません。貞操というものがないのです
か」

「気軽に触れられないから、ゲームって形にしてるんだよ。自分にも、
相手にも言い訳ができるように」

それは、ミノトには分からない大人の理屈だった。

男には性欲があつて、もちろん女にも性欲があり、双方の”それ”

を対外的に言い訳のきく範囲で満たす暗黙の了解。

ミノトがこの先、理解はしても共感はできない理屈でもあった。

「……理解できません」

「あはは、そりゃあミノトちゃんは……ねえ？」

「……なんででしょうか、その顔は」

「まあ分かるよ、分かるよミノトちゃん。私も旦那が私じゃない女の乳首を触ってるのは嫌な気持ちになるもん。だから、ねえ……？」

「……何が言いたいんですか？」

「ツミキが他の女の胸触るの嫌なんですよ？」

がたん、とミノトの跳ねた足が机の裏に当たって、危うく机が割れかけた。

「そんなにやことつ!?!」

「分かり易つ。いや……分かり易つ」

「違います! 訂正してください! 私はただ、男のすげべさに辟易として……!」

「うんうん、いいんだよミノトちゃん。私はミノトちゃんの味方だからね。……あの時からでしょ? ほら、背負われて帰ってきたあの……」

「違います!!!」

「あつはつはつ!」

暖簾に腕押しとはこのことだろう。

ミノトがいくら否定しても、先輩受付嬢は訳知り顔でミノトの肩をポンポンするだけで、それが絶妙にウザくてしようがない。

ミノトは激怒した。

必ずかの邪智暴虐の先輩に何か一矢報いてやりたいと思った。

ミノトには男女の愛が分からぬ。ミノトは、不器用な少女である。咄嗟の機転などとんとダメである。

けれども、他人の機微には人一倍に敏感であった。

なので、ミノトは最初からずっと気付いていたことを口にした。

「そういえば先輩の旦那さま、ゲームに参加していましたよ」

「ふーん殺そ」

先輩受付嬢が旦那をボコボコにしている横で、この日一番の歓声が上がった。

乳首当てゲームでツミキの番が来たのである。

「ふー！ ふー！ ふー！」

「鼻息荒いなこいつ」

「どんだけ期待してるんだ」

ツミキは覚悟した。

必ずや女性の乳首を探り当てるのだと決心した。

ツミキは女体が分からぬ。ツミキは、十五歳の少年である。この歳まで清い体で過ごしてきた。

けれども、すけべな事には人一倍に敏感であった。

相手はツミキよりも一回り歳上な上に人妻だったが、だからなんだというのだ。

人妻だろうと人妻じゃなからうとおっぱいが柔らかいことに変わりは無い。

何より本人が良いと言っているのだ。そこになんの問題があらうか。いやない。

絶対に今日おっぱいを触る。

ツミキの胸中には断固たる決意があった。

真っ直ぐに伸びた人差し指はまさしく一振りの剣の如く。

モンスターの弱点を的確に捉えるツミキの観察眼と精緻な体捌きが、今宵女性の乳首を服の上から探り当てるためだけに発揮された。

距離。

方角。

位置。

高さ。

角度。

面積。

オールグリーン。間違いない。全てを見通したツミキの口元が確信の半月を描く。

「ここだあ!!!」

美しさすら覚える流星の軌跡で、一寸の狂いなく乳首に向かって人差し指が邁進して、

「触るんですか?」

ピタリと、その直前で止まった。

ギギギ、とツミキがゆつくりと首を動かす。

そこには、ニコニコと微笑んだ……酒の匂いがするヒノエがいた。
「触るんですか?」

二度目の問い。発された言葉は同じものだ。

声音は柔らかく、顔も笑っている。聞くものが聞けば、いつものヒノエちゃんかく、なんて言いそうな雰囲気。
けれど、分かる人には分かる。

目がマジだった。

「ヒノエ……僕は今日、真の男になるんだ」

ツミキはアホだった。

「ばっかツミキ! 何言ってるんだお前!」

「おっぱいを触る」

「ちげえ! 違くないけどちげえ! 今言う事じゃねえんだよ!」

「おっぱい」

「ダメだこいつおっぱいのことしか頭にない!!」

男たちがわちゃわちゃやっている間に、ツミキの対面に座っていた女性と一言二言話したヒノエは、入れ替わるように席についた。

手にしていた酒の容器を机に置く。

ダン!!! と強い音がして、中の酒が少し溢れた。

居住まいを直して、少しだけ胸を張るヒノエ。

小首を傾げながら、笑顔で言った。

「さあ、どうぞ」

圧がなんかもうやばかった。

「……」

「やめろ、助けを求めようここにこっちを見るなツミキ」

流石のツミキも、あれ? なんかヒノエ怒ってる? と気付く。

「ヒノエ……? 怒ってる……?」

「どうぞ」

「怒ってるよね？」

「どうぞ」

「じゃあ遠慮なく……」

ヒノエの胸をガン見し始めるツミキを見て、こいつ勇者か？ と里のみんなは思った。

ヒノエの乳首の位置を予測していたツミキの脳裏に、一瞬だけ、ヒノエによく似た少女の裸体が浮かんでヒノエと重なる。

カツとツミキの顔が酒とは別の理由で赤くなって、思い出してはいけないことを思い出したツミキがブンブンと目を瞑って首を振った。

目を開けると、そこにはヒノエの顔が視界いっぱい広がっていた。

「ひう!？」

「ねえ、ツミキ」

そして、ヒノエはツミキにしか聞こえない声で、

「——実は私、ミノトより大きいのですよ」

衝撃の告白にツミキの思考がフリーズ、妄想がビツクバンを起こしている最中で、ヒノエが乳首当てゲームに参加している事に気付くミノト。

二人の顔はとても近く、当然体も寄り添う距離。

ツミキが少し腕を伸ばせば、いや、伸ばさずともヒノエの胸を触れる距離感。

「嫌」

それは、どちらに対しての”嫌”だったのか。

咄嗟に口をついて出た言葉の意味も分からないまま、ミノトは走った。

「ヒノエ姉さまに何をしようとしているんですかつ、すけべツミキのひゃあ!？」

そして、転がっていた酒瓶を踏んで躓く。

足が地面から離れる浮遊感。

このまま倒れれば顔から着地してしまう体制。

一度時間をおいて冷静になれば、自分がミノトにした事、それがミノトが怒って当然のことであつた事、そして自分が今やらなければいけない事が分かる。

「僕は……」

9話 側にいるよ（分岐：ヒノエを心配する）

ツミキがもう忘れてしまったことで、ヒノエがずっと覚えていることがある。

「あ……」

ツミキとヒノエの目の前を、親子が通り過ぎていった。母が子の手を握り、隣り合って歩いていった。

「……」

無意識のうちに、ヒノエは自分の手を握りしめていた。

片方の手で、片方の手を隠すように握りしめて、腰の後ろに隠した。噛み締めた唇が痛かった。

細いささくれがちくりと心を刺したようだった。

人間とは違う、4本しか指がない醜い自分の手。

きつと、この先ずつと、妹であるミノト以外とは手を握ることもないのだろう。

だって、こんなに醜い自分の手を握ろうと思う人が、いるわけがないのだから。

俯いていたヒノエは、涙を堪えるような笑みを作って、その事実を飲み込んだ。

その一部始終を、ヒノエと一緒にいたツミキは見ていた。

「……あのさ」

「え……きやつ!?!」

ヒノエが腰の後ろに隠していた手に、パツとツミキの手が伸びる。分厚い革手袋を神業のような速さで脱がし、踵になったヒノエの白い4本の指を、自分の5本の指で挟み込むように握る。

俗に言う恋人繋ぎと呼ばれる握り方。

「ツミキ……!? やめて、いやだ、見ないでください……!」

嫌われたくないという心の動きで、ヒノエはツミキの手を振り解こうとした。

けれど、この頃にはもうその天才性の片鱗を見せていたツミキは、遮二無二暴れるヒノエの力を完璧に押さえ込み、手を振り解かせな

い。

「いや、いや！ やめてください！ はなして！ ツミキに嫌われたく、ない……!!」

「……あーもう！ 嫌いになるわけないだろ！ 見ろ!!」

叫んで、ツミキは繋がった2人の手を持ち上げる。

ヒノエの目の前に、大嫌いな自分の手がある。

喉が干上がる感覚があった。

嫌いなものを視界に入れたくなくて、ヒノエはぎゅつと目を瞑った。

「なんでヒノエちゃんがそんなに自分の手を嫌いなのか分かんないけどさ」

真つ暗な世界に、ツミキの声が聞こえる。

「僕はヒノエちゃんの手が好きだ。白くてキレーだと思うし、柔らかくて女の子の手って感じがする。……だから、そんなに自分の事を嫌わないでほしい。ヒノエちゃんの手はおかしくなんか無い。触れると温かくて、僕が具合が悪い時に背中をさすってくれたときはとても優しい、そんな手だ」

「……でも、私の手はみんなと違うから!」

「それなんだけどさ、僕、ずっと言いたかったんだよ。ほら、目を開けて、ヒノエちゃん」

「……」

目を開けるのは怖かった。

けれど、ツミキの声がとても優しくかったから。

だから、恐る恐る、目を開く。

照れ臭そうな顔をしたツミキが、ヒノエを見つめていた。

「ヒノエちゃんの手の指は4本だから、僕とこうやって手を握ると、手の中にすっぽり収まるんだ。僕の手の中に、ヒノエちゃんの手の全部がある。だから、なんて言うのかな……ヒノエちゃんの手の指が1本少ないのは、こうやって人間と手を繋ぐためだと思うんだ」

「あ」

「実際何でかは知らないけど……でも、僕はそう思うよ。指が4本だ

から手を繋げないんじゃない。人と手を繋いで生きていくから、4本の指があるんだ」

それは、ヒノエとは全く別の視点から見た4本指の見方。

違うから嫌われるのではなく。

違うから、こうして手を繋ぎ合える。

「あ、ああああ」

違うことが悪いことだと思っていた。

みんなと違うから、自分は醜いのだと思っていた。

そんな子ども特有の”人と違う恐怖”が、温かな波にさらわれて、流されていく。

この日、ヒノエは真の意味で竜人族である自分を受け入れた。

繋いだ手はとても温かくて、心に安らぎがあった。

以来、ヒノエは何かにつけてツミキと手を繋ぎたがるようになったりするが、それはまた別のお話。

「ふふ、ツミキ。手を握ってくださいいな」

「歩くならまだしも一緒に団子を捏ねようつてときに手を繋ぐのはおかしくない……っ」

「それでも、繋ぎたいんです。ダメですか？」

「……まあ、いいけど……」

「やった。ふふ、ありがとうございます。……はあ……あたたかいです。……ふふっ」

「……んん。指の間をスリスリするのは擦ったいってば。……んあっ!? 兄ちゃん!? いつからそこに!? 親指立てるな! 見てないであっち行ってってばあ!!」

そんな、まだツミキの家族が生きていた頃の、些細なお話。

【ミノトも気になるけど、ヒノエを放つてはおけない】

月光に濡らされた夜。

遠くから風に乗って運ばれた虫の音が、沁みるように消えていく。宴会の喧騒は消え、先ほどまで場に漂っていた高揚感も今はもう。沢山の人がいた集会所も、今は2人だけ。そこに哀愁は感じない。

なぜなら、

「ひ、ヒノエ……?」

「……」

「あの……」

「……今は話しかけないでください」

「あつはい」

それよりも、目の前の彼女がめちやくちや不機嫌になっているのが怖いからだ。

哀愁? そんなノスタルジックに浸れる余裕はない。

ツミキは混乱していた。

「(ヒノエが怒るようなことなんかしたっけ……!?)」

思い返してみても、とんと記憶がない。

「(でも、理由もなくヒノエは怒らない。思い出せ……! 思い出すんだ僕……!)」

必死に記憶を呼び起こすツミキ。

その脳裏に、直近でもっとも印象に残っている記憶が呼び起こされた。

『——実は私、ミノトより大きいのですよ』

「真相やいかに」

ぐくり。

生睡を飲み込み込み思考を中断したツミキは、ヒノエのおっぱいをガン

見した。

「……」

ヒノエの不機嫌ゲージが上がった。

「(しまったあああああ!!)」

ほんとこのスケベはよお……。

スケベ心に抗えない自分の意思の弱さに頭を抱えてごろごろするツミキ。

その内心は、これで結構ごちやごちやになっていた。

どうしてヒノエが怒っているのか分からない。

どうして怒っているのか丸わかりなミノトに誠意を持って謝らないといけない。

ヒノエのおっぱいが気になる。

走って行ったミノトは今どこにいるのだろうか。

あの感触は至福だった。

「ふむ……」

ふと、空気をもむ。

何も感触がないはずなのに、手に焼き付いている感触が、とても素晴らしい柔らかさを思い出させてくれた。

「……」

ヒノエがツミキに背中を向けた。

「(あああああああああああああああああああああああ
!!!!)」

お前本当にヒノエを笑顔にする気あんの？

ともかく、思春期の男の子にとって、おっぱいの衝撃は計り知れないものがあつたようだった。

少なくとも、思考がまとまらなくなってしまうほどには。

そして、纏まらない思考にあたふたしているのはツミキだけではない。
い。

「(何を……しているのでしょうか、私は……)」

ヒノエもまた、ツミキと向き合う言葉を見つけれないでいた。

……いや、少し違う。

向き合う言葉を見つけれられない。それは正しい。
でも、それだけではなく。

今のヒノエの心のうちは……。

「(私は、最低の女だ)」

おっぱいに頭を支配されているスケベとは違い、少しばかり複雑な
ことになっていた。

人妻の胸を触ろうとしていたツミキを見たヒノエの胸中に湧きあ
がった感情を、一言で説明するのは難しい。

どうして、という疑問があった。自分の胸は、ガン見はしてきても
触ろうとはしなかったのに。

恥ずかしさはあつたけれど、自分の胸がツミキの視線を奪うことに
ヒノエは喜びを感じていた。

他の里の女たちがいるときでも、ツミキはヒノエの胸を見る。その
ことに、優越感を覚えていた。

その優越感の土台が足元から崩れていくようだった。

許せない、という怒りがあつた。ツミキと付き合い合っているわけでも
ないのだから、筋違いの怒りだ。自分にツミキを怒る理由なんてない
とわかっていても、ツミキが他の女の胸を触ること、そして人妻がツ
ミキに胸を触らせようとしていることを許せなかった。

感情を、抑えられなかった。

そして、安心した。

——相手がミノトじゃなかったから。

大切な妹がスケベの毒牙に掛からなくて良かった。

……そういう気持ちの発露ではないことを、ヒノエが一番良く分
かっている。

ヒノエとツミキの付き合いはそれなりに長い。

ツミキがヒノエのことをある程度理解しているように、ヒノエだっ
てツミキのことを理解している。

そうでなくても、今までずっと目で追っていたから。

だから、ツミキが人妻のこと”は”好きになつていないと分かつて

いた。

ただ単に触れるおっぱいならなんでも良かったんだろうということも理解している。

人妻のおっぱいを揉む行為に理由はなく、意味もなく、ただツミキは初めてのおっぱいの感触に感動して、一瞬でその柔らかさを記憶して、ずっと手の中でその感触を反芻するのだろう。

ヒノエではない女のおっぱいを。

——いやだ。

ヒノエの心は叫んでいた。

痛いぐらいに吠えていた。

ツミキが触るおっぱいは自分のものがいい。

ツミキがずっと思い出すおっぱいは自分のおっぱいであって欲しい。

何より。

これから先、好きな男が他の女を思い出して四六時中手をワキワキさせるのは想像に難くなく。

それを横で見続けることになるであろう未来を想像して、ヒノエは思った。

そんなの、耐えられない。

ツミキを殴らない自信がヒノエにはなかった。

気が付けば、ヒノエは人妻の代わりにツミキの前に座っていて。

ツミキの気を引きたくて、お酒を言い訳にして、恥ずかしさをぐつと堪えて大胆なことも言ってみたりして。

ツミキが自分のおっぱいに釘付けになったことが、とても恥ずかしかったけれど、とても嬉しくて。

ツミキの指がヒノエの胸に伸びたとき、期待と興奮と羞恥でぎゅつと目を瞑ってしまった。

……そして。

『ヒノエ姉さまに何をしようとしているんですかっ、すけべツミキのひゃあ!?!』

自身の胸に、愛しい人の、大好きな手の感触はなく。

その手は、大切な妹の胸を揉んでいた。
頭が真っ白になった。

真っ白になった頭に、ポツリとシミが生まれた。

黒いそのシミは、じわり、じわりと広がっていく。

もう、止められない。

ヒノエはこの日、自身の胸の内に浮かび上がったその感情を一生忘れられないだろう。

——ミノトは、ズルい。

今まで考えないようにしていた。

けど、一度考えてしまえば、もう。

ミノトはズルい。

ミノトはツミキに好かれようなんて考えてなくて、いつも自分の思うままに行動して。

不器用な子だから失敗も多いけど、失敗して周りに迷惑をかけても何故かそれが愛嬌になって、もっと周りから好かれて。

私の方がツミキに好きになってほしくて頑張ってるのに、いつもいつも最後はミノトが持つていく。

計算なんてしていない。そんなことは分かっている。ミノトにはそんな器用なことできない。

だから、ズルい。じゃあそれを咎められない。

どうして？

容姿は瓜二つで、性格も趣向もそんなに変わらない。

ツミキに好かれようと頑張ってるのは私で、ミノトは好かれるのを待つだけなのに。

なのに、どうしていつもミノトばかり——。

……考え始めれば、もう。

黒いシミは、消えない。

「(……嫉妬。いえ、これはもっと醜い……。実の妹に、そんな事を思ってしまう自分が……)」

ツミキに背を向けるミノトの胸中に渦巻く感情は複雑だ。

色々なものが混じり合い、もはやそれが最初にどんな形をしていて、どんな色をしていたのかも分からない。

けれど、敢えてそれに名前をつけるのであれば、自己嫌悪という言葉葉が相応しい。

今だって、こうして不機嫌な態度を取っていればツミキが心配すると分かっている、そうしている。

それが、自分の中で感情をうまく処理できないが故のものであつても。

そうすればツミキはどうするか、を分かっていることは変わらない。

一度、自分のことを嫌ってしまつたと、過去の自分の行いに対しても悪く考えるようになる。

それが、誇れるような過去でなければ尚更だ。

ヒノエには、ツミキを罪に縛り付ける楔になつたという過去がある。

仕方がなかつた。

あの時はああするしか方法がなかつたし、そうでなければツミキは自殺していただろう。

もつと他に方法があつたのでは……と考える度に、他に方法はなかつたと結論を出すことをヒノエは何度も繰り返してきた。

普段のヒノエならそう出来たのに、今のヒノエは“ミノトだったら、もつと良い方法でツミキを救えたのではないか”と考えてしまふ。

実際に出来た、出来ないかはともかく。

ツミキに生きていて欲しくて、ツミキを苦しめる未来を選んだ自分と比較することをやめられない。

最悪なのが。

「ツミキに罪の杭を打ち込んで、縛りつけた。ツミキは、唯一自分を断罪する私から離れられない。だから死ねない。だから生きる。……でも。そうして、ツミキの”特別”になつた事に、喜びがなかつ

たと。……私は、言い切れない」
ツミキのためにという殻を被って、自分のためにツミキを苦しめて
いる。

ミノトなら、こんな最低なことなしかつたはず。
そもそも、自分がツミキを救いたいと思っただのが間違いだった。
ツミキの家族の死を、恋心を理由にして陵辱した。
そんな事はないのに。

あの日、ヒノエは死んでしまいそうだったツミキに、ただ生きてい
て欲しかっただけなのに。

貴方は何も悪くないと泣き叫びたい気持ちを必死に押し殺して、ツ
ミキが生きようと思うためにどうすればいいかを選択したのに。

「私は最低だ。こんな私を、誰かが……ツミキが好きになる事なんて
……。もしかしたら、私が居なければ……。ツミキは、昔のように
……」

恋心が、過去を犯す。

あまりにも救いが無い悪循環が生まれつつあった。

自己嫌悪の濁流に攫われそうになっているヒノエの後ろで、ツミキ
は決意を固めていた。

「よし、謝ろう。取り敢えず謝ろう。何に謝るかちよつと分かんない
けど……土下座は全てを解決してくれると里長も言っていた！」

お前さあ……。

しかし、しょうがない部分もある。

なんせ、ツミキ視点で言えば、

「(ヒノエが触って良いって言ったんだから、おっぱいを触ろうとした
ことにヒノエは怒らない。転んで頭を打ちそうだったミノトを受け
止めたら、不可抗力でおっぱい揉んじやって、そしたらミノトが怒っ
てヒノエが目も合わせてくれなくなった)」

普通に考えれば、妹の胸を揉まれたことにヒノエは怒っている。

「(でも、それは無い。その事で怒っているのであれば、こうして口も

利かない怒り方はしない。ヒノエにとってミノトは大切な妹だから。だから、もつと素直に怒る。僕が何をして、それがどれだけミノトを傷つけたのか、ちゃんと言う)」

ツミキとヒノエの付き合いもそれなりに長い。

ヒノエがツミキのことを理解しているように、ツミキもヒノエのことを理解している。

まあ、だからこそ、ツミキは現状のヒノエの心境が分からないのだけれども。

「だから土下座しかない……！ 怒ってる理由が分からないことを謝って、ちゃんと理由を訊いて、それからだ……！」

きゅつと唇を結ぶツミキ。

土下座のフォームをシュミレーションし始めた。

ティガレックスのように前方に飛び込みながら四肢を地面に付けて土下座するのが良いだろうか。

あるいは、ビシュテングのようにその場でくるくると回りながらジャンプして土下座着地か。

「理由が分からないんだ。せめて、誠意のある土下座をしなければ！」

誠意はフォームじゃないんだよなあ。

「(ヒノエのためなら、土下座で石だつて割れる！)」

威力でもないんだよなあ。

とはいえ、今の状況のままにしておけないのも事実。

なんてつたつて埒があかない。

里の大人に「今はやめておけ」と言われたから直ぐにはミノトを追いかけなかったが、本音を言えば今すぐ追いかけて謝りたかった。

わざとじゃなかったにせよ、ミノトの胸を揉んでしまった事実は変わらない。

……まあ、そこには謝ればミノトは許してくれるという前提があるのだが、それを甘えと取るか信頼と取るかはさせておき。

ツミキが今ここにいるのは、ひとえに。

「怒ってる……んだとは思っただけ。なんか、ヒノエ……いつもと

違つて……目を離したら、消えてしまひそうというか……」
臃げな違和感。

ヒノエの背中が、ツミキには酷く不安定なように見えた。
まるで蜃気楼のように、そこにあつてないような。

今ここにヒノエはいるのに、その心がそこにないような。

ツミキに放っておけないと思わせるような何かが、今のヒノエにあつた。

「ヒノエ……その、いいかな」

「……」

ヒノエは答えない。

振り向く事もない。

その背中が、小さく震えた。

合わせる顔がない、というのがヒノエの心境だが、もちろんツミキには分からない。

「(か、顔も見たくないほど怒つてるのか……!?)」

勇気が萎みかけたが、ここで怯まないのが男の子。

意を決して、ツミキは踏み込んだ。

「ヒノエ。聞いてくれ……とは言わない。僕はきつと、すごく酷いことをしたんだと思う。そして……僕がアホだから、それが分からない。最低なのは分かつてる。でも、このままにしたくない。ヒノエと話せないのは嫌だ。ヒノエの笑顔が見れないなんて嫌だ。だから、教えてほしい。何に怒つてるのか……そして、償わせてほしい。僕に、その機会をくれないか」

「……」

「分かつてる。言葉だけじゃ信じられないよね。だから、信じてもらえるように……見せるよ、僕の誠意を」

「……て」

「どうか見てほしい。僕のヒノエへの気持ちを。それで許されるなんて思つてないけど、僕がヒノエを大切に思う気持ちに変わりはない！」

「……めて」

「行くよ……！　これが僕の誠意だ!!!」

「やめてください!!!」

ツミキがくるくる回りながら前方に飛び土下座着地を決めて額で人間の頭ぐらいの石を割った音と、ヒノエの血を吐くような叫びが重なった。

え？　と顔を上げる。

そこには、今にも泣き出しそうな顔をした女の子がいた。

ツミキはアホであるが、他人を慮れない人間ではない。

ツミキは、自分が何か決定的に間違えていたことを、自覚した。

「やめてください……」

同じことを、ヒノエは繰り返した。

唇を噛み、苦悩するように細められた瞳からは、今にも涙がこぼれ落ちそう。

泣いている子には優しくしてあげたいという当たり前の欲求が、ツミキの中で沸き起こる。

それが、ヒノエという大切な女の子であればなおさらだ。

「ヒノエ……」

立ち上がる。

土下座をやめろ、と言っている訳ではないのは、流星のツミキにもわかる。

間接的にはそうなのかも知れないが、根本的にはもつと別のところ。

でも、その理由を探す前に、まず、この泣いている女の子を笑顔にしたかった。優しくしてあげたかった。

「……隣、座るよ」

ツミキが隣に座っても、ヒノエは俯いたまま。

いつもはほかほかと心を温かくしてくれるヒノエの側が、今はこんなにも痛い。

ヒノエの隣に腰掛けたツミキは、なにも言わない。

そのまま、無言の時間が過ぎた。

「……なにも、言わないのですね」

ボソリと、ヒノエが呟いた。

「……うん。なんとなく、話したくなさそうだったからさ」

「……はい。だから、私のことは放っておいてください。……ミノトだって、きつとツミキを待っていますよ」

「ミノトのどこにも行かなきゃだけど……ほら、今行くともつと怒らせちゃいそうだから」

「そうですね。……でも……今は、一人にしてください……」
「うん」

しかし、ツミキに立ち去る気配はない。

深く椅子に腰掛け、自分の手を見つめていた。

また、無言の時間が流れた。

「前にもさ」

ぽつりと、ツミキが呟いた。

「こんなことがあったよね」

「……」

「あ、違うよ？ ミノトの胸に触ったことがあるとかそんなんじゃないよ。僕の方に、ヒノエがずっといてくれたこと、あったじゃん」

ヒノエの意識が、過去の記憶を無意識のうちに引き出す。

それは、忘れたくても忘れられない、忘れてはいけない、忘れたくないこと。

「あの時のこと、今もずっと覚えてる。僕、あの時に……ヒノエに救われたんだよ」

それは、数年前の記憶。

ツミキの家族が亡くなって、まだツミキが立ち上がることができないでいた時。

当時のツミキは、家族のお墓の前から頑なに動こうとしなかった。

雨と雪で飢えと乾きを凌ぎ、眠ることさえ忘れて、家族の墓前に謝り続けていた。

当然、ツミキは衰弱して、まともに声すら出せなくなる。それでも、ツミキは墓前から動こうとしなかった。

里のものたちも黙って見ていた訳ではない。無理やりにもツミ

キを里に連れ帰ろうとした。でも、できなかった。

単純に、この頃からすでに無理やりツミキを動かす、ということすらできないほど、ツミキが強かったというのもあるが。

それよりも……今ここでツミキから贖罪という生きる理由を取り上げれば自殺すると誰もが確信するほど、当時のツミキの状態は異様だった。

墓前に座り、震わせることもできなくなった喉の代わりに、心の中で謝り続ける。

そんなツミキの側に、腰を下ろす女の子がいた。

『ちよつと隣、失礼しますね』

それが、ヒノエだった。

ヒノエも、最初は里の人たちと同じようにツミキを連れ戻そうとしていた。

けれど、いつしかただツミキの側に来て、朝から晩までただ隣に座って、また次の日も同じようにただ座っているようになった。

他者に気をつかう余裕なんてなかったツミキは、自分の邪魔をしな

いの中から、ヒノエを追い返すこともしなかった。
そんなことが数日続いた後、ヒノエは大きなテントを背負ってやって来て、近くで暮らし始めた。

けれど、やつぱり、ヒノエはなにも言わずに……ただ、ツミキの隣に座るだけだった。

雨の日も。雪の日も。風の強い日も、日差しの強い日も、寒い日も。なにも言わず、ただツミキの側に寄り添い続けた。

そんな毎日だったのだから、ヒノエが体調を崩すのも無理はなかった。

額に触れた方が恐ろしくなるような高熱。

呼吸は浅く、座ることすらできないほど衰弱した体。

このままここにいればヒノエは死ぬ。

隣で、限界を迎えて倒れたヒノエを横目で見たツミキの心に生まれた感情があった。

『……ヒノエ』

『……ふふつ。やつと……こつちを、向いてくれましたね。……ずっと、考えてたんです。ツミキ、私は……貴方を、許しません。……許しません、死んだら……許さない。だから……生きて……』

結論から言えば、ツミキはヒノエを背負って里まで降りて、また家族の墓前に戻った。

竜人族であるヒノエが衰弱するような環境、ツミキとて衰弱は激しい。

人一人背負って里まで戻れたのは、奇跡だった。

そうして、墓前に座ったツミキは、気づく。

穴だらけで、砕かれていた心の一部に、熱を帯びている部分があった。

その熱が、教えてくれた。

隣にヒノエがいないことが、寂しかった。

きつと。

この熱がなければ、とつくの昔にツミキは死を選んでいた。

ヒノエが側にいてくれたから、無意識のうちにツミキは自決を選ばなかった。

誰かが一緒にいてくれる。それだけで救われることも、この世界にはある。

この後すぐに、ミノトとの殴り合いの果てにツミキは立ち上がった。

その立ち上がり方はひどく歪で、ひび割れたガラスのようだったけれど。

ヒノエがしてくれたことを、ツミキは忘れない。

「だから、かな。僕はアホだし、あんまり察しがいい方でもないし、モンスターを討伐すること以外でできることなんてあんまりないけど……悲しんでる人がいたら、側にいてあげたいって思うんだ。それで救われることもあるんだって、ヒノエが教えてくれたから」

気恥ずかしいのか、はにかむようにしゃべるツミキ。

ツミキにとって特大の地雷である家族のことを自分から話したというのに、取り乱す様子もない。

けれど、だからと言って、過去の記憶を掘り起こすことに苦痛がなかった訳ではない。

爪を一枚一枚剥がして、その中を弄るような痛苦があったはずなのだ。

けれど、それでも話すことを選んだ。

それは、ツミキがどれほどヒノエという女の子を大切にしているかという表れだった。

「……そんなこともありましたね」

ヒノエもまた、過去を振り返る。

ああ。

確かに、そんなことがあった。

「……ま、だからさ。ヒノエが悲しく無くなるまで……ずっと、側にいるよ」

「……ずっと？」

「うん。ヒノエがあの時、僕の側にいてくれたから……こうやって、今、一緒にいられるんだもん」

それは、過去の肯定だった。

ヒノエが後悔している過去の選択。

ミノトならもつと上手くできたんじゃないかという、嫉妬。

それが、ずっとヒノエの中にあった。

でも。

あの時、ツミキにその「優しさ」を注いだのはヒノエだけで。

ミノトでなく。ヒノエの優しさがあったから、今、ツミキは生きている。

「……ツミキは」

過去の後悔が消える訳じゃない。

事実、もつと冴えたやり方はきつとあった。

けれど。

ヒノエの優しさでツミキが救われた事実は、誰にも覆せない。

「私がほしいときに……ほしい言葉を……いつも、言ってくれるんですね……」

涙が一筋、ヒノエの頬を滑り落ちる。

それは、一筋では止まらなくて。

次から次へと、溢れてきて。

「えっ。ちよ、ヒ、ヒノエ!? ご、ごめんっ、何かまずいこと言っ
てしまったかな!?!」

ヒノエが涙を流すから、ツミキはオロオロと慌ててしまっている。

そのことを少しだけ申し訳なく思いながらも、涙を止めることは
できそうもない。

だって。

だって……今、こんなにも心が温かいのだから。

それからしばらくして、ヒノエの涙が落ち着いてきた頃。

「えっと、えっと……そいつ」

「ふふっ、手を、繋いでくれるのですか?」

「うん、こうしていると、落ち着くかなって……」

「……はい。落ち着きます。とても……とても。しばらく、このまま
ぎゅっ握っててくれても、いいですか?」

「もちろん。ヒノエが悲しく無くなるまで、ずっと側にいるって言っ
たからね」

「……なら、一生、側にいてくれますか?」

繋いだ手に、祈るように少しだけ力が込められた。

幼い頃からずっと繋いできた小さかったはずの手は、今はもう大き
くて力強い手になっていた。

これから先、この手はもつと大きくなって、やがてはしわくちやに
なっていくのだろう。

その過程を、ずっとこの手で感じていたいとヒノエは思う。

勇気を出した問いかけだった。

ばくばくと心臓がうるさい。

きゆうつと縮こまった肺が痛かった。

ヒノエの欲しい時に欲しい言葉をくれる少年は答えた。
「え、一生は無理だよ。僕、どう考えてもヒノエより先に死ぬし」
お前マジで一回古龍にしばかれてこい。

10話 ぬるぬるでつるつるなアイツ

月光が大地を青白く濡らしていた。

川のせせらぎ。風に揺れる木々の音が、夜に溶け込む。

溪流と呼ばれるフィールドには、常である怪しげな静けさが漂っていた。

しかし、今宵は違う。

ガシヤ、ガシヤと鎧が擦れる音が二つ。

レウスSシリーズと呼ばれる防具を纏う男と、レイアSシリーズを纏う女が、辺りを警戒しながら歩いていった。

「クソ、見つからないな……」

「相手は海竜種よ、油断しないで。突然襲われることだってあるわ」

「わかってる。警戒は怠ってない」

男たちは上位ハンターだ。

ギルドから大型の海竜種の討伐を依頼され、溪流に赴いていた。

男が引く荷車の上には、大タル爆弾やシビレ罠などのトラップが詰め込まれている。

大型モンスターを討伐するための、当然の準備。

普通、人は己の身一つと武器のみでモンスターを討伐できない。

生物としての強度が違いすぎるからだ。

だから、男たちはこの日に備えて、1週間以上の準備を整えてきた。

生きるか死ぬか。モンスターと人との生存競争に勝つために。

「なあ」

「何よ、集中しなさい」

「……悪い。そうだな。……でもよ。このクエストが終わったら、話したいことがあるんだ。……それだけだ」

「……え、それって……」

女の言葉は最後まで続かない。

なぜなら、川の奥からいきなり大型のモンスターが飛び出してきたからだ。

——それは、狐と蛇が合わさったような姿をしていた。

咲き乱れる花を彷彿とさせるような白と董の美しい鱗が胴体を覆っている。4本の脚で大地を踏み締め、しかし、その体は四足歩行を行う生き物にしては長い。

大蛇に地を駆けるための脚がついたと、そう思わせる。

一振りで人間の骨など容易く砕いてしまいそうな尾には、濃紫色の体毛が生え揃い、鮮やかだ。全体的に白いカラーリングが夜の闇にぼんやりと浮かび上がるようで、どこか幽霊めいた不気味を与えていた。

何よりも特筆すべきはその背中に聳え生えそろうヒレだ。

花卉のように大きく広がったヒレは、赤みを——警戒色を帯びていた。

普段はおとなしいが、繁殖期に入ると凶暴化し、漁業を生業とする人々や近隣の村に甚大な被害を与えるモンスター。

その名は、

「あれが、泡狐竜——タマミツネか！間違いない、ギルドで確認した姿だ！」

「気を抜かないでよ！あの雷狼竜と対をなす存在って言われてるんだから！油断してるとこっちがやられるわ！」

男と女はすぐさま臨戦体制に移り、武器を抜刀する。

流星は上位ハンター、その動きに迷いはなく、タマミツネを睨みつけるその姿勢に隙はない。

狩猟が始まる前のビリビリとした緊張感に男が唇を舐める。

次の瞬間、男の目の前からタマミツネが消えた。

「なっ——!?!」

違う。

消えたのではない。

タマミツネの移動があまりにも早すぎたのだ。

その正体は、ただの跳躍だ。

だが、男の視界、視点から己の体を逸らし、側面に回り込むように跳躍したタマミツネの姿を男は一瞬見失ってしまった。

それは狩猟では致命的な隙となる。

「クソ、舐めるなよっ！」

しかし、男とて歴戦の上位ハンター。

咄嗟の勘に任せた飛び込みで、タマミツネの尻尾による一撃をなんとか回避。

その勢いのまま転がり、タマミツネの攻撃範囲から逃れた男が見たのは、その場で激しく回転するタマミツネの姿だった。

「あれは……！」

「気をつけて、泡を飛ばしてる！ あれに触ったらぬるぬるになってまともに動けなくなる！」

タマミツネは、全身から分泌する特殊な体液と体毛を擦りわせることで、泡を作ることができる。

その泡は子供の全身がすっぽりと入るほどの球体となって、30に迫ろうかという数の泡がフィールドにばら撒かれた。

この泡は摩擦をゼロに近づける効果があり、この泡に触れたハンターは立つことすらままならなくなる凶悪な代物だ。

そして、この泡にはもう一つ特徴がある。

「おい、あの赤色と緑色の泡……見えるか？」

「ええ、見えてるわ。タマミツネが摂取した栄養分が滲み出た特殊な泡があれね」

タマミツネが分泌する体液には、時たまこのようなものが混ざることがある。

それは、触れた生物の傷を癒したり、コンディションに影響を与えることが確認されており、狩猟時にはハンターはこの「色付き」の泡を利用することも少なくない。

「打ち合わせ通り、色付きの泡の効果を得つつ、他の泡は回避して挑むぞ」

「ええ、わかってるわ」

「後ろ、頼んだぜ。前は俺が抑える」

「いつもどおり、信頼してる」

「——いくぞ!!」

武器を構えた男が、タマミツネに肉薄する。

その最中、視界に濃いピンク色をした泡を視界に収めた。

「色付き……！ もらった！」

「え、ちよつと待って！ そんな色の泡、文献には——！！」
「え？」

女の静止は間に合わず、パシヤリと、男が突っ込んだ泡が割れる。その泡に込められていた効果が、現れる。

「——ぐ、グオおおおおおおお！！！！」

「ちよ、ちよつとおおお！！！」

男と女の悲鳴が、夜の溪流に響き渡った。

山奥にあるカムラの里は、今、空前絶後のハンター不足である。

とはいえ、全くハンターがいないという訳ではない。

カムラの里の住人はそもそもが、いざというときはハンターとして動けるものがほとんどで、たたら製鉄の盛んなカムラの里の技術をあてにして、他所からハンターが訪れることもある。

では、どうしてハンター不足なのかと言えば、それはひとえに人口だ。

50年前の百竜夜行で負った人的・物的被害は計り知れず、次世代を担う若者が少ないというのが、現状のカムラの里が抱える問題である。

特に、ツミキの世代はそれが顕著だった。

それに加えて、カムラの里の周囲は強力なモンスターが出没しやすいという特徴がある。

これは由々しき問題だ。

交易路の近くにモンスターが居座っただけで、人間の営みは簡単に壊されてしまう。

モンスターを討伐することで得られる利益もまた、バカにならない

恵みを里にもたらす。強靱なモンスターの素材は、加工品としての価値が高いのだ。

つまり、里が健やかに発展してしていく、または里の安全、利便性を維持するためには、腕利きの在住ハンターの存在が必要不可欠。

カムラの里だけでなく、この世界のたいていの集落において、ハンターの存在は大きかった。

ゆえに、若く、この先も長い間カムラの里在住ハンターとして活躍できる、とびつきり腕のいいハンターツミキには、里から出て行かれると困るのだ。

そして、件のツミキはといえば。

「ハンターさん、急な依頼にも関わらずモンスターを狩猟してくれたこと、とても感謝しております」

「いえいえ。モンスターを討伐するのがハンターの役目ですから。また、モンスターが居着くようなことがあればいつでも依頼をください」

水没林でトビカガチの狩猟依頼をこなした直後、近隣の村の要請でジンオウガをついでに討伐し、クエスト完了報告も兼ねてその村に立ち寄っている最中だった。

カムラの里と比べると小さい村だ。村というよりは集落に近いか。このような小さな村では、専属のハンターがいないケースもままある。

そういう村は、近くのハンターがいる村まで依頼を出してハンターを頼るのが常だが……ハンターの到着が遅れ、甚大な被害が出るケースも珍しくはない。

しかし。

人を襲うモンスターはどんなことがあっても討伐するツミキがハンターとなつてから、近隣の村の被害は限りなくゼロになっていた。ハンターとして突出しているツミキは、たとえば大型種の討伐であっても入念な準備を必要としない。それはフットワークの異常なまでの軽さへと繋がり、そのまま圧倒的なクエスト回転率を実現していた。

野菜を買いに行ったついでに魚も買うか、ぐらいのノリで大型モンスターを狩るツミキだからこそ、守れているものがある。

「そうじゃ、依頼金はカムラの里で払われるが……ハンターさんには、何かお礼をしないといけませんね。見ての通り貧しい村ですが、精一杯のおもてなしをさせていただきます。何かご希望はありますか?」「いえ、そんな。里に帰れば報酬を頂きますし……それ以上は頂けません」

「まだお若いのになんと謙虚な……。ハンターさん、これは私どもの気持ちです。どうか、お礼をさせてはくれないでしょうか」

「そうですか……では、お言葉に甘えて若くて健康で美人な巨乳のお嫁さんをください」

「強欲の化身ですか?」

村長は手のひらを返した。

「あはは、ですよ。なら、あそこで完熟シナトマトを収穫している綺麗な女性とお茶をさせてください」

「何がですよ、だったのか微塵もわかりませんが……あれは私の娘で、しかも既婚者です。流石に、その頼みは聞き届けられません」

「お義父さん……僕、人妻も多分いけます」

「殴りますよ。そしてハンターさんの性癖は訊いていません」

「贅沢はいけません。僕は優しく若くて美人で綺麗で歳も近くて人間の巨乳なお嫁さんが欲しいだけなんです……!」

「一生モンスターに襲われないお守り並に贅沢な願いですね……」

そんなものがあれば冗談抜きで国ができるレベルの金が入る。

「その、つかぬことを伺いますが……ハンターさんは……女日照りで?」

「そうなんですよ!!!!!!」

ツミキは膝から崩れ落ちた。

悔しさと苦しさが滲む目からは涙さえ浮かんでいる。

「僕、早く結婚したいのに……! クエストで立ち寄るところで、綺麗で若くて優しそうな女性に声をかけてるのに、お付き合いはおろか誰も僕とお茶すらしてくれなくて!! うう……どうして……僕はただ

綺麗で若くて優しくとおっぱいの大きな人間の女性と結婚したいだけなのに……！」

「そう……ですか……。時に、ハンターさん、女性はどのようにお誘いになられているのですか？」

「僕と結婚してほしいと」

そりや無理だろ、と村長は思ったが、優しいので黙っておいた。

いきなり結婚してください！ と声をかけてくる男がいたらもうそれはホラーである。

まあ……実際は、ツミキが他の村々へ行くようなクエストを受注するときは大抵ヒノエかミノトが同行しているので、明らかに只ならぬ関係の彼女たちを見た相手の女性がツミキに対して「こいつ最低か？」という印象を与えているのが主な原因なのだが。

ちなみに、カムラの里周辺ではとんでもない腕を持つハンターが婚活しているという噂が流れていたりする。

腕のいいハンターを村で抱えることは冗談抜きで村の存続に直結するので、ツミキ獲得に向けて密かに動き始めていた。

こんな紙が出回るレベルである。

／／PC版

《box:bo#000000, pl》1 婚活連敗

カムラの里のツミキ ←不調 ◎◎○

1番 人気

逃げ 《box》

／／SP版

《box:w100%, bo#000000, po. 8》1

婚活連敗

カムラの里のツミキ

←不調 ◎◎○

1番 人気

逃げ 《box》

スピード SS +

スタミナ SS +

パワー SS +
根性 SS +
賢さ D

スキル

バストのプロフェッサー

巨乳のマエストロ

巨乳◎

美人◎

尻◎

姉△

妹◎

家庭的○

追い込み◎

天然

ともかく、地味にフゲンやゴコクが恐れていた事態になりつつあった。

「まあ……ハンターさん。良縁は期せずして訪れるものです。焦っても仕方がありません」

「村長……！ でも、僕は若いうちに結婚したいんです！」

「結婚願望が強すぎる……」

ツミキを取り巻く状況を理解していないわけではない村長は、遅かれ早かれ結婚はできるだろうと思っただが、自分の娘をこいつの嫁に出すのかあ……と思うとなし寄りのなしだったので黙っておいた。

「まあ……流石にお嫁さんは差し上げられませんが、恋人なら差し上げられますよ」

「どういう意味だ？ と首を捻るツミキに、中へどうぞ、と村長の自宅へ招く。

様々な書物が収まった大きな本棚から数冊の本を取り出した村長はツミキへそれを手渡した。

それを受け取ったツミキの目がカッと見開いた。

「こ、これは——ツ!!」

「ええ。長年私の右手の恋人だったバイブル……女ハンター生態調査シリーズです」

説明しよう!! 女ハンター生態調査シリーズとは!!

いろんな美人女性ハンターが、大陸のあちこちで時にはモンスターに、時には同業のハンターに、ありとあらゆるえっちなことをされるエロ本である。

そのシチュエーションのニッチさとあらゆる性癖をカバーする癖の深さ、そして繊細かつ淫靡なタッチで描かれる女性の乱れる姿が大変エロいと好評を博したシリーズである。

元ハンターであったという作者の描くモンスターの生態はかなりのリアリティを誇り、そういった面でも人気を博していた。

「こ、この女ハンター生態調査フルフル編く肉壺から滴り落ちる快樂の蜜くは、あまりのエロさにギルドから絶版をくらったという、幻の逸品じゃないですか!」

「ほほ……私も若い頃は色々ありましてね。このエロ本を集めるために人生をかけていました」

「おお……」

「早速読み込んでおられる。気持ちわかりますよハンターさん。女ハンター生態調査フルフル編く肉壺から滴り落ちる快樂の蜜くは素晴らしいエロさ……。フルフルに捕食され、鎧を溶かされる女ハンターの絶望に染まる表情に嗜虐心が煽られたものです。……おや、ハンターさん?」

「……すみません、村長さん。捕食以外のものはありますか?」

「おや、お気に召しませんでしたか。でしたらこれはどうですか? 媚薬を分泌するタマミツネの体液にトロトロに溶かされてしまう、女ハンター生態調査タマミツネ編です」

「そんなえっちなモンスターがいるんですか!」

「いないからフルフル編もタマミツネ編も絶版になったんですよ、ハンターさん」

「うわ、うわあ……」

「ほほほ、お気に召された様子。その本は全て差し上げます。私の青

春……どうか、大切にしていたいただきたい」

「村長……！ 家宝にします!!」

少年と爺さんの世代を超えた絆がエロ本によって結ばれていた。

「まあ、エロ本に熱を上げていたので、私の婚期は遅れたのですが」

「何か言いましたか？」

「いえ、何も」

一方その頃！ カムラの里では！

その日、カムラの里の集会所は慌ただしい動きを見せていた。

忙しなく職員たち動き回り、常のゆつたりと落ち着いた空気が嘘のようだ。

集会所中央のテーブルには、里長であるフゲン、ギルドマネージャーのゴコク、そして集会所受付嬢ミノトが真剣な面持ちで顔を突き合わせていた。

「里長、この雰囲気は一体……何か、あったのでしょうか」

ミノトの疑問に、フゲンは重々しく頷いた。

その様子から、ただならぬことがあったのだとミノトも気を引き締めめる。

「ミノト。ギルドから……緊急クエストがカムラの里集会所に通達された」

「緊急クエスト……!?!」

緊急クエスト。

それは、通常のクエストとは一線を画すものである。

特筆すべき点は、その緊急性が極めて高いこと。

例えば、今まさに村がモンスターに襲われている、と言うような。

悠長にしていれば取り返しをつかないことになり、迅速に対応する必要がある。

そして、その危険性もまた高い。

火急を要する依頼というのは、それだけ強大なモンスターが原因になっっていることが多いからだ。

従って、緊急クエストはハンター個人に向けて通達される場合がほとんどだ。

つまり、「こいつなら少なくともこのクエストから生きて帰ってくるぐらいはできるだろう」とギルドから判断されない限り、緊急クエストを受けることはできない。

それだけ、特別なクエストが緊急クエストなのだ。

しかし、ミノトには疑問があった。

「ツミキに任せればいつものように終わりませんか？」

そう。

いくら緊急クエストが特別危険なクエストとはいえ、カムラの里には常軌を逸したハンター、ツミキがいる。

ツミキに任せれば、いつものように鼻歌混じりにこなしてしまうだろう。

それはもちろん、フゲンやゴコクもわかっている。

「ああ、ツミキに任せれば問題はない……と言えれば、よかつただけどな」

「今回ばかりは、ツミキに任せると絶対に失敗すると断言できるゲコ」

「ツミキが絶対に失敗する!?!」

信じられない言葉に耳を疑う。

ツミキが討伐できないモンスターがいるとは、とても思えなかった。

あの金獅子すら狩猟してしまうツミキをして、討伐できないと断言されてしまうモンスター。

ミノトが思い浮かぶ存在など、一つしかない。

「まさか……古龍が」

そのあまりにも強大な力から、天災として畏怖される絶対的なモンスター。

目撃情報すら極端に少ない彼らは、しかしこの世界の絶対強者として確かに存在している。

「いや……古龍ではない」

そんな馬鹿な。

古龍が里の近くにいるという状況も里存亡の危機だが、古龍以外のツミキが討伐できないモンスターがいるというのも、ミノトにとつては悪夢に等しい。

目の前が真っ暗になるような感覚があった。足にも力が入っていないのか、ふるふると力なく震えている。

やっとの思いで、ミノトは声を絞り出す。

「里長……それは、どんなモンスターなんですか……？」

「……これは、見てもらった方が早いだろう。ミノト、これが依頼書だ」

手渡された一枚の依頼書を見るのに、勇気が必要だった。

それもそうだろう。ここには、どうやっても抗うことのできない絶望が描かれているのだから。

ツミキが狩猟できないということは、そういうことだ。

ひよっとしたら、この依頼書には世界の終わりが書かれているのかもしれない。

けれど、その全貌がわからなければ、対策を立てることも……大切な人たちを守るために、己を奮い立たせることも出来ない。

覚悟を決める。例え絶望的な状況だったとしても絶対に諦めてやるもんか。

意を決して、ミノトは依頼書に視線を落とした。

「こ、これは——ツ！」

捕獲

催淫バブルパニック

◇環境情報

大量発生・増殖なし

◇受注・参加条件

HR 4 以上

◇失敗条件

報奨金ゼロ

タイムアップ

◇依頼主

幸せいっばいの女ハンター

◇依頼内容

ギルドからの依頼でタマミツネを相方と狩猟しに行つたのよ。

そしたら、濃いピンク色の見たことない色の泡に相方が突っ込んじやって！

タマミツネの色付き泡っているんな効果があるじやない？

その濃いピンク色の泡が実はその……媚薬みたいな効果があつたみたい。

何とかベースキャンプに相方を連れ帰つただけど、相方は我慢の限界だったみたいでそのまま私を……うふふ。

煮え切れなかつた彼もやっとプロポーズをしてくれて、今年の冬に式を上げる予定なの。

あのタマミツネは私たちの愛のキューピットね！ 今、とっても幸せです！

あ、とても珍しい個体とかなんとかで、どっかの富豪がタマミツネを欲しがってるの。

だから、くれぐれも討伐しないようお願いね。なんか、ギルドも調査したいとかなんとか……。

「……………は？」

内容を飲み込むのに、しばしの時間を要した。

「ミノト……気持ちちは分かる。だが、我々はこの恐ろしいクエストに挑まねばならないのだ！」

「え？ ……いや、確かに恐ろしい惚気をされたような気はしますが」
もう一度、ミノトは依頼書に目を通す。

「……ただの惚気話じゃないですか!!!」

ミノトは依頼書をテーブルに叩きつけた。

「ふざけないでください!! 私の覚悟を返してくださいよ!!」

「いやしかしたなミノト、これは本当に由々しき事態なのだ」

「どこがですか!?! ……いや本当にどこがですか!?! 依頼書からは人生最高潮の女がいることしか読み取れないんですけど!?! いつから緊急クエストは結納ハガキになったんですか!?!」

「そんな些細なことはどうでもいいゲコ。ミノト、問題なのはクエストの種類ゲコ」

「些細なことでは絶対にはずさないとはいえ」

とはいえ、ミノトもゴゴクの言わんとすることは分かる。

確かに、これはツミキであれば絶対に失敗するクエストだった。

「タママツツネの捕獲依頼。……ツミキには、不可能ゲコ」

「……そうですね。ツミキに捕獲は難しいと、私も思います」

大型モンスターに関するクエストには、三種類のクエスト種別がある。

1つは、討伐クエスト。

これは、指定のモンスターを討伐することで、クエストクリアとなる。

1つは、捕獲クエスト。

これは、指定のモンスターを罠と麻酔を用いて捕獲することでクエストクリアとなる。

1つは、狩猟クエスト。

これは、指定のモンスターを討伐か捕獲すれば、クエストクリアとなる。

最も多いのは狩猟クエストであり、ツミキはこれまで狩猟クエストしか受けてこなかった。

……そして、ツミキはその全てのクエストで、モンスターを討伐してクエストクリアしている。

モンスターを討伐することと捕獲することはまた別種の技術が必要だ。必要だが、ツミキほどの天才ができないということはまずな

い。

ならば、ツミキはあえて捕獲を行ってこなかったのか。違う。

そうではないことを、この場の三人は知っていた。

ツミキがクエストに出れば……絶対に、タマミツネを討伐する。

「しかし、それで何か問題がありますか？ 確かに、今はタマミツネの繁殖期。凶暴化したタマミツネが人を襲うこともあるでしょう。このタマミツネも人を襲うから依頼が来ているのでしようし……結局、タマミツネを討伐しても脅威の排除は叶います」

「ミノト、目を逸らすな」

「優先すべきは人の安全。それが達成されるのであれば、討伐か捕獲かなんて些細なことです。ツミキに任せればあつという間に終わります」

「ミノト、些細なことではないゲコ」

「……」

沈黙。

堪えるように、ミノトは俯いた。

フゲンとゴコクが、やれやれ、とため息を吐いた。

「ここにちゃんと書いてあるだろう？ 媚薬を分泌するタマミツネだ

から捕まえてほしいと」!!!

「それがおかしんですよ!!!!」

堪えきれなかったよ!!!だ。

「依頼内容を無視するのはハンターとして関心しないゲコね」

「媚薬分泌モンスターを捕獲しようとしてる方がどうかと思いますが!? 絶対ろくなこと考えてないですよこの遠くの富豪の人! とうか、そんなえっ……な本みたいなモンスター本当にいるんですか!?!」

「いるから依頼が来ているのだろう。俺も昔そういう文献があると聞いたことがある。女ハンター生態調査タマミツネ編くところろ粘液でとろけさせてくという題名らしいが……読むことは叶わなかった。大変素晴らしい書物という噂だ、一度は読んで見たかったものだ……」

フツ、気炎万丈！」

「今は絶版になっっているのが惜しいゲコ。叶うのなら、一度読みたいものだゲコ」

「なんでこういうところで堂々とえ、えっ……な本の話ができるんですか……!?! 信じられません……!!」

それをえつちな本と認識できる君はなんなの？

「とにかく!! 仮にこの依頼書が本物だったとしても、媚薬を分泌するモンスターを欲しがるとは思えません! 依頼を無視して討伐するべきです!」

「それはできない。もうギルドから捕獲を請け負うということで異例の前金を貰ってるからな。ここで失敗しようものならカムラの里がなくなるぞ」

「何やってるんですか!?!」

「許せミノト……過疎化の一途を辿る村には金がないのだ。砦の整備には莫大な金がいる」

「そんなリアルな里の運営事情は聞きたくなかった……!」

「とにかく、この緊急クエストは絶対に成功させる必要がある。だが、ツミキに任せると必ず失敗するだろう。そこで、だ」

「ヒノエとミノトの二人に、ツミキのブレーキ役として共にクエストに行つてほしいゲコ」

「いやですよ!?! なんて媚薬を撒き散らすってわかってるモンスターに……!!」

言いつつ、ミノトはクエスト依頼書の内容を反芻する。

どうやら、男ハンターは媚薬泡を浴びてからベースキャンプに戻るまでの、長くても数十分の時間で、理性で抑えきれないレベルの催淫状態になったようだ。

媚薬の効果が出るまでの時間が早すぎる。そして、媚薬の効果も強すぎる。

一応、そっちの知識も豊富なミノトは、これがいかに「ヤバイ」ものか理解していた。

絶対に泡を浴びてはならない。

だが、自分の技量ではそれが不可能であることも理解していた。それに、もし仮にミノト自身が媚薬泡から逃れられたとしても、万が一ツミキが泡の影響を受けてしまえば？

あのただでさえ普段から発情しているようなスーパーすけべが、強力な媚薬を摂取してしまうとどうなるのか。

考えるだけで恐ろしい。

ツミキは男で、自分は女だ。

きつと、抵抗もできずにあんなことやこんなことを……それだけに飽き足らず、ついには○○○で△△△なことを□□□にされてしまうのだ。

そこまで一瞬で想像を膨らませて、ミノトは真っ赤な顔を隠すように両手を顔に翳した。

「そんなの……っ！ そんなの、もうお嫁に行けない……っ!!」

なお、純粋な腕力はミノトの方が高いので本気で抵抗すればそんなことにはならないが、ミノトの妄想の中にそんなパターンはなかった。

「あ、そうです！ ウツシ教官に任せたらいいじゃないですか!」

「ウツシは別件にかかりきりで無理だ」

「そんなっ……!」

渾身の代替案も、どうやら実行は難しいらしい。

「しかし、困りましたなゴコク殿。まさか、ミノトがここまで嫌がると思わなかった」

「むう……こうなれば仕方がない。ヒノエだけに頼むとするゲコ。少し不安ではある……けど、ヒノエなら上手くツミキの手綱を握ってくれるゲコ」

「それが一番ダメに決まってるじゃないですかああああ!!」

この日一番のシャウトだった。

ツミキと？ ヒノエが？ 二人で？ 媚薬モンスターの討伐？

無理だ。

ミノトにとって最悪の事態になることが簡単に想像できる。

ツミキが媚薬を浴びる。

溢れ出る性欲を抑えきれずにヒノエを獣のように襲いそのまま人生にゴールインするだろう。

ヒノエが媚薬を浴びる。

押し込めてきた想いが溢れ出してツミキを誘いそのまま人生のゴールインを決めるだろう。

二人とも媚薬を浴びる。

1週間はベースキャンプから出てこなくなるだろう。そしてゴールインする。

どう転んでも最悪だった。

認められるわけがない。

それに、最近のツミキとヒノエの雰囲気は何かおかしい。

いや、ツミキというよりは……ヒノエがおかしい。

何か覚悟が決まったような……そう、例えるのなら、亀を待ちすぎたうさぎがもういいやとゴールに一直線に走っていくような。

ともかくにも、最近のヒノエには凄みというべきものがあるのだ。

「絶対にダメです！ ヒノエ姉様とツミキを二人で向かわせることだけは……それだけは絶対にさせません……！」

「話は聞かせていただきました」

「ヒ、ヒノエ姉様!?! どうしてここに！」

「俺が呼んでおいた」

「余計なことじゃありませんね!?!」

「それで、ヒノエ。どこまで話を理解しているゲコ?」

「タマミツネを捕獲する緊急クエストが通達され、ツミキが討伐してしまわないように同行者が必要だということまでは。この時期のタマミツネは凶暴です。きっと、近隣の村の方も不安に駆られているでしょう……早く、安心させてあげたいです」

「肝心なところを聞いて肝心なところを聞いていない……！」

謎のミラクル属性をヒノエは持っていた。

ミノトは頭を抱えた。

「そこまで理解しているのなら話は早い。ヒノエ、頼めるか」

「それは俺から説明しよう」

「さ、里長！」

「実は、媚薬を分泌するえっちなタマミツネが出てきたのだ」

「そんなえっちなモンスターが実在したんですか!？」

「俺も驚いている。まさかあの本のモンスターが実在したなんて……むっ!! ツミキ、お前、その本はまさか!?!」

フゲンの目がくわつと見開かれた。

その視線は、ツミキがもつ一冊の本。

それは、ツミキが村長からお礼として譲り受けた、

「女ハンター生態調査タマミツネ編」とろとろ粘液でとろけさせてくではないか!？」

「何!?! 女ハンター生態調査タマミツネ編」とろとろ粘液でとろけさせてくじゃと!?! ゲコ!!!」

「え、女ハンター生態調査タマミツネ編」とろとろ粘液でとろけさせてくですか!？」

「……?」

上からフゲン、ゴコク、ミノト、ヒノエである。

「ふっ……やはり里長たちも知っていましたか……この1冊を……!」

ツミキが顔の前で掲げる本は、確かにかのエロ本である。

その本に畏怖するように、フゲンたち三人が後ずさった。

無理もない。それだけこのエロ本はえっちであるのだから。

「あの……発売直後に絶版になった幻の1冊を……! ツミキ、これをどこで手に入れた!？」

「親切なお爺さんから譲り受けました。自分にはもう必要ないからと」

「なんて親切なご老公だ……。後で里を上げてお礼をしよう」

「ギルドからも返礼をしなければならぬゲコね」

「ところでツミキ……それはもう、読んだのか……?」

「ふっ……当たり前じゃないですか。……最高でした! 里長たちにもお貸ししますよ!」

「ツミキ！ お前はカメラの里の宝だ!!!」

男たちが盛り上がる横で、ヒノエはずっと首を捻っていた。

「ねえ、ミノト。あの本はそんなに有名なものなのですか？」

「わかりません」

「どのような本なのでしょう。確かタイトルは……女ハンター……
なんでしたっけ？ ミノト、わかりますか？」

「わかりません」

「ツミキが好きなものなら、知りたいです。私も後で貸してもらいま
しょうか」

「絶対にダメです。あれはヒノエ姉様には必要のないものです」

「ミノト、本の内容を知っているのですか？」

「わかりません」

緊急クエストよりもエロ本の方が求心力があったようだ。

もうこの里はダメだと思う。

11話 えっちな本は大切な事を教えてくれる

タマミツネ——呼称、泡狐竜。

水の豊かな土地に生息する、海竜種の大形モンスターだ。

海竜種の中でも独自の進化を遂げた種であり、特筆すべきは海竜種としては異常に発達した四肢だろう。

発達した四肢が地上での活動を可能にし、さらに、その運動能力は牙竜種にすら引けを取らない。

地上での運動能力であれば、現在確認されている海竜種の中で最も高いモンスターだ。

さらに、タマミツネというモンスターを語る上で、外せない要素がある。

泡。

タマミツネは、その体表から泡を分泌することができるのだ。

タマミツネの体液から作られた泡は非常に良く滑り、もしこの泡を大量に浴びたならば、ほとんどの摩擦を奪われまともに動くことすら困難になるだろう。

タマミツネはこの泡を戦闘中、フィールドに大量にばら撒くことで相手の行動の自由を奪いつつ、自身は泡を纏って地面との摩擦係数を限りなくゼロにし高速機動を実現する。

正しく攻防一体。

発達した四肢と特殊な泡が、タマミツネのモンスターとしての「強度」を担っている。

して、この泡。

ある学者の説によれば、タマミツネが分泌する泡の成分は、そのタマミツネが餌（主に魚介類）などから摂取した栄養素が滲み出ることがあるという。

実際に、ハンターがタマミツネの泡に触れた際に体力が回復したという報告も上がっている。

しからば。

もし、タマミツネに催淫性のある成分を含む餌を好んで食べるよう

な偏食家の個体が出現すれば。

そのタマミツネは——全身からえつちな泡を分泌する、媚薬泡をばら撒くタマミツネになるのではないだろうか。

「——可能性の話をするのであれば、ないとは言い切れませんが」
ベースキャンプに向かう荷馬車の荷台の上で、ミノトは思案していた。

「モンスターの生態系は未知数です。私たちの想像を、ヒトが積み上げてきた歴史を覆すような個体が時折現れることがあります」

古龍などは、そのさいたるものだろう。

大自然の嵐だと思つてたら実は古龍でした。

なんて、普通の感性をしていればまず気付かない。

スケールが大きすぎるのだ。

伝承や記録で古龍が認知されている地域でもそれは変わらない。

そもそも、何か大きな災害があるたびに「これはモンスターの仕業なんじゃないだろうか」と考えていけば、その人間は遠からず発狂するだろう。

知性ある脅威と知性なき脅威。

どちらがより恐怖を掻き立てるかなど、言うまでもない。

まあ、そんなことはどうでも良く。

「ヒトの側にも、突然変異としか思えない規格外は生まれてきます。モンスターにはそれがないと考える方がおかしいでしょう」

ちらつと、ミノトはツミキを横目で見た。

書物を漁りタマミツネの情報を頭に叩き込んでいるツミキは、勉強しているとは思えない間抜けな顔をしていた。

ほー、とか、おお……とか何やら感心しているようなので、まあ新しい知識が入っているのだろうとスルーした。

ともあれ、ミノトはツミキという特大の規格外をよく知っている。なら、モンスターにもそういうのは生まれてくるだろうと納得することができた。

普通なら「いや、こんなモンスター本当にいるのか？」という媚薬タマミツネを、驚きはしたもののカムラの里の誰もその存在を疑わなかった理由はここにある。

「緊急クエスト、タマミツネの捕獲。……ツミキを見ていると感覚が狂いそうになりますが、本来、大型モンスターは経験とキャリアを積んだハンターが、相対するたった1体のモンスターのためだけに入念な準備を行なって、初めて狩猟できる強大な生物です」

「ミノトは不安ですか？」

「いいえ、ヒノエ姉様。——私も、ヒノエ姉様も。ハンターとして研鑽を積んできました。狩れるかどうかは別として、タマミツネに挑む資格が、私たちにはあります。だから、里長もギルドマネージャーも私たちを同行させたのでしよう」

ミノトには苦い記憶がある。

忘れもしない。

あの、マガイマガドに襲われたあの日から、ミノトは尋常ではない修練を己に課してきた。

ツミキのように自身をおろそかにすることなく。

大好きな人たちという、現在〃を大切にし、その上で己を強くするために叩き上げてきた。

……いや。

マガイマガドに襲われた日よりも、もっと前から。ずっとずっと、ミノトは強くなろうと藻掻いてきた。

見据える背中では遙か遠く。だからこそ、ミノトは何年も何年も全力で走ってきた。

その研鑽は、ミノトの中に確かな形を持って結実している。

「しかし、苦戦を強いられるとは思っています。何せ、私もヒノエ姉様も……一応、ツミキも。タマミツネは初めて相対するモンスターですから」

「繁殖期にならないとタマミツネは積極的に人を襲うようにならないのでしたっけ。それに……この依頼のタマミツネは……少し、特殊なのでしょう、ミノト」

「はい、ヒノエ姉様。何より厄介なのが……情報では、このタマミツネはびや……催淫効果のある体液を泡として分泌する、という点です」

ミノトは媚薬と言いかけて、催淫効果と訂正した。

「催淫効果……。ヒトの感情を昂らせる、高揚効果でしたよね」

「似たようなものです。純粹な高揚効果のみであればまだ有用な場面もあつたかもしれませんが……催淫効果となると、話は変わってきます。クエスト依頼書を見る限りでは、催淫効果のある泡に触れたが最後、発じ……自由には動けないコンディションになることは想像に難くありません」

ミノトは発情と言いかけて、コンディションと訂正した。

「それは、狩猟中には致命的ですね……」

「間違いなく。ハンターが陥る状態異常の中では、麻痺や睡眠と同レベルの危険な状態異常と見ていいです」

「何か無効化する手段……そうでなくとも、その状態異常から回復する、または回復を早める手立ては必要そうですね。ミノト、何かいい案はありますか？」

「……お」

「お？」

「……すみません、ヒノエ姉様。現状では、何も……」

ミノトは明確な案を思い描いていたが、言わなかった。

ついでに、思い描いた案を実行している自分の姿を想像してしまつて、両手で顔を覆つた。

「もう嫌だ……こんなモンスター狩れるわけないです……もう帰りましょうヒノエ姉様……」

「ミノト!? さっきまでの強気なミノトはどこに!?!」

「大体なんで私たちがこんな……里長がツミキと行けばよかつたじゃないですか……ギルドマネージャーだって昔はハンターだったんですし、私たちじゃなくても絶対よかつたはずです……」

「ミノト、ミノト。里長はもうおじいちゃんになる年齢です。流石にフルタイムの狩猟は……」

「わかつてます、わかつてるんですヒノエ姉様。でも、それでも……う

うろうろうっ！」

往々にして割り切れないものはあるということだ。

というか、もし仮にフゲンとゴコクがクエストに同行していた場合……筆舌に尽くし難い……それはもう地獄としか表現できないような地獄絵図に……なっていた。

唸るミノトを見て、お姉ちゃんであるヒノエは緊急クエストで緊張している妹を安心させないと、と思った。

この姉、ミノトが催淫効果の詳細をあえて伝えず、ヒノエにも想像できるとにかくやばい状態異常として伝えたいので、催淫というものの本質をまるで理解していなかった。

なので、ミノトが危惧している「最悪」とは別の視点で、ヒノエにとつての「最悪」である、力およびモンスターに敗れ誰かが死ぬ。

そんな未来を一切寄せ付けないと絶対的にヒノエが信頼し、また安心しきっている人物を見て言った。

「ツミキがいるから、大丈夫です、ミノト！」

「むしろ全然大丈夫じゃないんですヒノエ姉様……」

ヒノエの想像とは真逆に、ミノトの顔色はより悪くなった。

ミノトの考える最悪とは、タマミツネの強力な媚薬にやられた結果、マジで行くところまで行ってしまわないか、という点だからだ。

ツミキと、ヒノエと。

そして……。

「……うろうろうっ！ 頑張れ私、負けるな私っ！ 精神力なら、誰にも譲りません……！」

「今度は急にやる気になりましたね!？」

「やってやります、私はやりますヒノエ姉様！ 泡さえ避ければ何も問題はないのです！ 例えそれがどんなに困難なことでも、私は絶対に諦めない!!!」

媚薬を避ける覚悟の言葉じゃなければもうちよつとカツコよかつたんじゃないかな。

「ツミキ！ タマミツネの文献を渡してください！」

「え、うん」

念のために、もう一度タマミツネの情報を書き入れ直そうと、ミノトはツミキの手からタマミツネの文献を取った。

さっと目を通す。

「ふむふむ。荒くれ者がタマミツネの泡から抽出した媚薬成分を拘束された女ハンターに垂らしやなんですかこれ!？」

「ミノト……本当に恐ろしいのはモンスターではなくヒトなのかもしれないね」

「恐ろしいのはこれから狩りに行くのにえつちな本を読んでもツミキの頭です!!!」

「ふっ、甘いねミノト。この本にはかのタマミツネに関して有用な情報がたくさんある！ 僕はその精査をしていたんだ！」

「この！ 本の！ どこに！ 狩りに有用な情報が!! あるんですか!!!」

「あるさ！ この69ページを見てみなよ！」

ミノトからえつちな本をひったくったツミキは、パラパラとすぐに該当ページを開く。

お前全ページどんな内容か覚えてんの……?？」

「本当ですか……? どれどれ……タマミツネの媚薬を塗られた女ハンターは気が狂いそうな衝動に突き動かされその指は快楽を求めて動ツミキiiiiiiiiiiii!!!」

「あぶなっ!？」

ミノトの腰の入った正拳突きを、咄嗟に半身になってかわす。

「なんてもの読ませるんですか!?! なんてものを読ませるんですか!?! タマミツネの前にお前を狩るぞ……!？」

「状態異常時の対策大事って言ってなかった!？」

「こういうことじゃないんですよ!?!」

「じゃあどういふことだよ!?!」

「ミ、ミノト！ ここは狭いから暴れてはダメですよ。ところで、その本は確かツミキが里長たちに見せていたものではないですか?」

「ツミキのせいでまたヒノエ姉様が興味を持ったじゃないですか!」

どうしてくれるんですか……?!」

「うわ待って待って、のし掛かってきたら荷車のバランス崩れて横転するって!!」

ツミキ相手にマウントポジションをとってぎやいぎやいキレ散らかしているミノトを見て、今話を聞くのは無理そうだなあ……とヒノエは思った。

「それにしても。ミノトもツミキも、いつも通りみたいでよかった」
もしかして目か頭が悪いの？

と、誰かに聞かれたら言われそうな光景だが、この二人は割といつもこんな感じなので正しかった。

もしくは、このちよつと前が酷すぎた、というのもある。

ヒノエは1週間ほど前を思い出す。

『ツミキ。先に言っておきます。これは、捕獲依頼。……絶対に、タマミツネを討伐してはいけません』

『……そいつ、人襲ってるんだろ?』

『……断言はできませんが、おそらくは』

『僕に。——僕に、人を殺したモンスターを殺すなど。……そう言ってるのか?』

『そう言っています』

『ミノト——!!』

『貴方は言ったはずです。人を襲うモンスターを狩猟すれば、それは未来の誰かを守ることに繋がると』

『だから討伐するんだろ!!』

『いいえ。狩猟とは脅威の排除です。それは、討伐でも捕獲でも変わらない。違いますか?』

『違う!! モンスターが生きている限り、そいつに誰かが殺される可能性はずっと残る!! だからモンスターは討伐しないといけないんだ!! だから討伐するんだ!!』

『言い方を変えましょうか。ツミキ。貴方は……ヒトを守りたいのですか? モンスターを殺したいのですか?』

『そんなの決まってる!! 僕はヒトを守りたいから、モンスターを殺

すハンターになったんだ！ ミノトだって知ってるだろ!? なのに、なんでこんなことを……!!!』

『……こっちの成長はまだまだですね。……これ、ずっと平行線ですね……。……ああああああっ、もう!!! 面倒くさいっ!! うるさいっ!!! 私の胸を揉んだこと、許されるためになんでもやるって言っただけでしょう!? つべこべ言わずに捕獲しなさい!!!』

なんてことがあったので、二人の間の空気はそれはもう最悪だったのだが。

今、ヒノエの目の前で喧嘩をする二人は、その空気を引きずっていないように見える。

もちろん、ミノトのメンタルケアにもツミキのメンタルケアにも奔走したヒノエの尽力もあっただろうが。

「ツミキ。一応、最後に確認しておきますが。……捕獲ですからね」「分かってるよ。……ミノトに償いをするって言ったのは僕だ。ちゃんと約束は守る。……でも、ちゃんと止めてほしい。じゃないと、僕は自分で自分を止められないだろうから」

「……ええ。約束します」

雨降って地固まる。

実際は触れたら爆発する地雷をとりあえず別の場所に埋め直しただけなのだが、ツミキが「モンスターを討伐しない」という選択肢を選んだことは、普段のツミキを知る者からすれば異常なので、少しはツミキも前進しているのかもしれない。

この前進の価値を理解している者は、今は里の大人たちしかないが。

巨人が強大な岩を抉って作ったような空間。まるで秘密基地だな、というのが、ツミキの第一印象だった。

抉れた岩陰に隠れるようにベースキャンプが設置され、その奥にはハンターが休めるようにベットが設置されている。

というより、ベットしかない。あとはギルドが設置した赤と青の納品ボックスくらいか。

カムラの里でクエストをこなしていく中でツミキが利用していたベースキャンプと比較すれば、利便性はないに等しい。

ここでは食事はおろか、装備の持ち込みすら難しいだろう。

質素を極めたようなベースキャンプ。だが、逆にそれが秘密基地感を醸し出しているように感じられ、ツミキにはそれが好ましかった。

なんて美しい景観のフィールドなのだろう、というのが、ヒノエの第一印象だった。

高山地帯のど真ん中の岩肌を抉って作られたようなベースキャンプなため、そこからはフィールドを一望することが可能だ。

遠方にはいくつもの山々が雲を貫き聳えており、どこか神聖な雰囲気すら感じる。

透き通るような美しい水に豊かな緑は、人の手が加えられていないにもかかわらず調和を持った外観をしており、見るものに美しいと感じさせる美を備えていた。

ここでえっちなことしたんだ……というのが、ミノトの第一印象だった。

まずベットを確認した。木製の寝台に、休めるようにとシートがかけられている。しかし、見た感じちよつと固そうだ。

これでは最中に背中が痛くなったりしないのだろうか……？ と、さわりとシートに触ってみる。思ったよりは柔らかかった。

そのとき、シートにシミのようなものを見つけて、「ひゃあ」と変な声を出して、バツ！ と手を離して目を逸らしてしまう。

けれど気になるものは気になるので、徐々に首を向けつつ、薄目ですっかりと確認した。

普通のシミだった。断じてセツ……のあれではない。

ミノトはなんだかホツとした。常識で考えれば1週間も前の液体によるシミが今も残っているわけがない。

次に、ミノトはベースキャンプ全体の外観を確認した。

岩肌を抉った隙間に設置されているようなベースキャンプなので、当然扉のようなプライバシーを保護するような小洒落たものはない。

これでは丸見えだ。圧倒的……丸見え……！

こんな誰に見られるかもわからないところでえっちなことをした依頼書の女ハンターの、その光景を想像して、ミノトは顔から火が出そうなほど熱くなった。

しかしスリルがヒトを燃えさせるのだという概念があることを、ミノトは認識している。

それに、丸見えとはいえ一応ここはフィールド。

クエストを受けたハンター以外が来ることは流石にあまりないだろう。

ならば、一応の秘匿性は保証されている状態。安全にスリルを味わえるという点は評価に値するのではなからうか。

いや評価ってなんだ。私はそんなえっちな女じゃない！

ここまでの思考、実に十秒である。

「こんな遠くのフィールドまでできたのは始めてだ。ヒノエ、ここはカムラの里とは違うギルドが管理してるんだっけ？」

「そうですね。ギルドが管理している、という点は同じです。でも、支部が違う……といえれば分かりやすいでしょうか。簡単にいえば、私たちが普段目にするギルドはカムラの里周辺の管理運営を行うギルドの支部、ここはユクモ村周辺の管理運営をするギルドの支部の管轄……と言った具合です」

「僕は気に入っただけど、おんなじギルドでもここまでベースキャンプの設営に差が出るもんなんだなあ……」

「ツミキもそう思いますか!? うき団子が食べられないのはすぐにも改善するべきですよね！」

「え。あ、うん。そうだね」

「話を聞いた時、ヒノエはショックでした。クエスト中にうき団子を食べられない……そんなの、酷すぎます。移動時間が長いので事前に作っても日持ちの問題がありますし……。だから、日持ちする材料で

作ったたった数種類のうさ団子しか持ってこれなかったんです！」

十分では……？ という疑問を飲み込める程度には、ツミキとヒノエの付き合いも長かった。

ツミキの言った通り、ここは普段ツミキがハンターとして活動を行うエリアからは少しばかり離れている。

とはいえ、一応近辺ではあるのだが、ギルドの管轄が変わる程度には、離れていた。

大砂漠の中心にある大都市、ロックラックよりも遙か東の山岳地帯。

普通なら、カムラの里で活動するツミキが訪れることのない場所だった。

「そういえば、なんでカムラの里に緊急クエストが届いたんだ？ よく知らないけど、普通はそのエリアのギルド管轄の集会所にだされるんじゃないの？」

「それは、少しばかり複雑な事情があるんです」

ギルドが、その管轄外の集会所へ緊急クエストを出すことが全くない、というわけではない。

例えば強大なモンスターが出現して、そのギルドの管轄内にそのモンスターを狩猟できる腕をもつハンターがいなかったとしよう。

当然、管轄外のモンスターを狩猟できる実力をもつハンターに緊急クエストを出す。

しかし、今回はそのパターンではない。

「カムラの里に緊急クエストが届いた時、タマミツネは大社跡フィールドに向けて移動していました。しかし、どういうわけか……途中で、この溪流フィールドに引き返したんです」

「え、なんで……？」

「理由までは……。ともかく、そのような経緯で、クエストを請け負った私たちも急遽この溪流フィールドに行くことになりました」

そういう事情があり、ツミキたちは溪流にいる。

……もし、神の視点を持つ者がこの場にいれば。

まるで逃げるようにカムラの里周辺のフィールドから引き返し

たッタマミツネを見て、何か気づくこともあつたかもしれない。

「……ま、理由はなんでもいっつか。やること変わらないし」

「ツミキ、捕獲ですよ」

「もう耳タコだよ。……じゃ、ちよつと行ってくる」

「あ、待ってください！ ミノト、ミノト！ ……ミノト？ いつまで寝台を見てるんですか……？」

「はっ!? ち、違いますからねヒノエ姉様!? 私はここでゴニョゴニョ……なことを考えるようなはしたない女ではありません!!」

「何を言ってるの……? そんなことより、ツミキが行ってしまいます。私たちもフィールドに出しましょう」

寝台を見つめてぽけーっとしていたミノトの手をヒノエが引っ張る。

ツミキは、ベースキャンプから続く小道を歩きながら、後ろ背に手をひらひらと振った。

そんなツミキに置いて行かれまいと、竜人族の双子姉妹が小走りで駆け寄った。

「今までの話の流れでよく一人で行こうと思いましたがね？」

「二人がすぐに来てくれるって信じてたんだよ」

「女の準備を待てない男はモテないそうですよ」

「いや準備って、ミノト寝台を熱っぽく見てただけじゃん……」

「なあっ。あ、あれは、そう！ 休息はハンターにとってとても大切な要素です。誰も休みなしで動き続けることはできません。だから、私はあの寝台が休憩に最適かどうかを確認していました。……休

憩ってそういう意味ではないですからね!」

「これで誤魔化せられると思われてるの、僕……?」

「でも、確かにあのベットは少し……固そうでしたね」

「質素すぎるくらいはありますね、ヒノエ姉様。私たちの知っているベースキャンプはもっと快適です。それも、地域ごとの特色と言つてしまえばそれで終わりですが……」

「ふふっ、でも、大きいから三人で一緒に寝られそうですね」

「ツミキのすけべ」

「何も言っていないし何かを考える余裕もない判定スピードなんよ」
取り止めのない雑談を交わしながら、三人で歩く。
これから大型モンスターを狩りに行くとは思えないほどの自然体。
きつと。

世界が終わるその時になっても、こうして彼らはくだらない雑談を
しながら挑むのだろう。

まあ、挑みに行くのは淫乱タママツネなのだが。

12話　ぬるぬるでつるつるなあの子

——そのタマミツネは、森に溶け込むようにそこに存在していた。タマミツネの体毛は白色と董色を基調としている。色の比率として緑色や茶色、鼠色が目立つ森林とは調和しない。

けれど、その鮮やかな色は、溪流に咲く一輪の花のように、そこに居た。

「あれが……泡狐竜タマミツネ」

獣の骨格と蛇を連想さる胴体。

人間がその体躯に激突されれば、全身の骨が砕け散るだろうと怯むサイズと、そのサイズに過不足なく搭載された筋肉。

大型モンスターが放つ絶対強者としての威圧感に、ヒノエの体が一瞬だけ竦む。

しかし、次の瞬間にはモンスターを睨み弓を構えていた。

「打ち合わせ通り、私とツミキが前に出て、ヒノエ姉様は後ろで援護をお願いします。ツミキはくれぐれもやり過ぎないように」

「りよーかい」

「りよーかいです」

「タマミツネはまだ私たちに気づいていません。厄介な泡を出される前に……初手で、勝負をかけます。……今ッ!!」

ハンティング・スタート。

開戦の狼煙は、ツミキとミノトの間を縫うように放たれた2本の矢。

蟠を巻くように休んでいたタマミツネのこめかみにヒノエの射撃が直撃する。

突然の衝撃に身を跳ね上がらせるタマミツネ。

休息を邪魔した不届きものはどこだと頭が持ち上がる。

その真上へ飛び上がる青い影。

空へと伸ばされる鉄蟲糸。纏うは防具、カムラノ装シリーズ。宙に引かれる青い軌跡は彗星の如く。

抜き放った錆褐色の盾をタマミツネの頭に叩きつけた。

「潰れろッ!!」

ツミキの盾とタマミツネの脳天がぶつかり、鉄と鉄がぶつかったような硬質な音が木々を揺らす。

叩き落とされる頭。そこに、空間を引き裂くように飛来した4本の矢が突き刺さった。

「ふ——」

腰を深く落とし、長弓を地面と並行に構え、限界まで引き絞った矢を放った後の残心を取るヒノエ。剛射による一撃、その精度に狂いなし。

一息の間に頭部に叩き込まれた三連撃。脳を揺らす攻撃に怯むタマミツネが、癩癩を起こした子供のようにならなうった。

纏わりつく虫を追い払うような不規則な動き。しかし、モンスターの巨体によるパワーは健在。触れようものなら防具の上から潰されるだろう。

ヒトに対してのデットゾーン。

迷うことなく飛び込む黒い風、一陣。

「はああああッ!!」

前方へ射出した鉄蟲糸は彼女が加速するためのレールだ。

糸に引かれピンポン玉のように弾かれたミノトのランスが、勢いをそのままにタマミツネの前脚を裂く。

ランスの鉄蟲糸技、流転突き。

自身も高速で動く中、がむしゃらに暴れていたタマミツネの前脚を狙い澄ますように突く集中力と、飛び込む胆力。

ミノトの実力は、マガイマガドと相対した時とは比べ物にならない。

「……ッ！」

努力が結実した手応えにミノトが拳を握る。

その横を、ツミキが駆け抜けていく。

「ケリをつけてやる!!」

強く地面を踏み込み、飛び込みながら片手剣を抜刀。

振りかぶった瞬間、タマミツネが「跳躍」した。

海竜種としてはあり得ないほどの異常発達をした四肢を用いた大跳躍。獣の本能か、ツミキの背後に回り込むようにその巨体を滑り込ませた。

一瞬の鮮やかな不意打ち。奇襲への起点となる一手。

その一手を、ツミキは神速の反応速度で潰した。

ノールックで背後へと投げられた翔蟲により、ツミキの体が斜めに落ちる。

0.5秒前までツミキの体があつた空間を、タマミツネの巨顎が噛み砕く。

その時にはもう、ツミキは片手剣を振り抜いていた。

脚、腰、背中、肩、腕、手首。全ての筋肉の理論上の最高効率と寸分違わぬ動きをした回転斬りが、タマミツネの尾ヒレの一部を斬り飛ばす。

「おおおおおおッ!!」

ツミキの左腕が閃き、一呼吸の間に三撃を叩き込んだ。

右脚を軸に舞うような回転斬り上げ。刹那、ツミキの身体が深く沈み込む。

空を走る剣、それは空間そのものを鞘にしているかと錯覚させるほどの剣速で振るわれた。

渾身の旋刈りがタマミツネを斬る——直前。

ぞくり、とツミキの第六感が最大級の危険信号を鳴らした。

「後ろですっ!!!」

僅かに遅れてヒノエの声が鼓膜を揺らす。

ふわりと漂う濃いピンク色の泡が、ツミキの背後から着弾しようとしていた。

ツミキの背後に回り込む際、タマミツネは少量の泡を周辺にばら撒いていた。

ミノトから散々注意するように言い含められた媚薬泡の記憶が蘇る。

回避は必須。泡を破れないため迎撃は不可能。

「知るかア!!」

ツミキは、回避しながら攻撃を続行した。

土を削りながら足のスタンスを広いものへ。地面を這うぎりぎりの超低姿勢。ツミキの頭上数ミリのところを泡が通過するのと同時に、斬り上げ型の変則的な旋刈り一閃。

尾に深々と切創を刻まれたタマミツネが、たまらないとばかりにガムシヤラに四肢を動かして距離を取る。

頭上近くで破裂した媚薬泡の被液を前転することで避け、獰猛な目つきでモンスターを睨むツミキの脚が、ぐつと力を溜めるように曲げられた。

「ストップ！ ストップですツミキ!! 討伐するつもりですか!？」

「あ」

「忘れないでください！ これは捕獲クエストです！」

ミノトの静止でツミキが止まる。

「あ……ツミキ！ ミノト！ 前を!!」

その僅かな間で、形勢が大きく変わった。

「タマミツネが泡を……!」

ぐるぐると狂ったように回転するタマミツネから、夥しい量の泡がばら撒かれる。

体から分泌される液を体毛で擦ることで生まれる、子供一人ならすっぽりと包んでしまえそうな大きさの泡が、次々と空間を埋め尽くしていく。その生産スピードの異常さたるや。

仮に、空を見上げた時に目に映る空とそれ以外の比率を10:0とした場合。

空と泡の比率が2:8になるような地獄がそこにあった。

「なんですかこれえ!？」

まだエリア全体に泡が広がっているわけではない。

しかし、タマミツネの周囲に近づくのが実質不可能と言えるだけの泡の防壁だ。

文献には載ってなかった異常な光景に、ミノトの思考が止まる。

「これは、まさか……」

「ッ！ 知っているのですか、ツミキ！」

「うん。あれは女ハンター生態調査タマミツネ編くところとろとろ粘液でとろけさせてくの45ページにあった……確か、媚薬成分を含んだタマミツネの粘液は気泡が得意やすいんだ！ 擦る時に空気の音がしてエロいらしい！」

「考えうる限りで最低の知識の出どころですね!？」

「でも、あんまり下品すぎると僕は嫌だな……」

「聞いてないッ！」

そうこうしている間にも加速度的に泡は増えていく。

ここまでくると満足に動くのも難しくなるのにそう時間はかからないだろう。

「ど、どうすれば……!？」

「それにしてもあのタマミツネ泡出すの早いな。液体の分泌が異常に早いのか？ ……あれ？ 液体を擦って泡を出すのが早い……あつ」

「今日本当にことごとくが最低ですよ？」

思考の裏で、ツミキは「今なら飛び込んでも泡を全部避けながら狩れる」と考えていた。

だが、当然それができるのはツミキだけだ。ミノトは近づけすらない。

一人でモンスターと相対して、途中で剣を止められるかどうか。

ツミキには、自信がなかった。

「……参ったな」

打開策に窮するツミキとミノトの頭上を、一本の矢が突き抜けていく。

漂う泡を次々と貫く矢が、泡の世界を引き裂くようにタマミツネへの道を切り開いた。

地面に膝を立て、竜の一矢を放った体勢のヒノエが叫ぶ。

「私が泡を打ち落とします！ だから、二人は前へッ！」

「流石ですヒノエ姉さまー！」

一秒の迷いもなくミノトは駆けた。

これ以上泡が増えると本当に動けなくなる。勝負所は今だと判断

した。

それ以上に、ヒノエを信頼していたから。

必ず、行手を阻む泡を打ち落としてくれると。

ミノトの信頼に応えるように後方から放たれた矢が次々と泡を打ち落としていく。

それを見て別ルートから動くツミキは特に援護なしでも普通に泡を避けていた。

「行けます……！　これなら……！！」

「行つて、ミノト……！　……あつ」

「え？」

思わず振り返るミノト。

風に乗ってヒノエの後方に回り込むように移動していた「濃いピンク色」の泡が、ヒノエに当たって弾けた。

「ヒノエ姉さまーっ!？」

媚薬泡を浴びたヒノエの変化は劇的だった。

「あう」

かくん、と糸が切れた人形のように崩れ落ちる。

「……え？　……な、に……、これ……？」

心臓を鷲掴みされたのかと錯覚するほど、血流が早い。

体温は上がり、体表に赤みとして現れる。

焦点が定まらないのか、目はとろんと溶け。

小さく開いた薄い唇からは、は、は、と荒い呼吸が漏れている。

「あ、え？　体が、あつ……何……？　なに、これ……!？」

何より。

お腹のちよつとした、おへその方から感じる、頭を焼き焦がしそうなほどの、初めて感じる熱。

狂おしいほどの焦燥感。泣き叫びたいほどの飢餓感。胸を搔きむしりたいほどの寂寥感。

その全ての感覚が未知。

「あ、は……ッ、はあ、あ……なに、これ……だめ、これ、おかしく、なる……っ!!」

欲しい、欲しい、欲しい。
寂しい、寂しい、寂しい。

満たして、満たして、満たして。

体の芯が、狂ったように何かを求めている。

地に手をついた状態から一歩も動けない。少しでも動いてしまえば、何かが決壊してしまいそうだった。以前の自分には戻れなくなる何かが壊れてしまいそうだった。

命を賭けた生存競争をしているモンスターが、動かない的に成り下がったヒノエを見逃す道理はない。

本能以敵の状態を察知して回転を急停止したタマミツネの口に、エネルギーの奔流が集まった。

「水ブレス……!?! 避けて、ヒノエ姉さまっ!!!!!!」

ランスの盾を構えて守りに行こうとするが、動けない。

むしろ、適当に石を投げたら10個は泡に当たる、というような空間で、ヒノエの援護なしにミノトが泡を躲し続けていることがもう奇跡だった。

砲弾のような水ブレスが発射される。その威力は、岩をも砕く。

ヒノエは動けない。

ミノトは間に合わない。

しかし、間に合うやつがここにいる。

「させるかあッ!!」

ヒノエの窮地と見ると否や、〃当たっていい泡と当たったらいけない泡〃を瞬間的に判別して、媚薬泡は避けつつも他の泡でぬるぬるになったツミキがかつ飛んでくる。

摩擦をほぼ失った体で、走るというよりは滑走に近い状態。

ギリギリ水ブレスとヒノエの間に割って入ったツミキが、盾で水ブレスを弾く。

「ツミキ!!」

「うわああああああああっ!?!」

「ツミキ!?!」

もちろんぬるぬるのツミキは踏ん張って衝撃に耐えることができ

ないので、水ブレスの威力そのままに吹っ飛んでいくが、鉄蟲糸で空中に己の体を固定することで戦線離脱は免れた。

体の向きを調整してヒノエの側に降り立ったツミキが、手を差し出す。

「ヒノエ、大丈夫？」

目の前に差し出された手を見て「あ、ツミキの手だ」と思ったヒノエは、他のどの思考も追い越して、その手を握る。

瞬間、ヒノエの脳内に幸福が溢れ出した。

『ヒノエちゃんの手は、白くてキレーだね』

『僕がずっと側にいるよ』

『……うん。僕も、好きだよ……。ヒノエのこと、好きだ』

『ヒノエ……愛してる。僕と結婚してください』

幼少期から今まで（妄想込み）の記憶が瞬時に駆け抜ける。

ヒノエはどちらかといえば確信さえあれば自分から告るタイプだった。

『ツミキ。お腹、触ってみますか？』

『いいの？』

『ふふっ、いいもなにも、私と貴方の子どもですよ』

『……わ、動いた！ 今動いたよヒノエ！』

大きくなったヒノエのお腹に手を当てて、感動しているツミキと微笑むヒノエ。

『この子が……』

『はい、貴方と、私の……私たちのところに生まれてきてくれた子です』

『ちっちゃいなあ……あつたかいなあ……。はは、気持ちよさそうに眠ってる……ははっ』

『ツミキ……？ 泣いて、いるのですか……？』

『うん……嬉しくて、涙が止まらないんだ。ヒノエ、ありがとう……。僕と一緒になってくれて……。僕に、家族と会わせてくれて……。本当にありがとう……。』

『……これから、ですよ、ツミキ。これから、この子と一緒に……一緒に

に、楽しい思い出をいっぱい作っていくんですから。頼りにしてますね、お父さん』

『今度こそ、絶対に守ってみせるから。……ありがとう、ヒノエ。今までも、これからも……ずっと、愛してる』

我が子を間に、優しく抱擁を交わすツミキとヒノエ。

ツミキと愛を囁き合う光景があった。

我が子と三人で過ごす光景があった。

笑顔があった。温かみがあった。幸せがあった。愛があった。

一生分の幸せをツミキと子どもにもらった感覚があった。

まあ、そんな想像は現実には全く関係なくヒノエの体は大変なことになっていたが。

「ツミ、ツミ、キ……」

その手を取った瞬間、ヒノエの中の訳のわからない飢えが一気に膨れ上がった。

胸の中で暴れ狂う何か。おへそのあたりでかあつと熱くなる何か。

危険な大型モンスターと相對していることなんて一瞬で頭から

吹っ飛んだ。

気が狂いそうだった。

気が狂いそうだったから、助けて欲しかった。

ちょうど、ヒノエの目の前には信賴している男の子がいた。

だから、ヒノエは。

「——って」

「ヒノエ？」

「取ってください、ツミキ、この変なやつ、取って!!」

胸の中を暴れ狂う苦しいやつがあったから、それを信賴している男の子に取ってもらおうと、巫女服の胸元をインナーごと一気に開いたのだ。

「いいいいいいいいっ!!?」

曝け出される眩しい白い肌!

締め付けていた圧から解放され滑らかに形を変えるおっぱい!

ぽよん、なんて擬音がつきそうな勢いで飛び出してきたのに、張り

はきちんとあつて美しい形のおっぱい！

おっぱい！

頂点の桜色の蕾こそ見えていないが、南半球は完全に外気に晒されていた。

ここはモンスターが跋扈するフィールドである。

「ちよつ、ヒノ、ヒノエ!!?」

「ツミキい……早くこれ取って……ッ！　じやないと、私、私、頭が変になりそうなんです……!」

「僕の頭が先に変になりそうなんだけど!?　なのに、くそつ、視線を引き剥がせない!!」

「ツミキ、早く……早く……!!　この変なの取ってください……!」
「何を!?　え、もしかしておっぱいを揉むことの隠語なのか？　そうなのか……!?!」

それはお前の願望だ。

「あつ」

ぬるぬるだったツミキはヒノエを支えることができず、纏れるように倒れる。

仰向けのツミキの上に跨がるヒノエは、袴を腰で止める紐が解けかけており、インナーが丸見えになっていた。

「薄い橙色！　あれ、濃い……いや違う！　考える今はやばい!!」

僕の理性とか名ママミツネに狙われていることとか!!」

「ツミキいい!!!」

「人を殺せそう!な竜人族の声も聞こえるし!!」

ツミキはぬるぬるになっていたが、媚薬泡を浴びたヒノエもまたぬるぬるになっていた。

お互いにぬるぬる。ぬるんぬるん。

踏ん張れない、ということとは立てないということだ。

立たない、ということとは動けないということだ。

それでも普段のツミキならこの窮地を抜け出せたが、ヒノエの女の子の部分に視線と脳の容量を奪われているツミキの思考力は塵に等しいものになっている。

おっばい。

柔らかい。

いい匂い。

おっばい。

ヒノエちゃん。

おっばい。

熱い。

モンスターを殺さないで。

おっばい。

おっばい。

今のツミキの脳内はこれが全てだ。

おっばいのことしか考えていない。

ヒノエが首筋に顔を埋めて鼻を擦り付けるようにして匂いを嗅ぎ出したのでハンマーに脳みそを直接殴られているような顔をしている。

そんなツミキたちを、タマミツネの水ブレス二射目がロックオンしていた。

珍しく……本当に珍しく、本気で鬼気迫る声でツミキは叫んだ。

「やばいやばいやばいやばいやばいってえ!!」

「ツミキ……どうして? どうして取ってくれないんですか? こんなにも熱くて、苦しいんです……!」

「待って今は本当にやばいマジでやめて手をおっばいに持って行こうとしないでそれしたら本当にやばいヒノエちゃん待ってお願い今はまずいんだって!!」

熱に暴走するヒノエは当然聞く耳を持たない。

ツミキがどすけべ野郎なのは間違いないが、命の危機に瀕してまでエロいことを優先するような男だったか?

ヒノエの巫女服に付着した媚薬泡が、ツミキの思考をも破壊しかけていた。

「ツミキ!! ヒノエ姉さま!! 逃げてえ!!」

タマミツネの水ブレスが発射される。

レーザービームのような圧縮された高圧水が、巨木を貫きながらツミキたちへ着弾する——瞬間、ツミキは「ヒノエちゃんを守らない」という誓いで全ての誘惑と情欲を振り切り、想いが体を動かした。鉄蟲糸でヒノエの体ごと自分をぐるぐる巻きにし、同時に真横に伸ばした鉄蟲糸で体を引っ張ったのだ。

無理やりな回避行動。ろくに受け身すら取れやしない。それでも、なんとか水ブレスを避けることができた。

ツミキの手から二匹の翔蟲が離れていく。

「あ、危なかった……！」

「ツミキ、まだです!!」

「嘘だろ!？」

窮地はまだ脱していない。

水ブレスのチャージモーションを終わらせたタママツネが、ツミキを睨みつけていた。

「あいつ、距離を詰めずに戦うつもりか!？」

あからさまにツミキを警戒した行動だった。

翔蟲が戻ってくるまでまだ時間がかかる。

ヒノエは超密着状態に脳内を幸せホルモンと快樂物質がバシヤバシヤ分泌されており、心のままに力一杯ツミキを抱きしめた。

半裸のヒノエに抱きしめられたツミキの理性がKOされた。

そこに、水ブレスが三度襲ってくる。

もう、回避する術はない。

「ヒノエ姉さまっ!!」

この中で唯一まとまな思考状態を維持しているミノトの決断は刹那だった。

ミノトは、大量の泡を回避するのに精一杯だった。

だから、ツミキたちを助けに行けなかった。

媚薬泡を食らって、動けなくなることはクエスト失敗を意味するからだ。

泡を避けなければならぬから動けず、間に合わなかった。

なら、泡を全て無視して駆けたなら、どうなる？

「ああああああつ!!」

脇目も振らない全力疾走。

いくつもの泡がミノトに当たり、ぬるぬるにして摩擦力を奪っていく。

ミノトは天才ではない。ツミキのように、摩擦ゼロの世界を初めて経験して、即座にそれを利用して動き回るなんて芸当はできない。そんなこと、ミノトが一番わかっている。

足を滑らせ、転げそうになった時、ミノトは前方へ手を伸ばした。その先に伸びる鉄蟲糸。

ツミキのように大地を駆けることが出来ないのはわかっていた。

「なら、空を翔ければっ!」

翔蟲に引つ張られるようにしてミノトの体が射出される。

途中、三つの媚薬泡がミノトの体に当たって弾けた。

一瞬、意識が流されそうなほど熱に頭を焼かれそうになる。歯を食いしばった。それだけでは足りなかったから、ランスを強く握りしめた。

唇を噛んで、叫ぶ。

「私が、この大楯を選んだのは——守りたい全てのものをつ! 必ず守り切るためですつ!!!」

着地して滑る体を木にぶつけて無理やり止めて、引き抜いた大楯を地面へと叩きつける。

直後、巨人に踏まれたのかと錯覚するほどの『破壊』がミノトの体を叩いた。

衝撃が骨の奥を痺れさせ、内臓を掻き回していく。

背にしている木からミシミシとへし折れる寸前の断末魔が響く。

それでも、構えた盾だけは絶対に離さない。離してなるものか。

「ああああああああつ!!!」

裂帛の気合いを迸らせ、激流にも等しいモンスターのブレスに真っ向から抗う。

足が沈む。

膝が屈しそうになる。

心だつて挫けそうだ。

けれど、立ち向かう意志を捨てることは絶対がない。

絶対に守りたいものが、彼女にはあるから。

一瞬だったか。それとも秋秒か。

全力を振り絞ったその先で、ミノトの意地がタマミツネの水ブレスを征した。

肩で大きく息をして今にも倒れそうなミノトの後ろでは、理性を失ったケダモノが少女を襲っていた。

「ヒノエ……ヒノエ……」

「つみきい……もつと、ぎゅつとしてください……そしたら、この変なの、少し落ち着くから……!」

お互いに背中を手を回し合つて硬く抱きしめ合う二人。

ヒノエはツミキの旋毛に顔を寄せていて、ツミキはヒノエの谷間に顔を埋めていた。

ヒノエの体に経験したことのない甘美な電流が走る。その電流は、ヒノエの疼きを少しだけ取ってくれた。ツミキは深呼吸していた。

かく……かく……と、ゆつくりと、でも確実にヒノエの腰の辺りが動いていた。

流石にミノトは切れた。

「滅べ色魔!!!」

「グフウえ!!!」

ヒノエをツミキから引き剥がして、そのままツミキの腰を掴んでジャーマンスープレックス。

頭から地面に叩きつけられたツミキが潰れた悲鳴をあげる。

目を回すツミキの胸ぐらをつかみ上げて、木へと叩きつけた。

「しっかりしてください!!!」

「おっぱい……?」

「このままじゃ全滅です! 私もいつまで保つかわかりません!!
今、まともに戦える可能性があるのはあなただけです!!!」

「おっ……ぱ……」

「しっかりしろ! 目を覚ませ! どうせ……どうせ私たちを捨てて

出ていくつもりのかせに、今さら惑わされないで!! 自分で決めたことなら貫き通して!!」

「お……」

「このまま——守るって誓いもなかったことにするんですか!!?」

吐息が交わる距離で叫ぶミノト。その後ろでは、雄叫びを上げたタマミツネが滑走してきていた。

獣の息の音が聞こえる距離。明確な命が終わるまでのカウントダウン。胴長の体を丸め、反転させるための体勢。胴と遜色ない密度と太さを誇る尾による叩きつけ。弱った獲物を、もつとも信をおく己の武器で仕留めにくる、獣の本能。

俯くツミキを瞳に移すミノトは小揺ぎもしない。命の危機が迫っているにも関わらず、その心はぶれない。

なぜなら——。

「——いいや。その誓いだけは、絶対に破れない」

顔を上げたツミキの瞳に宿る信念の強さを、ミノトは知っているから。

ツミキが片手剣を抜刀する。

タマミツネが巨大な尾を振り下ろした。

大気を潰しながら迫る尾。ツミキの手の中に翔蟲が戻ってくる。それを、二匹まとめて頭上にアンカーとして固定した。

鉄蟲糸が宙を貫く。

「お前……正気に戻った後どうやってヒノエちゃんと接すればいいんだばっかやろお!!」

質量と筋力の暴力で叩きつけられるモンスター tail を、眼前で構えた小さな盾で弾くという絶技。

瞬間、ツミキが空を翔ける。

翔け上がりながら盾の殴打を叩き込み、タマミツネの直上へ身を躍らせ、振り上げる盾が叩きつけられる。

タマミツネの頭を、地へと叩き落とした。

「——ああ」

着地するツミキ。

ミノトを、ヒノエを守るように立つその背中を見て、ミノトは息を漏らした。

「この背中に、ずっと私は——」

木々の間から差し込む光を背負うその背中が、ミノトは普段よりもずっと大きなものに見えていた。

瞬間、ミノトの脳内に性欲が溢れ出した。

「……っ!?!」

当たり前である。

一つ被っただけで精神がアへる媚薬泡を三つも体でぶち抜いてきたのだ。

今の今まで理性を保っていた方が奇跡というべきだろう。

もしくは、ヒノエにとっては未知の感覚だったそれも、ミノトに取っては既知の感覚だったことも理由として挙げられるか。

ミノトは我慢する術を心得ていて、ヒノエはそれを知らなかった。

『もっとおっつきくなったらさ、父ちゃんみたいなハンターになりたいんだ。そしたらさ、ミノトちゃんもヒノエちゃんも、みんなみんな僕が守ったげる! ……うん! 約束!』

『ミノト! ……だいじょ……う……ぶ……? うわあ!? ごめん!! ほんとごめん!! 見るつもりはなかった! 本当だって!! 待って待って、殴るならせめて一言だけ言わせて!! ——ミノトの裸、とてもエロいとおもぶヘラア!!!』

『綺麗……。僕、あんまりこういうこと慣れてないから、月並みなことしか言えないけど……すごく、綺麗だよミノト……。えっと、その……抱きしめても、いい?』

『ミノト……ミノト……っ。好きだ……大好きだ……! 愛してる、ミノト……っ!』

幼少期から今まで（妄想込み）の記憶が瞬時に駆け抜ける。

ミノトはどちらかといえば確信があっても相手から告られたいタイプだった。

『ミノト……』

『もう、今日もですか?』

『うん。だめ……かな?』

『だめじゃ……ないですけど……。こんなに毎日だと、子供が出来ても知りませんよ』

『むしろ嬉しいよ。ミノトと僕の子供だ。絶対可愛いんだろうな……僕、親バカになる自信がある』

『本当にスケベなんですから……。でも、私も……親バカになりそうです』

ツミキとミノトが、手を取り合って寝室に消える。

『——あ、産気づいた。産まれそう』

『医者あああああつ!!! 医者を呼んでこい息子たち!!! 娘たちはお湯と清潔なタオルをつ!!!』

『慌てすぎですよ、ツミキ。感覚的にまだもうちよつと余裕がありそうです。家まで歩いて戻れるかな?』

『いや、でも、だめだ! 僕がお姫様抱っこで連れていく! ミノトに何かあったらいけないから!!』

『もう……。もう10回目なんですから、慣れてください。それに、お姫様抱っこは今は流石に恥ずかし……。あつ』

『幾つになっても、君は僕のお姫様だよ。と言っても、僕ばかりおっさんになつて行って、君はずつとあの頃の……。僕が恋した君のままだけどね』

『何言ってるんですか。……確かに、ツミキは歳をとりましたけど……。どんなツミキでも、変わらず大好きな、私の旦那様です。……子どもたちに揶揄われてしまいますから、お姫様抱っこはちよつとだけですよ』

結局お姫様抱っこをやめてもらえず、子どもたちに囲まれて顔を赤くしているミノトがいた。

ツミキと愛を交わし合う光景があった。

たくさんの子どもたちに囲まれて幸せに微笑む光景があった。

恋慕があった。情欲があった。幸せがあった。愛があった。

一生分の幸せをツミキと子どもたちにもらった感覚があった。

まあ、そんな想像は現実には全く関係なくミノトの体は大変なこと

になっていたが。

「これ……まず……あんっ!!?」

咄嗟に体に伸ばしそうになった手を掴んで止める。

それだけで精神力を振り絞らなければならなかった。

だというに、たつたそれだけの動作をしただけで、服の中であれやこれやら擦れてしまったてはしたない声を漏らしてしまう。

バチバチと頭に直接電流を流されているかのように視界が明滅して、思考が澱むように真っ白になっていく。

お腹の奥が切ない、切ないとくうくう哭いて、胸の辺りからは早く、早くと飢えた獣のように催促される。

体が熱い。

意識が消えそう。

胸の中で狂いそうなほどの情欲が渦巻いている。

常人では一瞬で廃人になりそうなほどのそれを、必死の思いで耐えるミノト。

なんならタマミツネの水ブレスを防いだ時よりも必死かもしれない。

「こんな、もの……を……! あ、ヒノエ姉さまは!？」

同じものを浴びたヒノエの身を案ずるミノト。

「よかった……」

ヒノエは地面にぺたんとお尻をつけて、タマミツネ相手に猛攻を仕掛けるツミキを熱っぽい目で見ていた。

とりあえず、今のミノトのように頭がおかしくなりそうなほどの情欲には犯されていないように見える。

ただ、両手が股の間に収まっているような気がしたがミノトは気のせいだと思うことにした。

というか、正直誰かに気を使えるだけの余裕がミノトにはなかった。

端的に言えばエゲツナイほどムラムラしていた。

カムラのムラムラのミノト。

「は、あつ、く……あ、力が、はいらな……ひう!」

ミノトの精神力は「異常」と言えるほどに強靱だったが、我慢には限界というものがある。

もうちよつとでも動いたら気持ちよくて、でもそんな弱い刺激じゃ全然足りなくて、でもでも強い刺激なんてこんなところじゃ絶対できなくて、ならどうすればいいかなんてちつともわかんなくて、泣きたくなるぐらい満たされてなくて……。

理性がぐずぐずに溶けていくのがわかった。

必死に決壊しそうな感情の波を堰き止めているそれがなくなった時にどうなるのか、恐ろしい。

体に手を伸ばして、止める。

それをもうずっと繰り返ししている。

とつくの昔にミノトの精神状態は普通ではなくなっていた。

少し離れたところでは、タマミツネが苦し紛れに放出した泡の弾幕を鉄蟲糸をくくりつけた片手剣を振り回し、叩き切っているツミキがいる。

虚をつかれたタマミツネの顎を、盾で三連打していた。

その相貌には常にはない必死さが見て取れる。

彼の懸命な横顔を見るのは、何年ぶりだろうか。

媚薬泡とは別の理由で、ミノトの胸が高鳴った。

「頭良くないのに、贖罪とか罪とか難しいことばっか考えて……。昔のあなたはもっと能天気で、ひたむきだったでしょう……。スケベなのは、変わらないですけど」

過去があつてツミキは変わった。

なら、変わる前のツミキだっていた。

ミノトは、そんなツミキを知っている。

あの時感じていた熱を、覚えている。

ミノトはずっと、覚えているのだ。

「——ミノトっ！ あいつ隣のエリアに逃げ出した!! 捕獲するんだろう、罠を渡してくれ!」

ミノトの前に空から降ってきたツミキが着地する。

記憶よりも成長して、たくましくなった顔があった。

「(――あ)」

なんで、と問われると分からない。

ただ、その時、ミノトは無性にそれがしたかった。そして、それが全く嫌ではなかった。

「ミノト……?」

罨を渡してくれ、と伸ばされていた手を掴んで、引き寄せる。

体勢を崩したツミキの顔の位置が下がり、ミノトの頭と同じ位置に。

そして。

「――ツミキくん」

ちゅ、と。

とても小さなりっぷノイズ。

ミノトの瞳の中に、ポカンと口を開けたツミキがいた。

なんで、と問われると理由は分からない。

ただ、ミノトはきつと媚薬のせいだと顔を真っ赤にして答えるだろう。

そうではないことを、誰よりも知っているくせに。

タマミツネは無事に捕獲された。

ただ、その代償はあまりにも大きかった。

「死にたいです……」

「えっと……」

「殺してください……」

「どうしよう、ヒノエが暗黒面に落ちた……」

ベースキャンプの寝台の隅に座り込んで、ツミキに背を向けるヒノエ。

立ち直る気配が微塵もない。

まあ……君、だいぶあれだったもんね。

「ミノト、助けて……」

「どうせ私はヒノエ姉さまと違って淫乱でむつつりな最低の尻軽女……どこでも発情する欲求不満の喪女です……」

「お前もか……」

ミノトに助けを求めるツミキだったが、体育座りをして延々と納品ボックスに話しかけるミノトを見て諦めた。

普段は努めて隠しているが、本来のミノトはネガティブ思考が癖になっっている、自己評価の低い女の子。一度このモードになったら長いことをツミキは知っている。

「一日開けたけどなんも変わってないな」

タママツネの捕獲成功から、一日の時間が過ぎていた。

というのも、タママツネを捕獲して帰ってきたツミキが見たのは、ツミキという異性の目^ががなくなったことで心の堤防がほぼ決壊してしまっていたヒノエとミノトの姿。

彼女たちの名譽のために詳細は省くが、割と女の子に対して幻想を見ていたツミキのファンタジーに少しばかりヒビが入る光景だったとだけ言っておこう。

それでも、ツミキの幻想の女の子像は壊さない程度で済んだ彼女たちの精神力を誉めてやりたいぐらいだ。

自分の、もちろんヒノエの限界に近いことも悟っていたミノトは、なけなしの理性を雑巾搾りのように搾り出してベースキャンプまで帰還し、ツミキに一日絶対に入ってくるな入ってきたら殺すとまで言ってベースキャンプに籠城。

彼女たちの状態をある程度察していたツミキはこれを承諾。ツミキとしても色々とマジで限界だったので、正直助かったというのが実情だ。ツミキとて、色々引きずっていたり後悔していることもあった。

そして、一日経って戻ってきてみるとこの有様。

惨状が惨状だけに無理もない。無理もないが、もうなんか死ぬほど空気が重くてツミキは泣きそうになった。

恐るべきはタマミツネの媚薬泡。

三人の絆にヒビが入りかけていた。

「あー……ここにずっといても仕方ないし、とりあえず、帰る？」

このクソボケはこういう時に気を使えないアホだが、ずっとベースキャンプにいても埒が開かないというのはその通り。

三人に必要なのは、心の休息だった。

「お風呂に入りたいです……」

ボソリ、とヒノエがつぶやく。

ピクリ、とミノトの肩が動く。

ベースキャンプを締め出されたのでフィールドにずっと居たツミキは途中で水浴びなんかもしたが、ベースキャンプにいたヒノエとミノトはもちろんそんなことはできない。する余裕がなかったともいう。

今、二人の体臭はツミキの女の子ファンタジーをぶち壊す可能性を秘めていた。

それが良いか悪いかで言えば、カムラの里の未来的にも二人の女の子のプライド的にも絶対ダメである。

ちなみに、今ツミキは二人の半径10メートル以内には近づけないようになっている。

「そういえば……ここから歩いて4日ほどの場所に、ユクモ村という温泉が有名な観光地があった気がします……」

「温泉ですか……いいですねミノト……。カムラの里に帰るよりずっと近いというのがとても良いです……」

「クエストの報告は……?」

ふらふらと立ち上がり、幽鬼のような足取りで下山し始める二人を見てため息一つ。

まさか放つていくわけにもいかないので、追いかけた。

その前に、ふと足を止めて片手でおでこに触れる。

「……惑わせてるのはどっちだよ」

切なそうに呟きは、風に吹かれて消えていった。

「さて。ユクモ村に行くかどうか……強引に引き留めれば二人とも無理にはいかないと思うけど……どうしようか」

13話 それぞれの答え（分岐：ユクモ村に行く）

瞼を閉じれば今でも思い出せる。

目を開けていることも難しい、白い夏の日だった。

結婚って何だろう、と、ツミキがぼやいた。

まだ幼い子供の疑問は、すうっと抜けるような青空へ消えていく。結婚とは何だろうと考えた。

その言葉の意味は知っている。

好きあう男女が契りを交わし、番いになる儀式のことだ。

その言葉の意味を述べると、ツミキは「そういうことじゃなくて」と小さく首を振る。

「その人のことが好きなら、ずっと一緒にいたいじゃん。結婚なんかしなくても、ずっと一緒にいたらいいじゃん。なのに、結婚なんかするから出ていっちゃうんだ……」

その拗ねたような言い方で、ああ、と事情を察した。

要するに、ツミキは寂しがつているのだ。

大好きな家族が……姉が、結婚して家を出ていくことに。

きつと、この末っ子の頭の中は、「結婚なんてしなかったら、姉ちゃんも優しい義兄ちゃんもずっと一緒に暮らせるのに」という、子供らしい合理さと無邪気さを備えた理屈でいっぱいになっているに違いない。

最も、その主張は認められなかったみたいだけれど。

何でも器用にこなせる幼馴染でも、どうにもできないことがあるらしい。

珍しくいじけているツミキの不貞腐れた姿がおかしくて、思わず笑みが溢れた。

益々、拗ねてしまったツミキの唇が尖る。

「何だよう、じゃあ、そっちはなんで結婚なんかするのか分かるのかよっ。僕は、絶対に結婚なんかしない方がいいと思うけどねっ」

そう言われて、少しばかりの思案。

答えは、すぐに出た。

きつと、最もらしい理由なんてない。

好きなら結婚しなくても一緒にいればいいのは、その通りだけど。それでも、男と女が、世界中の男女が結婚しているのは。相手のことが好きで、大切に、愛おしくて。

その気持ちをカタチにする中で、結婚という契りがある。そして、その契りには意味がある。

なら、どうして結婚するのかと問われれば。

「わたくしは……わたくしが大好きな方の特別には、わたくしだけがなりたいたい、そう思います。だから、結婚には、その特別を……その……」

言葉の最後は恥ずかしくて尻すぼみになった。

自分に自信がなく、引つ込み思案な彼女は、当たり前のように自分を信じていない。

誰かに愛される特別。それが結婚だとすれば、それは、彼女にとっては、とても甘美な響きを持つ。

だって、結婚によって生まれる特別は、たった一枠。

自分を信じていない彼女は、その枠が複数の場合に、一番特別に自分になれるなんて考えたことすらない。

でも、それが一枠だと決まっているのなら。

それだけで、結婚には意味があると思う。

……姉妹で結婚できないのは、本当に口惜しいけれど。彼女の答えを聞いて、ツミキは首を捻っていた。

そして、一言。

「結婚しなくても、これから先ずつと、ミノトちゃんは僕にとって特別な女の子だけど」

あまりにも揺るぎなくそう言うものだから。

そして、それが考えたこともなかった言葉だったから。

ポカんと、小さく口を開けて、ミノトはずつと固まっていた。だから。

「もちろんヒノエちゃんや父ちゃん達、里のみんなも僕の特別好きな人たちだなあ」

なんて言葉は、ミノトの耳には入っていなかったけど。

ああ、そんな事もあったなと。

感慨に耽ることは少なかった。

あの言葉は、あの瞬間は確かに自分にとって特別だった。だが、ミノトの胸の奥が切なく疼き始めたのは、あの瞬間からではない。

いつから？　と言われると、分からない。

いつの間にか、というのがきつと正しい。

なんてことはないのだ。

本当に何でもないような日常の中で、ミノトの気持ちは膨らんでいった。

森を歩くときに、転げないように危ないところは手を引いてくれたり。

不器用な自分があたふたしていると、いつの間にか側に来て手伝っててくれたり。

うさ団子をもらったとき、好きなうさ団子の味が一緒なのに、いつもそれを自分に譲ってくれたり。

ミノトが傘を忘れて出かけて雨が降った時に、傘を持って迎えにきてくれたり。

本当になんでもないことが、ミノトの胸の奥を高鳴らせた。

言葉だけじゃない。その行動の一つ一つや声の優しさから、ミノトを特別に思っていると伝わってくる。

いつも自分と姉を比較してしまい、自分の価値を殊更低い位置に置いているミノトに、貴方は特別だと言葉で、行動で訴えてくるツミキは心の柔らかい部分に刺さってしまった。

ちよつと……いや、ちよつとどころでなくスケベなところは、どうかと思うけど。

それでも、こんなスケベを許してやれるのは自分だけだと思おうと、仄暗い優越感が胸を満たした。

ツミキがミノトを特別扱いしているのと同じように、ミノトもツミ

キをミノトにとって特別な場所に置いた。

ミノトがツミキの一番特別な場所にいないことに気付くのに、そう時間は掛からなかったが。

ミノトは姉のことが好きだ。大切だ。敬愛もしている。

自分より優れた、とてもすごい人だと思っている。

そんな姉が、自分には見せたことのない顔で、ツミキの隣で笑っていた。

そりゃあ、気付く。

気づかない方が無理だ。だってミノトは、ヒノエのことが大好きで、誰よりもヒノエの近くにいたのだから。

これはとても単純な話だ。至極明快、疑問を挟む余地なんて1ミリもない、当たり前。

無愛想で不器用な可愛げのないミノトより、朗らかで器量が良く花のように笑うヒノエの方が、優れている。

優れている人は、愛される。優れている人は、間違えない。

だから、優れていないミノトよりも……優れているヒノエとツミキは、優れているお互いを選んだのだ。

これは、そういう当たり前の話だった。

だから、ミノトは芽生えかけていた気持ちの芽を、心の奥底にそつと仕舞い込んだ。

もう、二度とそれが出てくることがないように。

ちくりと痛む心の傷の上から、嘘の包帯を巻いた。

じゃないと、これから先。

二人の幸せを、心から祝福できない。

そんな自分には、なりたくなかった。

まあ、それはそれとして。

ヒノエにふさわしい男になってほしいと、ミノトはツミキにめっちゃくちや厳しくなるのだけでも、それはまた別のお話。

……そうやって、ミノトは自分の気持ちをずっと押し込めてきたのに。

「……わたくしは、やっぱり……出来損ないの妹、なんですね」
もう、この胸の痛みの誤魔化し方が分からなくなってしまうていた。

死にたいほど恥ずかしい記憶をこさえた人間が行うことなんて、古今東西そう変わったモノじゃない。

結論、無かったことにするのである。

「無理です!!!」

というわけには、いかなかったようだが。

石造りの大浴場。

濁った温泉に肩まで浸かったミノトは、つい先日己の痴態を思い出して、両手で顔を覆った。

湯に浸からないように纏めた髪の間隙から覗く、竜人族特有の細長い耳の先まで真っ赤に色づいていた。

温泉で栄える観光名所、ユクモ村。

ある意味、苛烈を極めた狩猟の疲れを癒すため……もとい、竜人族姉妹の女の子としての沽券のために、彼女たちはユクモ村に数ある浴場のひとつに訪れていた。

妹の反応に、ヒノエは曖昧に嘆息した。

「でも、ミノト……。そうでもしないと、まともにツミキと話すこともできませんよ」

溪流フィールドからユクモ村まで、徒歩でおおよそ4日の移動時間があった。

普段であれば、その間取り止めのない雑談が止むことはなく、気まぐさとは無縁の旅路になっていたはずだった。

しかし、その4日間で会話らしい会話は無かった。

無言だったのだ。

原因は決まっている。

気まづかったのだ。

ヒノエとミノトは羞恥心が邪魔してツミキの顔を見ることさえ難しかったし、ツミキに至っては例の出来事を思い出すと夜中にこっそりソロクエストに出発することは不可避。そのため、可能な限りヒノエたちを視界から外して見ないようにしていた。

もちろん脳内にはバツチリと焼き付いていたのだが。

ともあれ、これほどまでに気まづい空気は三人とも経験が無かった。

こんな状況ではあるが、三人とも別に互いのことが嫌いになつたわけではない。だからこそ、なおのこと居心地の悪い空気を一刻も早く払拭して、元の関係に戻りたいのだ。

そのためにヒノエが提案したのが、例の出来事を無かつたことにするということ。

「ですが、ヒノエ姉さま！ ツミキが私たちの……あの……あれを……その……とにかく！ ツミキがあれを忘れて無かつたことになつてできるわけがありません！ 絶対に網膜を超えて脳に焼き付いています……！」

「それは……私も無理だと思いますけど……」

「これから先、ツミキは私たちを見るたびに思い出すはずですよ。一見普通の顔をして、その裏では鼻の穴を伸ばしてスケベな顔をして視姦してるはずですよ！ そんなスケベと普通に接しろなんてできるわけがありません!!」

「気持ちには分かりますけど……なら、ミノトはどうしたいんですか？」

「決まっています。消すんです、記憶を」

「……一緒じゃない？」

「消すのはツミキの記憶です、ヒノエ姉さま。人間の頭は強い衝撃を与えるとも記憶が消えると里長が言っていました。鈍器で何発か入れればいくらツミキといえど無事では済まないでしょう。私がランスを選んだのは今日この日のためだったかもしれない……！」

「記憶の前に命が消えそうですね……」

死因は頭部損傷による脳震盪。兇器はランスの盾。

「ミノト、わがままばかり言っても話が進みません。このままではダメなのは、ミノトもわかっているでしょう?」

「それは……そうですけど……」

ヒノエの言葉に、ミノトは唇を噛んだ。

このままではいけないことなど、ミノトもわかっている。

何より、ミノトもこの状況を放置することを望んでいない。

でも、気持ちの面で「それはそれ、これはこれ」と切り替えができませんかというそれは話が違った。

裸を見られる……ぐらいなら今までにもあったが、流石にムラムラしているところも、それを解消していると察せられるところも、今まで見られたことはないし、見せたこともない。

今までとはレベルが違うのだ。

そう簡単に飲み下せるような出来事では無かった。

とはいえ、ミノトがそれを抱えて今まで通りになんて土台無理な話。

現状維持を目指すのであれば、無かったことにするのが妹の方にとって是最良の結果になるだろう。

遠くの空を見つめたヒノエが、「まあ」と溢した。

「私は無かったことにする気はないですけどね」

自身の感情の処理に四苦八苦する妹を横目に、姉の方はまるで蛇が獲物を仕留めるときのように目を細めていた。

【ユクモ村に行く】

四方を山に囲まれた台地を切り開いた場所に、ユクモ村はある。傘のような丸い円状の屋根の民家が肩を寄せ合いながら立ち並ぶ。けれど、そこに雑多な趣はない。

観光地、いや名所というべきか。

人々には活気があり、人口の少なさを感じさせない賑わいがあった。

僻地と言えるような山中にあってそれなりの人口を抱えているのは、ひとえに村の名産である温泉のためであろう。

観光地として客足の途絶えないところには、観光客を狙って商いが盛んになり、金を求めて人が移り住む。

ツミキは、これほどまでに人が多い場所というのを経験したことがなかった。

常であれば、相応にツミキのテンションも上がって、ワクワクしながらユクモ村を探索していた。

温泉街とは切っても切り離せない、えつちなお店も探したりしただろう。

けれど、色々あつてとてもそんな気分になれないツミキは、暇を持て余したようにブラブラと行く当てもなく歩いていった。

「宿がない……!!」

というわけではなく、宿を探し求めている。

「観光地とは聞いてたけど、本当にこんなに人が多いなんて……!!」どこも宿が満室で入れないなんて考えてなかったよ!」

右を見ても左を見ても人がいるというほどの混雑ではないが、そもそも村の建蔽率的に宿泊用の宿は限られている。

観光地あるあるだが、旅先で最も困るのは拠点の確保なのだ。

旅の宿を探しているのは、もちろん体を休めるためだ。ヒノエやミノトは狩猟からの長旅で疲労しているし、ツミキとて休息なしでは活動できない。

一般人と比較して凄まじい身体能力を誇るハンターからして「お前本当に人間?」と言わしめるツミキにとって、唯一弱点と呼べるもの

があるとするれば、それはスタミナだろう。

体力を減らさないハンターはいても、スタミナを減らさないハンターはいないのだから。

だが、ツミキが温泉で一休みする前に宿を探しているのは、また別の理由があった。

「どうしよう、もう、本当に結構我慢の限界きてるんだけど……!」

息の荒いツミキの手は、まるで隠すように股間に伸びていた。

そういうことである。

数日前からの溪流での一連の出来事は、思春期の男の子には刺激が強すぎたようだ。まあ、当然だよな。

温泉そっちのけで宿を探しているのは、一刻も早くソロクエストに出発するため。

タマミツネを捕獲した後、流石にフィールドで1回ほどソロクエストに出発していたが、流石に思春期、そんな安易なクエストでクリアできるほどふにやっではない。

それに、ユクモ村までの道のりではヒノエとミノトの目もあってソロクエストに勤しむことができなかったのだ。

つまり、限界までムラついて尚且つ最高のオカズを脳内に焼き付けた上で、現在5日目といったところ。

頭の中はもうムフフなことではいっぱいだった。

お店? は? それヒノエとミノトよりもエロいの?!

この時ばかりは、少年は触れるおっぱいよりも至高の脳内メモリを選んだ。

まあ、場所が見つからなかったというのものもあるけども。

血走った目で何かを探しながらユクモ村を徘徊する異常性欲ハンター。

字面にただで身の毛のよだつ悍ましさだが、実際にそれを目撃する人、特に女性の恐怖は計り知れない。

すでに「やべー変質者がいる」と噂になっていた。

こうして彼の結婚はまた遠のいて行くのである。

これ多分記憶消すのは無理なんじゃないかな。

一方その頃！ ユクモ村の温泉の1つでは！

「でも、ヒノエ姉さまっ。このまま忘れるなんて私はできませんっ！」
ミノトはまだ踏ん切りがつかないなかつた。

忘れたい記憶なんて、生きていけば腐るほどあるだろう。

失敗の記憶も、恥ずかしい記憶も、辛い記憶も。

けれど、今回に限って言えば、お互いに忘れましょう——なんておためごかしで済む段階なんて飛び越えている。

というか、あんなことやこんなことまで見られておいて「忘れた」なんて抜かしやがったら、正直、手が出る。

タママツネの媚薬に当てられて、乱れに爛れてあれやこれ。

吹き飛んだ理性。性欲に突き動かされたあの間の出来事は、相手の記憶からも、自分の記憶からも消し去りたい記憶であることは確か。それでも。

「——き、キス、したのに、忘れられるなんて！」

それを忘れたなんて言われた日にやあ、乙女の沽券に関わる。

思い出すのも恥ずかしい。あのキスは媚薬のせい、決して自分の意志なんかじゃない。ツミキがキスのことを訊いてくるのは絶対ダメ。

でも、自分はこんなにも恥ずかしくて、ドキドキして、もうそのことしか考えられなくなってるのに。それなのに、ツミキはケロツとしていて、あまつさえその事を忘れるのは、なかったことにするのは、許せない。

そんな微妙な乙女心だ。

そして、それはそのままヒノエにも当てはまる。

ほとんど半裸で抱き合っていたのがヒノエだ。

それを、好きな男に忘れられるなど……。

もし、ツミキが忘れたなんて言ったら……。

「…………ふふ」

今の「ふふ」をもしツミキが聞いていれば3日ぐらいはヒノエの前

に姿を現さなくなるぐらいの感情が込められていた。

なかったことにするのは許せない。

でもことさら意識されるのも、するのも耐えられない。

二人、特にミノトの心情はこんな感じで「じゃあどうしたらいいんだよ」と言いたくなる（実際ツミキは内心そう思ってる）塩梅だったが……年頃の乙女とは得てしてそういうものだと思うしかない。

思ったところで、ミノトには「無かったことにする」「以外の解決の糸口がないのが痛いところではあるが。

何やら覚悟を決めたような、底冷えするほどの綺麗な微笑を絶やさないミノトとは対照的に、ミノトの頭の中は堂々巡りをする一方。

ミノトとミノトの違いは明確で、それは簡単にわかることで、だからこそ竜人族姉妹のやり取りを外から見ている彼女には、それが分かった。

「ごめんね、話は聞かせてもらってたわ」

え、だれ？

と、竜人族姉妹が振り向く。

そこには、腕を組み訳知り顔でうんうんと頷く銀色の髪をボブカットに切り揃えた女がいた。

「要するに……計らずして好きバレした男の子とどうやって接したらいいのか……二人はそれを悩んでるってことよね。それなら、話は簡単よ」

「あの、失礼ですがあなたは……？」

ミノトの問いに、女は。

「そうね……私のことは幸せ絶頂の女ハンター、縮めてハッピーさんとも呼んでちょうだい！」

キメ顔でそう言った。

元々、だ。

タマミツネの狩獵クエストを受けたハンターたちがいて、そのハンター達がクエストを失敗した原因が、クエスト対象のタマミツネが媚

薬泡を分泌する特殊個体だった、ということ。

そうして、その特殊個体の捕獲依頼がカムラの里に舞い込んできたわけだが……。

タマミツネは溪流にいた。

溪流に一番近いギルド支部がある町村は、ユクモ村である。

一番最初にタマミツネの狩猟クエストを受注したハンター達がユクモ村を拠点に活動しているのは道理だろう。

ユクモ村を拠点にしているハンターが、名物である温泉に足げく通っていて、たまたまそこにヒノエとミノトが入ってくることも、あるだろう。

これは、そういう話。

よく見ると、ハッピーさんは女性らしい丸みのある体つきではあるものの、明らかに鍛えた後のある筋肉が体の各所に見て取れる。

特に、武器を取り扱う手は、同業者なら誰でも分かるようなハンターのタコとマメの影があった。

ミノトが気付く。

「あ、その手、もしかして……」

「え!?! もしかしてこの指輪のこと!?!」

「そうではなく」

「分かる? わかつちやう? あのね、実はちよつと前にね、彼に結婚してほしいってね、プロポーズされたの!」

「あ、はい、おめでとうございます」

ぐいぐいぐいっ!

詰め寄るハッピーさんと仰反るミノト。

ハッピーさんが苦しそうに胸に手を当てた。

「ぐ、くう!!」

「急にどうしました!?!」

「いや……改めて見ると脅威の戦闘力の差に愕然としたわね……肌も水を弾く若々しさだし……肌は私も負けてないからね!」

「本当に急にどうしたんですか?」

「でもお、彼は私はずっと好きだって言ってくれたのよねえ、えへへ」

「え、なに……？ 惚気？ もしかして初対面の人に惚気を打ち込まれている……？ それに、なんですかこのテンション。お酒を飲んだ時のゴコク様のような脈絡のなさ……」

「ミノト、それ、多分正解です。この方、お酒を飲まれてるようですよ」「真つ昼間からお酒を飲んで温泉に浸かっている……!?!」

酒を飲んでいるらしいハッピーさんからは、確かに独特のアルコール臭があった。

ミノト的にはダメ人間の役満だったが、温泉街では割と普通の光景だったりする。

それも、

「祝い酒よ、祝い酒。えへへ、さいっこうに幸せだからね、今。お酒も進むってもんなのよう」

当人がこんな調子なのだから、さもありなん。

「つとと、ごめんね、私の話ばかり。いやね？ もっと話したいけどね？ でも、そっち、なんか深刻そうだから」

酔っ払いからアドバイスをもらっても……というのがミノトの正直な感想だった。

だが、今は藁にも縋りたい気持ちであることは事実。

性にまつわる事が原因で男の子と微妙な関係になった経験など、ミノトにもヒノエにもないのだから。

「ふむふむ、なるほどね。そんなことが……」

ミノトからざっくりしたことあらましを聞いたハッピーさんは、顎に手を当て頷く。

目を瞑るその様子から、話を吟味しているのが伝わってきた。

「つまり、お互いに女と男を見せ合った幼馴染と、どう接したらいいか分からなくなってる、と」

「いや、あの、端的に言えばそうなのですが、生々しい言い方はやめてもらっていいですか？」

「若いわね、少女よ……。歳をとるとね、エロい話なんて息を吸うように出てくるの。これぐらいで恥じられるのも今のうちよ。……私はまだ若いけどね!?! 誰が年増よ!」

「聞いてないし言ってもない！」

「あれ？ よく見たら……あなたたち、竜人族？ え、うそ、じゃあ私よりもめっちゃくちや歳上……？」

「珍しいかもしれませんが、私もミノトも見た目通りの年齢で判断していただいたので差し支えありません」

「へー、そうなんだ。ここの村長さんよりは若く見えるなどは思ったけど、へー。ちよつと胸揉んでもいい？」

「今何の脈絡がありました!？」

「いいじゃない、減るもんじゃないし、同じ女同士だし。私のも触っていいから。……触れるぐらいはあるから！ 憐れまないでくれるかしらー！」

「よ、酔っ払い……！」

ミノトは露骨に相談相手を間違えた、という顔をした。

「里長しかりゴコク様しかり……！ やはり、酔っ払いはアテになりませんね……！」

「み、ミノト、気持ちわかりますが、力になってくれようとした人に対してそれはちよつと……」

「ピノエ姉さまは優しすぎます。私はギルドで働き始めて学びました。酔っ払いは一度優しくするとどこまでもつけ上がると。甘さはいりません、ただ肃々と切り捨てるのが本人のためでもあります」

「ミノトに何をしたのかしら、里長とゴコク様……」

主にだる絡みとツミキのことでのいじりです。

そんな二人を尻目に、グビグビと酒を飲み干したハッピーさんが、「ぷはあ！」と満足そうに息を吐く。

本人の申告的にはまだまだ若いそうだが、飲みっぷりからはおっさんの風格が滲み出ている。

「いえ、言動含めてだいたいぶきついですが」

「あははは、妹ちゃんは厳しいねえ。でも、それでいいんだよ。だってここ、男いないし！ もちろん彼も、あなた達の幼馴染もね」

「……当たり前ではないですか？ ここは女湯ですから」

「そう当たり前。当たり前のことなんだよ。好きな人には可愛い、綺

麗って思われたい。それと同じくらい、当たり前のことだよ」

「……？」

「あはは、ま、逆に言えばさ。そういう人がいないところまで、可愛くないなくなつていいってこと」

ハッピーさんの言っている言葉の意味がわからず、ミノトは首を傾げた。

「ありや、伝わらなかつたかな。んんん、私、やっぱり話をまとめるのが苦手だなあ……。んん、ちよつと待ってね、えつと……」

「……私は、何となく分かる気がします」

「ヒノエ姉さま？」

「自分のことを好意的に受け取って欲しい人がいる時に、好意的に受け取ってもらえるように振る舞えばいい。それがたとえ、相手を騙すことになつたとしても……相手の心を踏み躪る結果に繋がるとしても。そういうことですよね？」

「いや重い重い怖い！　そこまでのニュアンスはなかつたかなー!？」

よく思われたい相手に、よく思われてるならいいんじゃないってぐら
いだったよ!？　え？　これ幼馴染くん大丈夫なの……？」

「……」

「その苦々しい渋面はどういう感情なの妹ちゃん」

四字熟語で言うのと二律背反。

「お姉ちゃんはちよつと想像以上にグラビモス級で、妹ちゃんは温泉ドリンクの配合みたいに複雑みたいだね」

ちよつと話しただけでも、二人からの好意の大きさが伝わってくるようだった。

話では正常な乙女なら1ヶ月はまともに顔を見ることもできなくなるような経験をしておきながら、その幼馴染と関係を断つ選択肢が最初から無かつたのがその証拠だ。

よほど、抱えている気持ちが大きいのだろう。そして、信頼しているのだろう。

なんだかとても面白いことになってそうだな、と、ハッピーさんはまだ見ぬ幼馴染くんに想いを馳せた。

一体どつちに刺されることになるんだらうその子、とか。けれど。

そうであるならば、これは、本当に簡単な話でしかない。ハッピーさんは目を閉じて、あの運命の日を思い出す。

「私も、似たような経験したからさ。まあ、あなた達とは逆だったんだけど……。彼が……。まあ、こう、興奮して、辛抱たまらんって感じで襲ってきて、美味しく食べられちゃったんだけども」

「食べられる……？」

「ヒノエ姉さま、私が耳を塞いであげますね」

「当然、彼のそういう男の人の性欲とか、男の部分を見たよ。恥ずかしかつたし、初めてで怖かつたし、緊張もしたし、まともに顔、見れなかつた。……でもね、嫌じゃなかつたよ」

「恥ずかしいことは、恥ずかしい。」

「気まずいことは、気まずい。」

「そういうふうを感じるように、感情というものはできている。」

けれど、それが何処を起点に生まれた感情なのかは理解しなければならぬ。

「嫌いだから気まずいのか。」

「好きだから恥ずかしいのか。」

「起点が変われば、その感情の色は大きく変わる。」

「好きだから、嫌じゃなかつた。好きだから、嫌いにならなかつた。……むしろ、嬉しかった。私は、彼とそういう関係になりたいってずっとずっと思ってたから。だから、何だろうな、えつとね……。あーもう、本当に私はこういうの苦手だな！ とにかく！ 私が言えることは一つだけ！」

「ヒノエにあつて、ミノトになかつたもの。」

「それは本当に、すごく簡単なことだ。すなわち。」

「別に、無理やり忘れる必要も、なかつたことにする必要もないんじゃない。だって、あなた達も、その子も、お互いに意識し合ってるんですよ。いいじゃん、意識させとけば。世界には雄と雌しかいないんだ

し、〃好き〃にはそういう感情も含まれるように、私たちはできてるんだから」

そう。

最初から、なかったことになって、する必要はなかったのだ。

「で、でも、それだどっ」

「あー、分かるよ。恥ずかしいよね。でも、それでいいのよ妹ちゃん。きつと向こうだって恥ずかしいんだし、逆にこれを利用して、ドキドキさせてやるぐらいの気持ちでいいのさ。その幼馴染のことが好きなら、それでいいとハッピーさんは思いました」

あまりにも投げやりな回答だと言う人もいるだろう。

けれど、それで良いとハッピーさんは答える。

起きたことは無くならない。なかったことには決してならない。

その時に感じた感情も、想いも、刻まれた記憶も、それが大きな出来事であればあるほど思い出となって残り続ける。

大きな思い出は、色褪せない。

それを未来への財産とするか、過去の呪いとするかは人それぞれだ。

「良いじゃん、恥ずかしくても。最初に言ったけど、大人になったらエロい話なんか平気でできるようになるし、それ以外にもたくさんのごとが変わっていく。できるようになることもあれば、できなくなることもある。それもきつと、今しか出来ない青春だよ。……えへ、なんつって、みたいなあー」

「意識させたままで、良い……?」

ハッピーさんの言葉を咀嚼するように、ゆつくりとミノトがつぶやいた。

今、ミノトの頭の中ではたくさん感情が混ざり合っているだろう。

元々、不器用な子だ。こうなると、自分の中の気持ちを整理するのにも時間がかかる。

だけど、ミノトは時間がかかっても必ず答えを見つけるから。そして、見つけた答えを迷いなく実行する意思を持っているから。

そうなってしまえば、ミノトは躊躇わない。何があってもやり遂げる強さが彼女にはある。

ずっと一緒にいた姉妹なんだから、それぐらい、分かってしまう。

「……途中から、手、離れてましたよ」
だから。

余計なことをしてくれたなどでも言うように、竜人族の少女はハッピーさんを見つめていた。

「あの時のことはっ！……ヒノエ姉さまとも話あったのですが、その、狩猟中の事故ですから。もう、気にしてません。気にしないようにします。あの時、きつとお互いに普通の精神状態じゃなかったと思いますし……。だから、もうお互いに遠慮し合うのは辞めましょう。ツミキも、それで構わないでしょうか」

結局、ミノトが選んだのは現状維持だった。

ツミキが確保していた宿屋に向かったミノトは、開口一番そう言い放った。

「うん。……僕も、できるだけ意識しないようにする。最初は、難しいかもしれないけど……」

「……それも分かっています。無理に忘れろとは言いません。でも、あからさまにえっちな目で見てはこないでください。それは怒りますから」

「分かった。とりあえず、今は大丈夫だよ」

「今は……っ」

「あつ。い、いやっ、何でもない！ さーてと、それじゃあ僕も温泉に行くかなあー！」

「……？ あれ、この匂い……ねえ、ミノト。この部屋、何だかツミキの家と同じ匂いがありますね。使ってる木が同じなんでしょうか」

「言われてみれば……でも、どうして……。……いや、これ

……ツミキ？ っていない！ 逃げましたね!? 正気ですかあのスケベ!? 以前あれほど竜人族の女は匂いに敏感だから分かると言っ

たのに……ッ!!」

今日ここで寝泊まりするんですよ!?! といふかなんで部屋が一緒なんですかあ!! といふミノトの叫び声が、ユクモ村に響いた。

温泉から戻ったツミキがミノトにこつてりと絞られた(不健全な意味ではない)夜。

街灯も消えて、村人も寝静まり。青白い月明かりだけがそれを見ていた。

めちやくちや換気した宿屋の一室で、むくりと簡素なベットから起き上がる者が1人。

一緒のベットで寝ている少女を起こさないように、ゆつくりベットから這い出して、少し離れたところに設置し直したベットへと膝を乗せた。

囁くようなベットの軋みが暗闇に吸い込まれる。

薄手のシーツを持ち上げれば、心が締め付けられるほど欲していた熱が、歓迎するかののように肌を撫でた。

ベットで眠る少年が身じろぐ。

少年の眠りがとても浅いことを知っているので、まだ、まだ起こさないように、心の声に逆らうことなく、そつとシーツの中へと体を滑り込ませた。

体中が少年の熱に包まれたようだった。

あまりの幸福感に、小さく体が震えた。

体が、心が、本能が、ずっと欲していたものがそこにあった。

「ツミキ」

少年の耳元に唇を寄せて、とても小さな声で、けれど蠱惑的な響きを孕ませて囁く。

少年は、それだけで目を覚ました。

「……ヒノエ?」

「はい、ヒノエですよ。起こしちゃってすみません、ツミキ」

「それはいいんだけど……あれ、もう朝? ……いや、それよりもなん

で僕のベットにむぐ」

ツミキの唇に、ヒノエの人差し指が添えられた。

「ふふ。しーっ、です、ツミキ。ミノトが起きちゃいますから」

雲が途切れ、窓から差し込む青白い光が、ヒノエを優しく包み込む。

真つ白な肌。

濡羽のように瑞々しく黒い髪。

切れ長の目に収まる、稲穂のように美しい瞳。

女性らしい曲線を描く体はどこも柔らかそうで、けれどスラリと引き締まっっていて、芸術のような美があった。

紅い線が控えめに引かれた白のインナーは、ハンター用のインナーでは考えられないほど扇情的で、思わず目を奪われてしまう。

「え？ インナー？ ……ヒノっ」

ベッドが軋む音が、ツミキの言葉をかき消した。

「ねえ、ツミキ……」

ツミキは、ヒノエを見上げていた。

ヒノエは、ツミキを見下ろしていた。

二人を世界から隠すようにシートが掛けられている。

ヒノエの熱い、熱い吐息が、ツミキの耳朶をくすぐった。

潤んだ瞳が、魂が焦がれる熱量を湛えてツミキを射抜く。

早鐘を打つ心臓の鼓動はどちらのだろうか。分からない。

この熱い息は誰のだろうか。分からない。

この熱は、この体温は。分からないほどに、溶け合っていく。

ヒノエの顔がそつとツミキの耳元によった。

「ねえ、ツミキ。あの時の続き……しませんか？」